

繪本  
平家物語  
全

091347-000-1

特11-119

平家物語図会

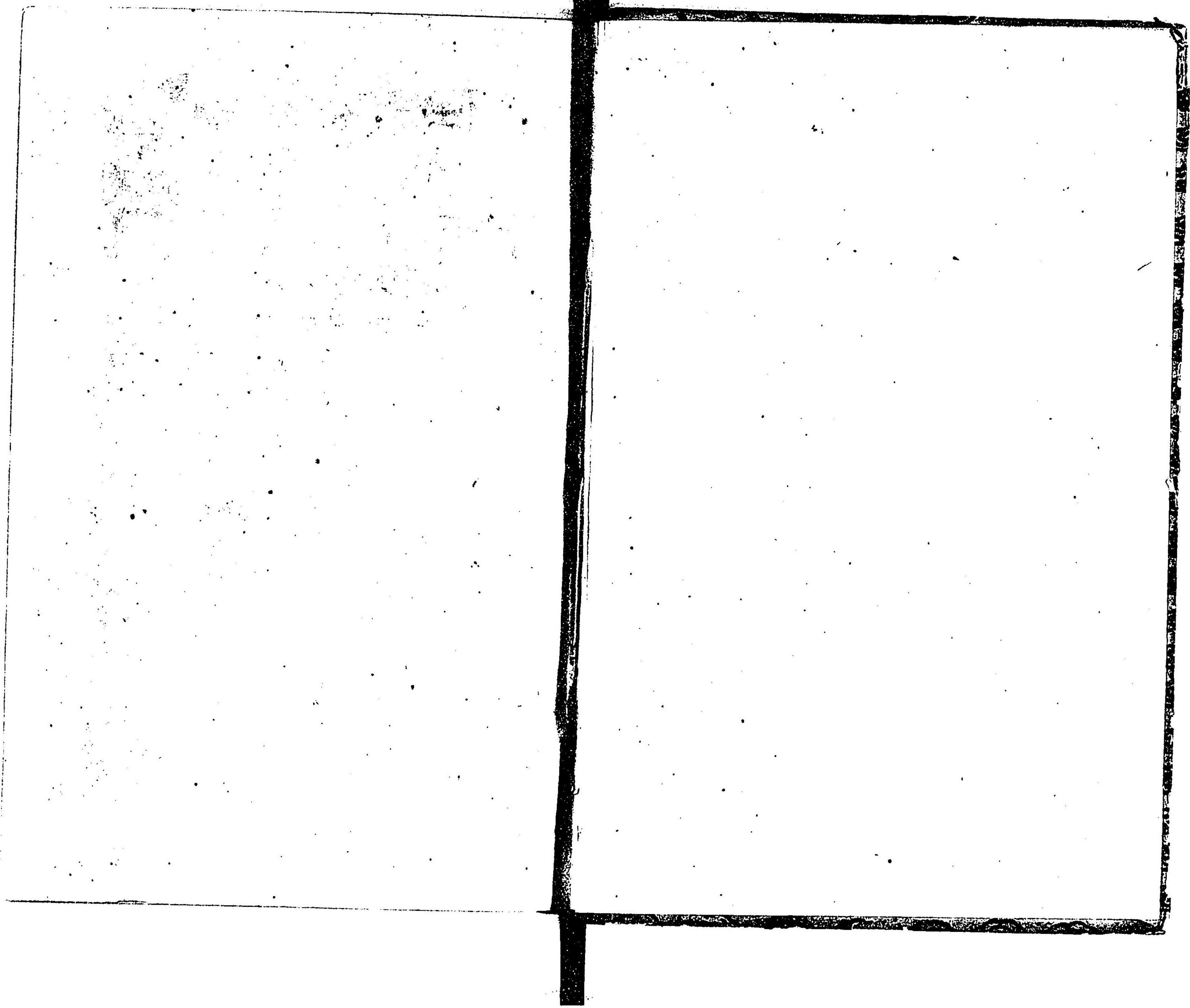
高井 蘭山 / 述

M19

DBN-2241









平家物語圖會自叙明治十九年九月十五日內務省交付

大喜怒哀樂

惡欲謂之七情人無不有只其發中節者聖

也

神釋戀喪者世態也七情與世態交而狂

言綺語成焉

世有平家物語其流布也舊矣憶此作成繼

徒之手故詭譎

方便過半雖然源平兩家立于朝一盛一衰

自六條天皇仁安至安德天皇壽永平族之奢美萬民之惱

亂如目擊然抑平清盛公微也出入于花族貴門掃鬚塵拭

糞汚童子戲喚名高平太保元平治以降僅識于世其祖正



盛藏人仕五位家執諸國受領之鞭。後擢至正四位下。父忠盛自堂下。武士昇漸交殿上。其子而立地。究人臣位。官丞相。祿數邦。一門悉列公卿。食半日本。強爲帝王。外祖長失人臣。禮追捕權門勢家。損亡雲客殿上。沒倒其莊園。擅屬子孫。掠奪其資財。濫與所從。進退帝位。奉射親王。無怕容。焚失佛寺。屠斬僧侶。不酸色。剩遷法皇於城南離宮。流博陸於海西絕域。雖然悚虎威。貴賤束手。縑素戴足。古來雖有叛臣。未有若斯。本邦王法。當此時將墜地。天下士庶欲噉生其肉。存忠者

不堪而適。雖有起兵者。或有反忠。或兵不足。不遂事。終爲朝敵。而亡。不痛哉。相國禪門。偶免水死。而火薨者。僥倖耳。積不善。餘殃及家族。平氏漂西海。之波瀾也。沈浸月潮汐。深憂危掩。霜蘆葦脆命。皇居行宮。唯扁舟。如龍頭鶴首。何卿相入。埴生。小屋奈金殿。玉樓何。鳴衛噪洲渚。增曉怨。楫聲響磯間。傷夜。魂聽啼遼海。野雁則愕。兵士竟夜。漕艦見簇。遠松白鷺。則疑。源氏昧爽。舉旗翠帳。紅閨變。蒹簾露屋。銀爐熏烟。化蜚藻。鹽火暨緒。方維義。逐平族於太宰府也。公卿徒步。女房素跣。破



足鮮血益紅裙色踰嶮攀峻裳衣寸裂亂白袴裔遺調度捐  
 筭簪墮寶失珠其艱其難不俟言竟有天運循還之期倏視  
 盛者必衰之理鎌倉右幕下起東國岐蘇義仲發北國岐蘇  
 先入追平家鎌倉範賴義經後及討岐蘇之非法殫平氏於  
 攝州一谷讚州八島長州壇浦無有子遺焉平盛源衰世保  
 元壽永雄榮花榮耀娛二十餘年夢後白河法皇肇視白日  
 晴天宇宙億兆安堵勉業鎌倉家勳績於是乎廣矣大矣人  
 物之善惡是非將士之智愚剛臆列夫之義貞女之操祭乎

明于此今為兒女子誌平家物語圖會十二册讀人冀弃恠  
 異說探真面目有温故之一助云。

文政九年丙戌夏至

東武南郊芝伊皿子隱士

高井蘭山叟題



世の様のうつりかえるのあやしきものにて昔琵琶法師といふもの有  
てられお語らせむ爲ふこの物語をつゝりものせしよとなりされのと  
さなき女の童といへともうのうたふときゝて世の様ものゝあわれ  
とよくさゝあまつれゝのなくさみともなし、どうやきると今の世  
と成ていふしへのさとひ言もみやひ言のことくなりもて遊きてと  
さあきうたにの見おほほゝしく聞にえあかおのつうら手あとう  
れさるものとありえてにけるとこたひ高井某か思ひとこして今様に  
わかむなうなる繪たくみの北馬といへるふ心たましひも入たらん如  
く繪うさあさせ誰よもよくうの事のころとしりて世の人の盛お

とろふ物のあえれとまのあさりみるか如く目とあくさむる繪雙紙と  
つゝりあらためしめてしといふへしあわれこの物語といにしへ  
の法師う語るとたゝて耳とあくさめ今の繪たくみうゑかけると見て  
目とあくさむそのなくさむかたのよふつれ時と追てかゝりにたれと  
いよしへ今にけちめあきものゝたゝ人の心ありけりと筆とるついで  
にふととかしう思ひよれるよりやうてうゝろふしるしつけぬ



平家物語圖繪序

樂事莫如讀書美事著書爲大何也讀書乃有醍醐膏梁之味不  
換焉者其嗜之甚至忘寵辱遺勢利殆仙遊也著書迺教人遷善  
違過遠出夏楚捶撻之上焉故凡好書或自娛或及人雖有驕駁  
弗一疵瑕可議者要當以美善與之頂者高井某就平家物語節  
取其菁華淺其文俗其辭加以圖繪便於婦女兒睨之觀覽其意  
善矣或謂此書舊有成刻國字行文非難讀者今更刊之似無謂  
矣且如夫成書乃當時事實後世所取信也今變雅訓雜以俚諺

則使覽者轉謂傳奇小說無根假托之屬母乃不可耶罹貫仲作水  
滸傳三世舉子不類金聖嘆妄割裂唐詩竟遭腰斬得不小懲耶  
嗟是何病諸此唯節取成書非如二氏之妄夫人性有厚薄力有強  
弱瀛洲方壺孰不欲一遊邪以波濤遼藐故絕思耳今呼曰踰步  
可底人敢不蹶然而起書固可樂而卷帙浩瀚則未至蔗境半塗  
而廢如綿力薄質何試爲之早知其味必將爭赴而染指焉故凡  
節其成書之繁抽善華便披覽者猶之仙家縮地之術也豈不嘉  
賞哉刻已成不容無緒言書賈文魁堂爲之來謁余於是乎道之



文政丙戌仲秋阮望

宅山處士

平家物語作者并琵琶法師謠物之事

此物語作者の一定せざる。勸修寺良門の後孫葉室家とせしめ六人迄聞えたり。一説に後鳥羽院の朝。北國平家信濃前司行長と云人あり。温故の名譽ありしが。後文學を捨て遁世したるを。慈鎮和尚の一藝あるもの貴賤を別なき情をうけたましり。此入道を厚く扶助し給ひたり。入道或時此物語を著し。性佛といふ尊者にをしへ。琵琶にうけ謠ひものとせしむ。此の兼好法師の徒然草にも出たまはば。皆人よみてまゐるべし。扱山門の事をゆゑしく書あせし。行長入道慈鎮和尚の願を淺うさざりしに報ふ筆力とや。先哲の評に義經の事委しく書載せざるとも。範頼の事委しく知らざりたるにや。多の事あるし洩せること遺憾あれといへり。又性佛のものと東國のうまきにて關東の武士に知己多かりし。武士のと馬の業等。性佛をして東國の武士と問尋させ筆記せしよし。琵琶法師うまひもの、平家の性佛の後を如一檢校と云。此弟子覺一城一は兩人あり。傳へて今に及で絶せ。大寺お於て頓寫法會あどあり。必き高官の琵琶法師を請じて語らしむ。是法座にゆかある衆中長座の退屈を慰んが爲。且平家一門主従の名をも謠出さば。自然と貴き大法會に遇て。修羅道の苦患を休め。出離生死頓證菩提の縁あるとの意あり。かく數百年に傳るとい作者行長入道も希有の功德ありし。緒又長門國赤間の關阿彌陀寺と云。安徳天皇の御寺めて平家物語八十六卷の寫本ありとぞ。世に十六卷の長門本と云。是より抄出せしあるべし。此外に八坂本鎌倉本嵯峨本等あり。此物語時代もふまにさば。書さまも今めりしうらす。珍重とべたを世下まで婦女兒童の卑陋こととに馴。古雅あるとい一向に耳お通せ。時に隨て里巷の卑語に換さども。金沙を流し弄て涅泥を貯ふの思ひ。大方の君子何と評せん。慚愧赧然せざらんや。

文政十丁亥臯月

高井蘭山翁再誌





安徳天皇

二位尼公









後五位平敦盛

一統萬國志通



内大臣平重盛

今井四郎兼平





新中納言平知盛

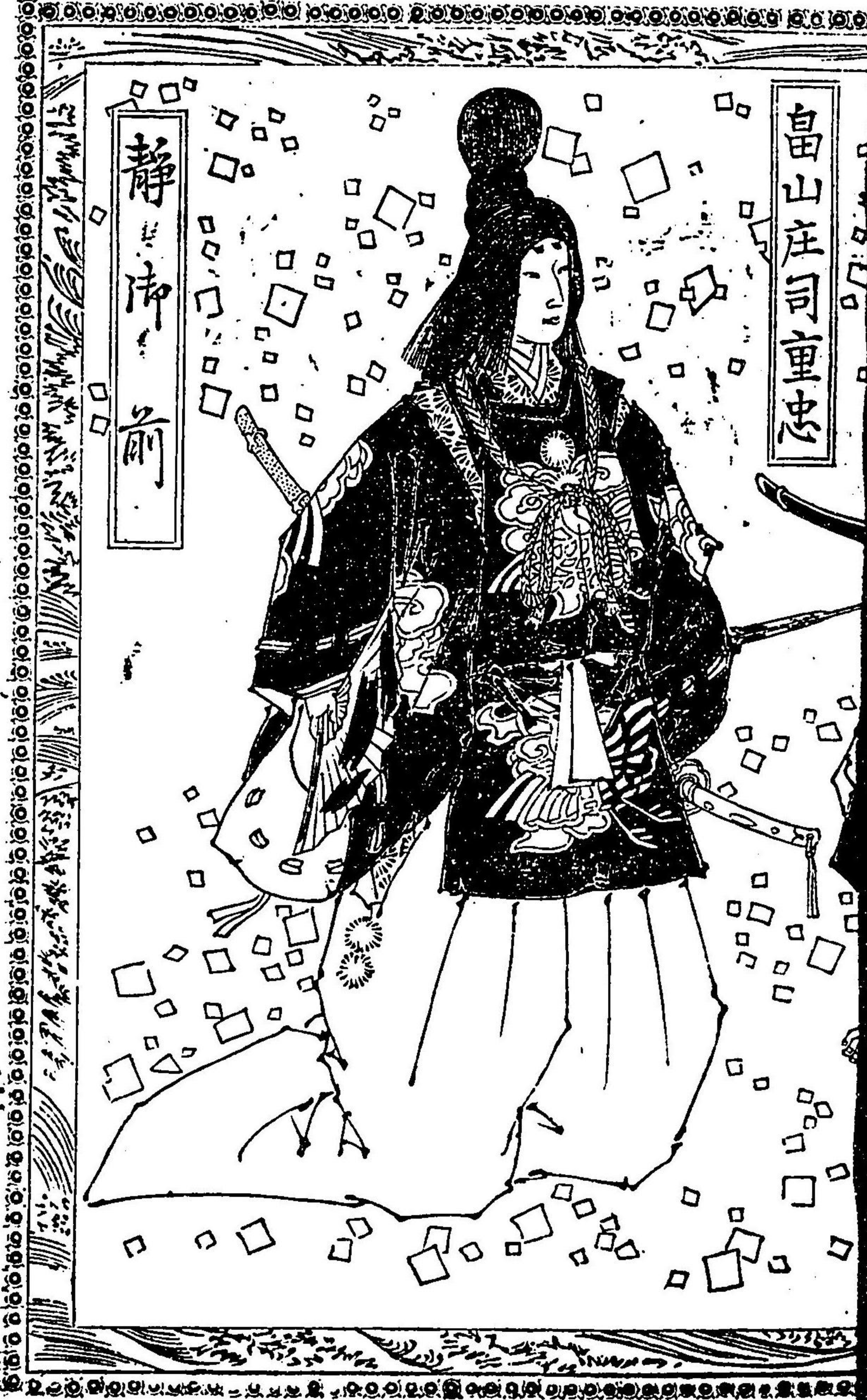
源氏  
平知盛



能登守教経

薩摩守忠教





静前

白山庄司御前



武藏坊元慶





木曾冠者源義仲



佐藤四郎兵衛忠信

佐藤四郎兵衛忠信



平家物語圖會 總目錄

○卷之壹

●平家の起原清盛公繁榮。妓王妓女佛御前の榮枯。

○平忠盛朝臣御堂の法師を捕る圖

●近衛院二條院二代の后。延曆類打論攝政の供人資盛の無禮と咎

●新大納言成親卿謀叛。山門神興を振奉つて師高兄弟が監行を訴訟を

○東山鹿谷俊寛が山莊へ會合の圖

○卷之二

●多田行綱返忠。成親卿一身黨類被召捕。重盛公憐愍

●重盛公新大納言の命乞。門脇教盛卿丹波少將の命乞。重盛公諫諍

●新大納言配所を卒去。藤藏人謀。ひて徳大寺殿昇進。鬼界嶋ひて康頼卒都婆を流す

○源左衛門尉信俊大納言入道の御返事を北の方へ奉る圖



九郎判官源義経



○卷之三

●丹波少將成經。平判官康頼。法師赦免。中宮御産皇子御降誕。

○俊寛僧都赦免。洩て悲歎の圖。

●有王俊寛が専途を見小松大臣病名醫と拒。同逝去。

●平家より關白殿を流罪し。公卿殿上人多くの官を削。法皇を鳥羽殿に押籠奉る。

○卷之四

●主上を降し春宮を踐祚なし。奉る。高倉宮御謀叛顯れ御所を開せ給ふ。

○源三位入道高倉宮に御謀叛を勸奉る圖。

●長谷部信連剛勇の働。高倉宮園城寺入御衆徒。頼給ふ。

●三位頼政入道父子自害。高倉宮御最期。三井寺炎上。

○卷之五

●都を福原へ迂す。頼朝卿東國に旗を揚る。文覺上人荒行並圖。

○入道相國物忤を見圖。

●佐殿院宣を頂戴。平家より討手の將士七方餘騎富士川より遡上る。

●都を平安城へ還す。中將重衡薩摩守忠度を將として奈良を攻。新院崩御。

○卷之六

●小督殿を捕尼となす。木曾次郎冠者義仲信州へ旗を建。

●四國西國平家に背。太政入道熱病に薨去。城資永永茂の軍事。

●越前國火燈城軍。加賀國砥浪山軍。木曾殿妙策。

○羽生八幡へ願書を納る圖。

○卷之七

●加賀國篠原合戦實盛討死。山門の大衆木曾殿に語れ平家小背。

●主上へ供奉し平家都を避。經盛卿の息經正御室の御所へ御暇乞。

○小松三位惟盛卿都落北の方御息名残を惜する圖。



●青山の琵琶傳來の説。平家福原を落籠を解て西海に漂ふ

○卷之八

●木曾義仲藏人行家都に入。高倉院四の宮法皇へ召る

●緒方惟義九州の平家を追出す。前右兵衛佐殿將軍の院宣を賜ふ

○備中國板倉川にて倉光成澄。瀬尾兼康組討の圖

●播州室山軍藏人行家働。木曾法住寺殿を攻奉り狼藉を成

○卷之九

●範頼義經宇治勢多を破石田爲久栗津原に義仲を討

○佐々木梶原宇治川先陣を争ふ圖

●一谷軍。熊谷平山先陣を競ふ。生田杜軍梶原平三二度の蒐

○生田森軍梶原源太殿に梅花を折簀。戦ふ圖

●一谷落城。平家諸將士討死。一門再び海上に漂ふ

○卷之十

●平家諸將の首大路を引渡す。法皇讚州の平氏へ院宣を下さる

●重衡卿關東下向小松三位維盛卿高野山にて剃髮す

●小松三位中將維盛入道入水。宗清義氣佐々木盛綱藤戸の海を渡す

○佐々木盛綱藤戸の海の淺瀬を尋ぬる圖

○卷之十一

●讚州八島軍義經武功。景清水尾朝引。義經誤て弓を流す

●伊勢三郎智計教能を降す。壇浦船軍平家滅亡

○豊前國門司關長門國壇浦にて平家の面々入水の圖

●梶原義言鎌倉殿義經を擣氣せらる。平宗盛公父子梟首

○卷之十二

●土佐房正。俊堀河夜討伏誅。義經都落難風に吹戻さる



○土佐房正 俊堀河夜討の圖

●頼朝卿日本國總追捕使を賜ふ。文覺流罪。六代御前を斬しむ

●平家物語圖會灌頂卷

●建禮門院御落飾吉田より小原へ御移住法皇小原御幸

●御往生

已上

平家物語圖會摠目錄終

凡例

●平家物語發端に。祇園精舎の鐘の聲。諸行無常の響ありと書出たる。天竺の月蓋長者は。家富榮へけれ共。邪見放逸にて。釋尊五百人の羅漢を引て。託鉢修行われ共。長者一錢一撮の施をせず。釋尊是を化度し。佛法に皈せしめ給へ。無二の信者となり。資財を抛て祇園精舎を營立。釋尊に。献れり。今云大堂伽藍之。鐘を架て撞。其響自然と諸行無常を觀すべし。老たるも若きも。もろく死し行ざる一人もなし。千萬年も常住することは叶ぬ故。無常と云。沙羅双樹は天竺にあり。花咲てうつくしと眺る内に。うつろい來るより。頓て散落る盛たるものも。いつしか衰ふ時あり。花開てより最早散まどりの。知であるに異ならん。太政入道官祿身に餘り一門まで榮花を究。美服美味管絃舞樂。酒色に耽るも咲たる花に等く。衰へ散る時あからんや。是を戒めて。諸行無常。盛者必衰の句を取出たり。然るに入道相國忠盛の子といへ共。實に祇園女御の生給へ。清盛公と云人出て。天下を已が物とし。榮耀の限を罄すも。其根元祇園女御にかゝるゆゑ。祇園精舎の鐘の聲と書出したりの。是等筆を取ての活用と云もの。この物語の書ぶるも古風あるゆゑ。引書にキ用るとあり。され共



ふるびたる辭共の。女兒れ耳に遠きあり。一ツにと紙數も張大に至るを欲せざるまゝ。此彼書更る處多し。止とを得ざれば。凡此物語を讀兒女の心得とあるべき種々を。一ツ二ツ出して會得しやすからしむると下のごとし。●法皇の天子御位を讓給ひてり。太上天皇と稱し。それが御剃髮佛門に入給ふをや。●一院の天子の御院居。二方おとす時に。先あるを一院。次なるを新院と稱す。●女院にやういんと訓べし。女御女房と同例之。女一の宮。女三の宮に。よとつめて訓來れり。天子何番目の女と云と。三番目の女子あらば。女三の宮と云。●大内山と。則内裡のことに。雲井雲の上と云と。●大臣以上の某公三位以上の某卿と書例之。但し武將にすべて。公の字を書と。太平記中比より。●賴朝卿。賴家卿。實朝公と書。●三代目右大臣たるゆゑ。●春宮東宮の兩様。通じ用れ共實の一にわらず。帝の皇子親王宣下ありてより。一品某親王。皇女某宣下の後。某内親王とや。扱親王より。は跡嗣と定る方を。儲君。又太子。東宮共や。内裏の東に御所を建られ御所の名を春宮とや。●神達部と。殿上人之。●行幸は天子に限る。御幸は法皇。新院。仙洞中宮(后)に書之。行と御と字差て。稱と同じ。平家物語五の卷の初に。治承四年六月三日。福原へ御幸と書出づるは。行

幸の誤なり。これの時の主上安徳天皇の行幸之。其外所々に。行と御と取違あり。皆改め正す。親王と宮に。行啓と云。●當今。今上其時々の主上之。●三位を訓にさんみと云。●觀音をくわんのんと訓と。上の字を眺てよむと下を約て訓と定式なり。しかりとて位音と仮字を附べきか。太輔少輔と八省の下司。輔の大小されたいふ。せうふありせうゆふと訓。誤。輔をゆうの音とす。其誤來ること舊しければ。今皆仮名を少輔と改て。よむ時の左も右も心次第たるべし。●甚しき。伊勢太輔をいせのおはすけと訓に至る。餘りに言ととなり。八省と。中務宮内式部兵部民部。●右兵衛督右兵衛佐右衛門尉等。右の字を訓となり。●賴朝卿右兵衛佐殿と云ふ。●山門等に堅者と有と僧の職掌之。然るに堅は本字豎にて。じゆ。りつと云音あき。を天台宗從來。誤來れる之。今改がたし。●三井寺と比叡山の末寺本名園城寺之。●三井寺の清瀧院。紀州那智に飛瀧權現皆瀧をりやうと訓。此字のりやう之。瀧をらうと訓とし。いつ比より。誤讀にやしき。瀧をたきと訓。更に解しが。漢字を用るあらば。漢土に。飛泉懸水瀑布をこそ用と瀧をたきと云と更にあし。●二卷に丹波少將の辭禁廷に紫太宰府より腹赤の貢を獻る。其使步行路十五日と定たるよし書り。是平家物語を筆せし人の不穿鑿



筑紫と九州の總名之。肥後國宇土に腹赤濱あり。腹赤の地名にて。魚の名にあらす。景行天皇筑紫を巡り見給ふ時。此處にて魚を供御に奉りし例にて。古より大内へ献せし。太宰府より。丹波少將あんど是を知らざるべし。全筑紫と云より。太宰府と書し。作者推量の間違あるべし。順の和名抄に鱈の字を出すれども此字。字彙。正字通。康熙字典にみへざれば。日本限の字とみへたり。此所にて網し献せる。何と云定めし。俳諧季奇の鈔ものおどに。腹赤の鱈と云も。取にたらざ。腹赤と云濱にて捕し魚と云と。平家物語一部に。かゝる僻言共餘多されば。物の明證に。引用するに足すと。唯其書ぶりの古めかしきり慕し。山とばかりある。比叡山のこと。寺と計り。三井寺のこと。奈良と斗と。興福寺か東大寺の内を云。上日の者との。地下にて勤番に當り詰居る者。咫尺する。側近よる。和州神南備山の訓にと南備。此類讀法。煙をけむりと訓假名のけふり。外際限あり。一々誌さす。六の巻に仲國が供に具したる。面部吉仕丁と云り。めぶきつちやう共云て。今の仕丁。禁廷の小人をいへり。今の世に物毎取にもたらせと除るを。ねぶらつちやうといふも。是を誤りし詞。天下諒闇と。内裏の御中陰。日吉住吉をよしと訓。後世

のわざ之。木曾先生義方。城太郎助長他書に照し考へ。義賢資永の文字に改む。凡此類外も多し。一に述す。甲をりぶとくする。非之。甲冑のよるひかぶと。俗前々に取違來たり。官名の皇后宮后のとうと訓す。まど訓之。行宮と。帝王行幸駕輿の止る所を云。龍頭鶴首と。天子の御船。鶴と云鳥水災を除るゆゑ。船に彫つくる。八巻め木曾殿猫間中納言殿。食を進らす處に。合子とある。中にて口の合。器今も。食籠の類。牛飼を小牛健兒といわれし健兒と。けさげあること。云義にて。輕き者の名目。足輕躰をも健兒と呼し。ありとみゆ兒を。訓。反也。ちも。同意。蓮花鳳輦。天子の輿。蓮花と寶珠の形。鳳凰の銜る輦。輦。駕輿と。帝の輿を昇者を云。三條中納言朝方。卿壹岐守朝親が子壹岐判官朝泰と云類。朝の字は。まど訓へし。名乗に用るに上に置て。下に置て。いとも訓。あれども義朝の次男朝長。父の諱字を上に用る故。小山朝政結城朝光などの。一字貫ひ請たる類も同例。唯一通りあら。小倉山百人首。中納言朝忠。朝詠集の朝綱。皆。まど訓にて知べし。鎌倉へ院宣を賜る段に館の躰を云て内外侍ありとは。間席の事にて。玄關の遠侍。まど訓に同じ。士の義にあらす。凡僧の名。貴賤に拘らず。吳音に訓と



通例之木曾殿の手書大夫房覺明をかくめぬ。天台座主明雲大僧正をめいらん。三井寺の圓慶法親王をるんけいと。平家物語に訓をつけしゆるか。世上多く漢音に訓共。甚僻言之。たどへハ佛經の熟字と名につく。正覺の覺無明の明を取て覺明とつかんに。漢音に訓べき義あしかる不吟味ある訓を是と心得て。本を讀ん。片言お異あらざ。第一耳お立て聞も聞苦し。右等の誤の悉くかな附を改正す。●悉相の仮名のしようじやうの少將の仮字のせうしやう之。此二ツのみ細字繁さ處彫刻の煩しさを厭ひ。悉相少將とす。仮字差と笑とかかれ。●九卷目に佐々木宇治川の先陣して。宇多天皇に九代の後胤近江國住人。佐々木三郎秀義が四男佐々木四郎高綱と書たる。甚の誤之。これにて秀義が九代にて高綱の十代之。其上三郎秀義にあらざ。佐々木の家の。宇多天皇教實親王。雅信。扶義。章經。經方。季定。秀義。と續秀義の佐々木源三とて十三の時源廷尉爲義の養子と成保元平治に義朝に隨ひ。武功度之。壽永三年七月。伊賀國平田城を攻落し。痛手負。七十三歳にて死。鎌倉殿勳功第一と定らる。九代目高綱之。又佐々木三郎の盛綱とて。四郎が兄之。彼是混じ三郎秀義とす。然ハ宇多天皇九代の後胤佐々木四郎と書て。秀義が四男の削去て聞ゆべし。今改

正す●信太三郎先生義教を義仲の伯父とあれ共。帶刀先生義賢の弟なれば。義仲にの叔父之。僅伯叔の字違ふれ共。不穿鑿之。●若黨と今少身者の家來。陪臣の供人などを云と違ひ。武士の若黨と云義故古の稱と千石二千石の身分も。若輩者と若黨之。一條次郎義仲を討んとて。郎等に下知する詞に。洩すか若黨と云を難せし人有し。今を知て古をしらぬ故之。●巴が東國へ落しと云之。他書の説に大に異之。唯是の平家物語の説に任せり。款冬がとも唯原本に従ふ。但し語に思が述し星月夜顯晦録の附録に巴款冬のことを書り。専ら海内に行るよぞかし。是を見給へりし。●田代冠者が俗姓を尋に書し。然るハ田代の冠者は。僧の如く聞ゆと難ざる人あり左にわらず。今諸國の武家に列座すれ共。素性は後三條院の皇子。輔仁親王に五代ゆる。王氏遠からず。凡からぬ義。僧俗の對言にわらず。雲上と凡俗との差別にて云ん。●攝津のせつと訓す。紀伊とさいと訓せ。攝津判官。紀伊守かく訓べし。縦は百人首に。式子内親王家紀伊と訓べし。しよくしさいしんわらげさいあど。あふぬとを訓人も多し。かゝる片言のみ訓とて。生涯國字文をも満足に讀得られ。我獨讀たると思へど。聊事を辨たる人にと笑はるべし。●芥下とは草鞋のごとく草に作たる之。●梶











或時備前國より上られしに院より明石の浦へと仰られしかば

有明の月も明石の浦風お波ばかりこそよるとみへしが

とや上たる故。御感の餘り。俊頼朝臣金葉集勅撰に。此歌を入しめ給へり。又永久の末年祇園女御として白河法皇。鳥羽院の皇祖七の幸人おのしける。東山の麓祇園邊に栖けり。法皇毎度御忍びの御幸あり。一夜殿上人一兩人。北面少具して忍ませ給ふ。比の阜月廿日餘り。まだ雲あがらうきくらし降五月雨に。もの凄き折ふし。かの栖近き御堂ありし傍邊より。あやしの光物出来る。頭りしろかねの針を磨立たる様おきらめき。片手に槌の類。片手お光る物と持てどし。是ぞ奇性の變化よと。君も臣も慄戦ひ給ふ。忠盛其比のまだ昇殿もあき以前ありしが。北面よまじり供奉せられしと。御前へめし。あの者と斬と。いひ共射殺すともせよがしと仰けられ。畏て歩向ふ。内へ思慮しける。狐狸の所爲よもあらんと白刃と振す。生捕よせんものど近よるに。蠟と光と思へば。又の後あく。消しよとこれの又光ると。頓て無手と組たるおこのいりおと喉とみれば。變化よのあらで人なり。面へ手へ火と燃てみれば。六十斗の法師。御堂の承仕ある。佛お御燈を進らせんとて手瓶に油を盛て。片手に持土器に火と貯て

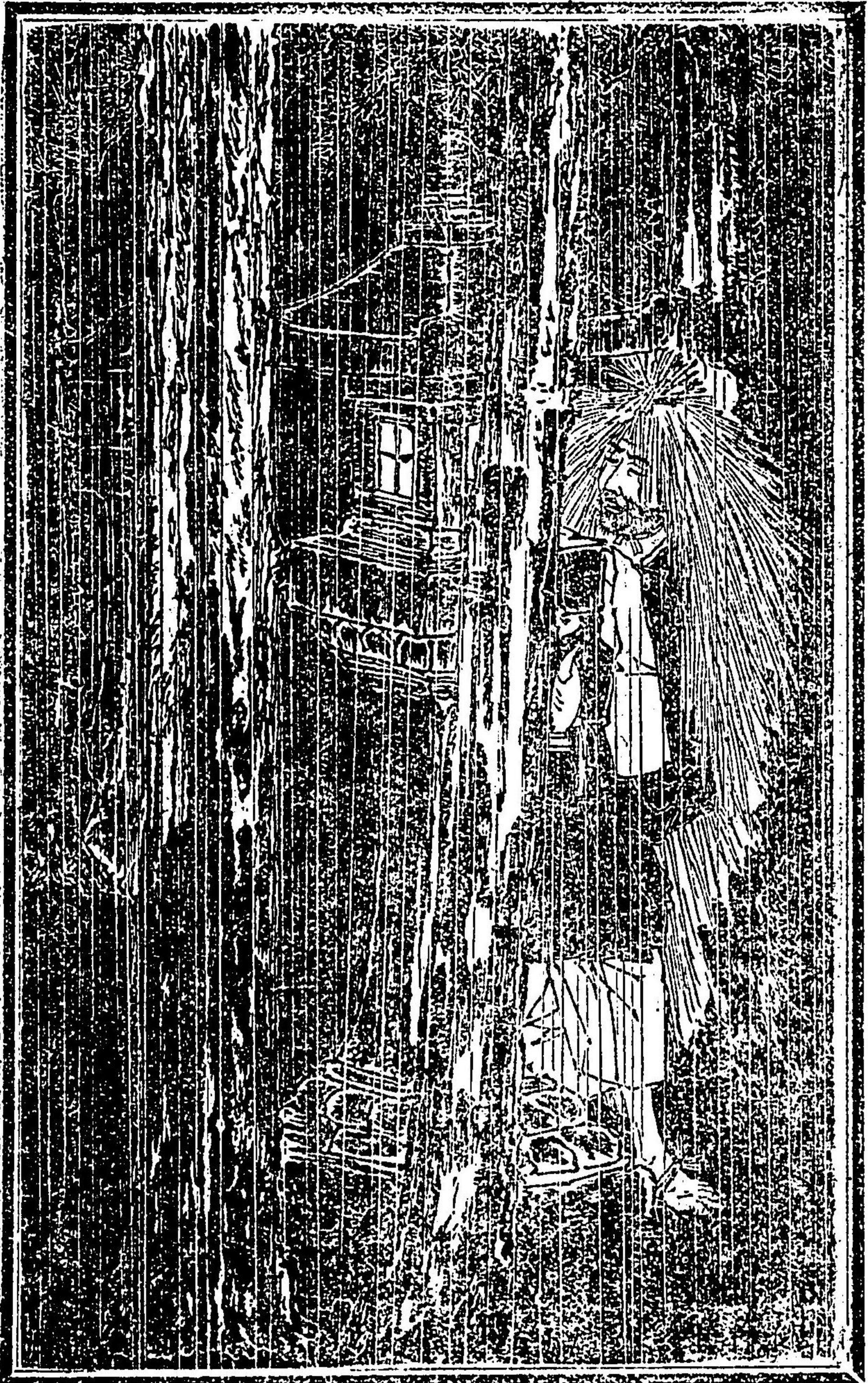
片手に持雨に濡じとて。小麦の藁と引結て被りしに。土器の火に輝ゆる。銀の針ともみへし事の跡一と顯ぬ。是を斬も射もせば。いかに念おからましと。忠盛が舉動弓矢取の優しける物りあどて。さしも御最愛と聞へし。祇園女御と忠盛に被下ぬ。時に女御の胎孕おとせしゆゑ。産らん子女あらば朕が子にせん。男ならば汝弓矢取に成立よとぞ仰ける。つひに男と産り。便宜も得ば。此とと奏せんと待折り。法皇熊野へ御幸おて。紀州糸鹿坂は御輿を居させ暫く憩せ給ふ時。忠盛數にある零餘子と袖お盛。御前お参り畏てさげあがら。いもが子の這ふやどにこそ成にけれと。や上たるお。頓て御心得ありて。たいもり取てやしきひにせよと。附させ給ふ。さてこそ吾子ともてなされける。此若君餘りよ夜啼し給ひし。法皇聞し召て一首の御詠を下し給ふ

夜なきすと忠盛たてよ末の代よ清く盛るともこそあれ

其より清盛とあるのふれける。然る清盛公實の直人へのあらず。白河法皇の御落胤よおとせし也。又忠盛仙洞の扇よ。やういせし女房有て。夜くかよひけるに。月を畫し扇を忘れ出たりし。傍の女房達是は何國の月かげぞや。出る所の覺束なきよと。笑あへりしかば。うの



平の心盛  
が長法を  
の法師を  
捕ふる圖  
因幡





雲井よりたゞもりきたる月ふるれをどぞ思ふ

と詠たゞしいと、淺からず思れける。忠盛の八男薩摩守忠度の、俊成卿の高弟にて。歌道もたけたる風流人あゞしが。此局の腹みてあゞし。仁平三年正月十五日忠盛五十八あて失給ひしかば。嫡男清盛跡を嗣。保元元年七月宇治左大臣頼長。新院崇徳に御謀叛と勤め。世を亂し給ひし時。御味方よて先を掛たりしかば。勸賞行れ。もと安藝守ありしと。播磨守にさされ。同三年太宰大貳なる。又平治元年十二月藤原信賴。源義朝の謀叛の時も。御方よて賊徒と討平けしる。勳功一あめらすとて。翌年正三位つゝひて宰相衛府の督。檢非違使別當。納言も經て利丞相の位に至り。内大臣左左右と經ず從一位太政大臣に至り。大將ふのあゝねども。兵杖と給て隨身と召具し。牛車轎車の宣言と蒙り。乘あから宮中と出入す。清盛公のまだ安藝守たりし時。勢州安濃津より舟にて熊野へ集られけるに。大ある鱈船へ躍入ぬ。いかさや是の權現の利生あゝん驗よとて。精進齋の道志のら。自ら調味して。其身郎從へも食しめ給ひしが。うれよと吉事連綿して其身即闕の官。おけれは國も亦關の官共云

も龍の雲よ上るよ等し。九代の先蹤と超給ふぞ目出度けれ。却説清盛公仁安三年十一月病に犯され。存命の爲にとて。十一月十一日五十一あて剃髮し。佛門よ入淨海と法諱す。宿痾幸に愈。六波羅又館と構られしゆゑ。六波羅殿と稱し。自ら隨ひ附人多く。御一家公達。花族も英雄も肩と比る者なし。烏帽子衣紋以下。六波羅様とて一天四海是を學びぬ。聖主賢王の政。攝關の成敗も世よ餘されし徒者あぞの。傍よ奇合何となく誹傾けやと。常の風俗かれど。此禪門の世盛の程の。聊忽よや者あし。其故の入道相國の策も。十四五の童三百人を洗つて。髪を禿に切まじし。赤き直垂を着せて召仕れけるが。京中お路にて往反し。自ら平家を惡さまお申者あるを。壹人を聞出せば。餘黨に觸廻し彼家に亂入し。資財雜具を追捕し。當人を擲六波羅殿へ引到る。されば目に見心よ知れ共詞に顯すものあし。此禿をみれば道を通る馬車も。皆よぎて通しける。禁門を出入すれども。姓名を問に及ばず。京師の長吏これが爲よ目を側とみへぬ。淨海禪門其身榮花を究るのみか。嫡子重盛内大臣の左大將。次男宗盛中納言の右大將。三男知盛三位中將。嫡孫維盛四位少將。凡て一門の公卿十人。殿上人三十餘人。諸國の受領。衛府諸司。都合六十餘人也。かゝる繁榮古今例も有べあらず。忠盛昇殿の時、殿







ける。遊みの推参の常のあらひよころひへ。年ともゆの偶思ひ立集いと。そげあく仰  
られ返し給ふぞ。不便なる。いかむかり辱う存ずらめ。我立る道あるべ。人の上とも覺へ侍ら  
ず。縦舞歌ふの御覽なくとも。御對面をのまにて返し給ふ共。有がたき御情まこりと有けれ  
ば。入道殿さまでと御前のやみ。對面して返さんどて。御使を立て召れり。佛の車に乗て出  
んどしけるが召よ依て歸参しも。入道殿やがて出合れ。いかよ佛今日れ見参の有まトウ  
とつれ共。妓王が何思ふらん切に中進るゆゑ。かやうよ見参のしつ。さる上りいかで一聲と  
も聞であらん。今やう一ッうたへかしと宣へ。佛御前畏て。さひのいどて今やう一ッ謹ふ  
た。君と始てみる時の。千代も經ぬべし姫小松。御前池ある龜岡。鶴こそ群るて遊ぶめ  
れど。推返し。三返うたひすましたれば。見聞人々皆耳目と駭す。入道殿も面白きことにお  
もひ給ひ。汝今やう上手よ有ぞ。舞も定て能らんとて。一番のうみ鼓打召て舞せらる。佛御  
前の髮姿眉目容貌世に勝れ。聲清朗み節又上手ありしか。心も及ず舞すよしぬ。入道殿際  
なく愛。佛に心と移されけり。佛御前本とらひ推参の者にて。既出されしと。妓王御前の取  
成給るお依て。召返されいぞ。早く暇給て返しなせよと。入道殿すべて其儀の叶ふ

まじ。但し妓王の手前と憚るまや。其儀あらば妓王をこそ出さめと宣へ。佛御前いうでさ  
る御事れいべさ。とも召置れんだお恥かしうい。後迄も忘れ給す。召れて又参ると  
も。今日の暇と給ふんとぞやける。入道殿今左右なく妓王疾く罷出よ。御使重りて三度  
まで立られける。妓王のもどより思ひ儲たる道み共。さそ昨日今日と。思ひもよらす。  
入道相國いかにも叶ふまじさよし。頼宣宣問。帝拭塵撫とせ。出さばにこそ定けれ。一樹の  
陰に舍り。同じ流と掬ふたふ。離別の悲さ習うかし。況や是の三年が程栖馴し名残も惜れて。  
かひなき涙をす。みける。妓王今。思。諦出ける。無らん跡れ形見にもやどや思ひけん泣  
くも障子は歌と書付ける。  
萌出るも枯るも同じ野透れ草むづれか秋にあとではつべさ  
扱車に乗て宿所へ歸り。障子は内お倒れ臥。泣より外れとぞあき。母妹是と見て。いのにやど  
問けれ共。妓王の左右に返辭にも及ず。具しる女よ訊ねてこそ。さるごありしも知てけれ。  
去程お毎月送られし。百石百貫も推止られ。今佛御前の由縁の者。攀て樂み榮へける。浴  
中上下傳へ聞て。實は妓王よ。西八條殿より暇給つて出されしとや。さ見参して遊ん



と使者と立るもあり。或の文と遣すもあり。され共妓王今さら又佗に對面し。遊戯戯べさる  
 ひとて。文とた小取入ともあり。使を待待ともありけり。かくて其年も暮。あくる春もあ  
 りしかを。入道相國妓王が許へ使者と立て。いり小妓王其後の何とある。佛御前が餘り徒  
 然げに見ゆるよ。參て今様歌舞つ。のれを慰よと宣ひける。妓王兎角の御返辭にも及ず。涙  
 を押して臥にけり。入道殿累て何とて妓王の左も右も返辭とバヤさぬぞ。泰るべきり參るま  
 くの其様やせ。淨海も計ふ旨有とぞ宣ひける。母刀自も是と承るお悲くて。泣く教訓しける  
 の。入道殿の御旨お逆の命と召るべし。さありて我身うき世にながらふべくも思はず。  
 我露の命を延るも縮るも。そなたの心にありと強に諫るもる妓王の參らじと思ひ定し上  
 されども。母の命と背じと。泣く又出立し心の中ぞとりあける。獨參らんも心うしとて。妓  
 女其外白拍子二人。總トて一ッ車取乘。西八條殿へ參しに。日來召れる所へ入られず。  
 遙下して座敷しつらひ置れしかば。妓王の何とぞぞや。我身過失となく出さるゝたにある  
 と。座敷とさへさげらるゝ口惜さよと。悲し胸に餘り。人にしらせと押る袖の間よりも。  
 餘りて涙溢れける。佛御前是と見て餘りに哀れお覺へければ。入道殿もすけるの。あれい

りよ妓王ところ見ひへ。日來召れし所も侍らばころ。あくてのらり暇と給り出いそん  
 とやけれ共。入道殿いかにも叶ふまじきと宜ふゆる。力も盡さりけり。入道殿やがて妓王お  
 對面し。いかよ妓王其以來の遠かりつる。はやく歌ひ舞して。佛がつれぐを慰よと宣ひ  
 ける。妓王參る程にて。とモウも仰の背くまどと。涙の洩をかくしつ。今様と歌ふたる。  
 佛も昔の凡夫之。我らもつひよの佛之。いづれも佛性具せる身と。隔るのみこそ悲けれと。泣  
 くも二返歌ひたりければ。其座お並居給ふ平家の一門。公卿殿上人諸大夫侍にいたるまで。  
 皆感涙と催されける。入道殿げにもと思ひ給ひ。時お取ての神妙にもやたり。さその舞も見  
 度けれ共今日紛るゝと出來たり。此後の召すとも常に泰り。佛が心を慰めよとぞ宣ひける  
 妓王の涙と押へつゝ出けるが。召ども參らじと思ひ定し。母れいさめも背くまじと。つら  
 き道お趣て。ふたゝびらさ耻を見つる口惜さ斯て世もあらば。又も愛目に遇んづらん。今  
 唯身と淵川へも沈果さんとやける。妹妓女星と聞姉かくあらば。我も俱よとや語ふ。母の  
 よ驚き悲しみ。左迄とも思で教訓しつるうらめしき。今の恨るも理と。若き娘共を先立。齡  
 ひ衰へし此身れみ生殘して何のせん。此上の我も同じ道に伴んとて。母子三人歡き聞けるの



妓王様うと辱の口惜さ。身を投んと思ひ定ひつれ。死期も来ませぬ母うへ迄身と投させ。五逆罪の疑きし。今只都外へ出んものと。思ひ直してひとて。二十一にて縁れ黒髪ふつと掻剪ければ。妓女身と沈るさへ同じ道ふと契し。世を厭んに誰か劣るべきと。十九あて姿と變けるゆゑ。母も又老が身に白髪とつけ何のせんとて。四十五にて髪をそり嵯峨の奥なる山里。三人一向専修念佛して。後世を願ふ哀なる。秋の比柴の庵に念佛して居たる。黄昏過て竹の編戸とほとく。打敵く者あり。尼奇と晝たに人も問來ぬ山里。離の音なうやうんと戸をひらけ。佛御前出來り妓王おまみへ。涙と押てや様。是迄幽かし怨給ひかん。女れ身おれば云がひき。御恩と仇にのみあしつる。とが身ながら淺ましくいへ。其方れ出され給ひしと見るにつけ。いつか又我身れ上あらんと思ひつゝくれ。御寵も嬉しからず。障子おつれり秋にあはで終へ。書胎し給ひし筆跡。時れ間も忘れし。今かくさまをのへ。念佛三昧し給ふと聞。餘り羨しく暇と乞と度しけれ共。更お御用ひもよしや。情物と案すれば。娑婆の榮花の夢の夢。人身の稟がた。佛教にの遇が。老少不定の出入息も待ぐからず。蜉蝣稻妻より猶とらあし。一旦の榮花お誇て。後世と泥梨

お沈果ん。心愛とあふそ。今朝紛れ出りて成て参りたれとて。被さたる衣打除ればや。尼お成て出來りし。かくさまも變し上。日來の科と赦し給へし。もろとも念佛し一ッ蓮の身とあらん。此上にも心も給す。つちへも迷ひ行。いあふん苦の廷。岩のさま松が根にも倒ふし。命の消ざる際。念佛して往生の素懷を透しひあん。顔へ袖おしめて。雨ととうき口説ければ。妓王も涙ふくれ。さまで思ひ給んと。夢にもしらす。浮世の中の嗟峨おれば。身の愛とこそかこちし。みづのらこそ世と恨み身を歎きて。姿と變るも理あり。御身の恨もさく歎きもあ。今年纔に十七まで。それやそにも穢土といひ。淨土と願ひ給ふ大道心。嬉しかりける大善知識か。いざ諸共に後世と營んと。四人一所に籠り居て。佛前に花香を供へ。他念もなく行ひをましけるが。遅速もそ有けれ。各々往生れ志願を果せしとぞ聞へし。されば後白河法皇長講堂の過去帳も。妓王妓女佛刀自等の亡靈と四人一所に載られし。有がたかりしとよそあれ

近衛院二條院二代の后。延曆興福額。打論。攝政家の供人資盛の不禮と咎。昔より源氏平氏朝家に立て。王位お隨寺朝權を輕んずる者あり。互よ戒と加し。バ。代の亂







夜更御車に助乗され給ひけり。御入内の後ハ麗景殿に御座ける。されば一向朝政と勸やさせ給ふ御さま之。彼紫宸殿の皇居より賢聖の障子と建られ。伊尹。鄭伍倫。虞世南。太公望。角里先生。李勣。馬周手長脚長。馬形の障子。鬼の間。李將軍が姿をさかぶらば摸せる障子もあつた。小野道風が七回賢聖の障子と書るも理とぞみへし。清涼殿畫圖の御障子あり。昔金岡が書たりし。遠山の有明月も有とかや。故院いまだ幼主よておはせしとれり。何とある御手すさみに。かきくもせ給ひたりしが。有しあがらに少しも違ひせ給ひぬを御覽じて。先帝の昔もや戀しう思召れけん

思ひさや愛身あつたに廻り来て同じ雲井の月と見んとい

其間の御るがらひ云しらす哀にやさしき御事のみ。去程ハ永萬元年春の頃より主上御不豫にて。夏の始にいと重らせ給ふ。因て大藏太輔紀兼盛の娘は腹よ。今上一の宮二歳に渡らせ給ふと。太子に立給ひんと。六月廿五日急に親王宣下。其夜直ハ受禪ありし。天下何となく周章たる様之。本朝童帝の例ハ清和天皇九歳。周公旦成王に替り。一日萬機を治給ひしに准へて。外祖忠仁公幼主を補佐し給ふ。鳥羽院 近衛院 三歳。此度の幼主よて先規

もあらねば。物騒しきも宣けり。此七月廿七日つひハ崩御。聖算二十二。蒼る花の散るが。とし。玉簾錦帳の内皆泪に咽せ給ふ。やがて廣隆寺の良蓮臺野の奥。舟岡山ハ葬奉る。其夜延曆興福兩寺の大衆。額打論にて互に狼藉及びけり。一天の君御葬送ハ時。南北二京の大衆悉く供奉し。御基所ハ廻り我寺の額と打とあり。先聖武天皇の御願。東大寺の額を打。次ハ淡海公の御願。興福寺の額。北京より興福寺に向へて延曆寺の額。次ハ天武帝の御願。教待和尚智證大師の草創とて。園城寺の額と打。然るといかに思ひけん。先例を背東大寺の次ハ興福寺の上ハ。延曆寺の額を打間南都の大衆。兎やせまし角やせましと僉議する處に。興福寺西金堂衆觀音房勢至房とて。開へたる大惡僧二人ありけり。觀音房ハ黑系威の腹巻。白柄の長刀。短に取。勢至房ハ萌黃威の甲。黒漆の大太刀を持。つと走。出延曆寺の額を切て落し。散らにうち破り。うれしや鳴。瀧の水。日日照と絶すと歌ひ離つ。南都の衆徒の中へぞ入にける。山門の大衆狼藉せば。手向ひすべきを。心深う思ふ方も有けん。一言葉も出さず。帝かくれさせ給ひて後ハ。心ある草木迄も愁たる色よこそ有べきに。此騒動の淺猿さ。高きも卑きも肝魂と失つて四方へ皆退散す。同廿九日午刻許。山門の大衆夥し



く下落すと聞へしうべ。武士檢非違使。西坂本へ行向ひ防げれ共。事共せず押破て亂入す。又何者りや出しけん。一院後白河法皇山門の大衆お仰せて。平家と追討せらるると聞へしうべ。軍兵内裏に参じ。四方の陣頭と堅め。平氏の類の皆六波羅に馳集る。一院もろろ六波羅へ御幸ある。清盛公其時ハいまだ大納言の右大將にておのしけるが。大に恐れ騒れけり。小松殿何お依て唯今去御事いへささ。静めやされしかども。兵ども騒鬨ると夥し。されども山門の大衆六波羅へ寄すして。清水寺に推寄。佛閣僧房一字も残さず焼拂ふ。是ハ頼打論れ意恨と聞へし。清水寺の興福寺に未寺たるに依て。其焼しつよりし朝觀音火坑變成池の如何と書て。大門の前に不建。次ハ日曆劫不思議力不レ及と返しの札を打たりける。衆徒歸り上りければ。一院六波羅より還御ある。重盛卿計ぞ御送りに参られける。父の卿の参られず。猶用心の爲のとぞみへし。重盛卿御送より歸られたりければ。父の卿宣ひける。扱も一院の御幸こそ恐れ覺ゆれ。兼ても思召寄仰らる。旨もあれは。あそ。かくの聞もらめ。それにも猶打解給ふま。と宣へ。重盛卿此事の努御詞にも。御氣色にも出させ給ふべのらす。人お心付がほ中へ。悪さ御と。是ハ附ても能く。叙慮お背せ給は。入の爲お御情を

施し給へ。神明三寶加護有べし。御身の恐れもいまだとや立れければ。父の卿も重盛のゆるしう大様ある者か。と宣ひける。一院還御の後。御前疎からぬ近習者達。餘多候のれける。あ。さても不思議あると。とや出したるもの。あ。露も思召寄ぬと。仰ければ。院中されもの。西光法師と云あり。進み出天口なし。人を以て云せよと。す。平家以の外過分お。問天の御計ひ。やとぞやける。人。此事由。壁に耳あり。怖し。と。各私語あ。これける。去程。お其年の諒聞のゆる。御祕大嘗會も行れず。建春門院其時ハ未。東の御方と。やける。其御腹。一院の宮の五歳に。あらせ給ふ。坐しけるを。御位お。即給んと。聞へし程。あ。同十二月廿四日。俄に親王の宣旨と。蒙せ給ふ。明れハ。改元有て。仁安と。号す。同十月八日。去年親王。宣下。皇子。東三條。よて。春宮。お立せ給ふ。春宮の御伯父。六歳。主上の御甥にて。三歳。何れも。昭穆。よ相叶す。但し。寛和二年。一。條院。七歳にて。御即位あり。三。條院。十一歳にて。東宮に。立せ給ふ。先規。あ。さ。にあらず。主上の二歳。よて。御讓。を。受させ給ひ。わづか。五歳。よて。二月十九日。御位を。す。べり。新院と。ぞやける。未元服。も。かくて。太上。天皇の。尊號。あり。漢家。本朝。これ。や。勅。か。らん。仁安三年三月廿日。新帝。太極殿にて。御即位あり。此君の位に。即せ給ひぬる。彌平家の。榮花。と。ぞ。み。へし。國母



建春門院とヤハ入道相國の北の方八條二位殿の御妹之。又平大納言時忠卿とヤモ此女院の御兄あるうへ。内の御外戚あり。内外に付て執權の臣とぞとへし。其頃ハ叙位除目とヤモ偏に此時忠卿のまゝ之けり。楊貴妃が幸ある時。楊國忠が榮たるに異ならず。世の覺時のきらめでたかりき。入道相國天下大小の事を宣ひ合せられければ。時の人平關白とヤヤける。さて又嘉應元年七月十六日。一院御出家あり。法諱を行眞と稱し奉る。され共萬機の政を知し召るゝゆへ。院と内と分かつたあ。院中に近く召るゝ公卿殿上人上下に北而迄。官祿身に餘れり。人心の習ひ猶厭足で。分外の望をのくるも多かりし。法皇も内々仰ける。昔より朝敵を平たる者多しといへ共。貞盛秀卿が將門を伐頼義の貞任宗任と伐。義家が武衛家衡を責たりしも。勸賞行れて。縱受領より過さりき。今清盛心のまゝに振舞こそ然るべからぬ。あれも世澆季に成て。王法の尽ぬるゆゑと仰ありければ共。次であければ御戒もあし。平家も又別して。朝家を恨奉るともあかりし。世の亂初ける根本の。去し嘉應二年十月十六日。小松殿の次男新三位中將資盛。其時の未越前守とて。生年十二ありければ。雪降て枯壁の氣色誠お面白のりけるまゝ。若き侍共三十騎召具し。逆臺野紫野右近馬場より打出て

鷹餘多居させ。鶉告天子を追立。終日狩暮し。薄暮に及て六波羅へ歸られける。其時御接祿の松殿房公にましくける。東洞院の御所より。泰内都芳門より入御あらんと。大炊御門を西へ御出あるに。資盛朝臣大炊御門猪熊にて。はしあく泰合御供の人御出ある。乗打ハ狼藉す。下へへくとて制しければ共。餘り資盛方勇誇り。元來世を世ともせざる上。召具したる侍共。二十内の若もの共あれば。禮儀骨法弁へたる者一人もあし。殿下の御出とも云す。一切下馬の禮儀も及ず。只懸破て通ぐんとする間。暗くらし。つや。太政入道は孫ともしらす。又少々の知れ共。虛不知して。資盛朝臣を始として。侍共皆馬より取て引おろし頗。耻辱お登けり。資盛はう。六波羅へ歸りかひして。祖父は相國禪門に。此よし訴すられければ。入道殿大に怒て。警殿下ありとも。淨海が邊を。憚給ふべきに。左右あく少き者に耻辱を與られけるこそ遺憾なれ。かゝるとよりして人々に欺るゝぞ。此事殿下に思ひ知せで得こそあはじと宣へば。重盛卿すされける。是の少も苦うらさず。頼政光基とヤ源氏共に。嘲られてもい。一門の耻辱にもいべし。重盛が子として。殿の御出に泰逢。下乗もせざる返くも尾籠いへとして。事遇たる侍共みな召寄て自今以後汝等能く心得べし。



誤て殿下へ無禮の由を。ヤさむやと思へとして歸されける。其後清盛禪門。小松殿より沙汰せ  
 で。片田舎の侍の。窮て剛強ある。入道殿仰れ外世又恐ろしきとあしと思ふ者共。難波瀬尾  
 を始として。都合六十餘人召寄て。来る廿一日殿下御出有べし。何方にても待受奉り。前駐御  
 隨身共が警と斷て。資盛が耻雪げどころ宣ひけれ。兵共畏とて罷出。殿下これを夢にも  
 知し召れず。主上明年御元服。御加冠拜官の御定れ爲。暫く御直慮に有べきにて。常の御出  
 より引繕せ給ひ。扱今度の待賢門より入御あるべきと。中御門と西へ御出ある。猪熊堀  
 川の邊にて。六波羅の兵共。混胃三百餘騎待受奉り。殿下を中へ取籠奉らせ。前後より一度  
 に聞と撞と作りける。前駐御隨身共が。今日を曠と襲束したるを。あそこ爰追懸追詰。散々  
 陵礫し。一々警を剪指。隨身十人の内右の府生武基の警とも斷れけり。其中に藤藏人大夫隆  
 教が警と剪とて。是の汝が警と思ふべからず。主人の警と思ふべしと云合て切ける。其後御  
 車の内へも。弓の弦つき入ととして。簾のあぐり落し。御牛の當胸鞆切放ち。かく散々狼藉し  
 て。歡の聞を作り六波羅へ歸参りたれば。入道殿神妙と宣ひける。され共御車添よ。因幡の  
 さい使。鳥羽の國久丸と云男。下臍され共さぐくし者あて。御車を修補乗せ奉りて。中御

門の御所へ還御あし奉る。束帯の御袖よて。御涙と押させ給ひつ。還御の儀式あさむして。  
 中も中々あふか。大繼冠淡海公の御事。擧てやに及す。忠仁公昭宣公より以來。攝政關白  
 のかゝる難に遇せ給ふこと。未承及す。これこそ平家悪行の肇され。小松殿此由と聞給  
 ひて。大に恐れ駭れけり。其時行向ふたる侍共。皆勘當せらる。縦ひ入道殿いがある不思議と  
 下知し給ふとも。あど重盛に夢をかり知せざりける。凡の資盛奇怪なり。梅檀の二葉より  
 香しとよそやせ。既に十二三お成ん者。禮義を存知て振舞べきよ。かやうの尾籠を現じて。入  
 道殿の悪名をたつ。不孝の至。汝獨ありけり。とて。暫く伊勢國へ追下さる。されば此大將  
 と。君も臣も御感ありしと聞へし

新大納言成親卿謀叛。山門神興と振奉て師高兄弟が濫行を訴訟す

主上御元服の御定其日の延され同廿五日院の殿上にて御定の有ける。攝政殿同十一月九  
 日兼宣旨を蒙せ給ひて。同十四日太政大臣小昇せ給ひ。同十七日慶申の有しかども。世の中  
 の猶苦敷みへし。去程に今年も尽て。嘉應三年お成にけり。正月五日主上御元服有て。十  
 三日朝靴の行幸あり。法皇女院待受奉らせ。初冠の御粧ひ。いかをかりめでたうおしけん。





東山鹿谷  
俊寛が山  
荘へ會合  
の圖





入道相國の御娘と女御お進せ給ふ。御年十五法皇御猶子の儀之。妙音院殿其頃。未内大臣の左大将おてまし。けるが。大将と辭し給ふことあり。時、徳大寺大納言實定卿。其任、當らるべき仁之けり。花山院中納言兼雅卿。故中御門藤中納言家成卿の三男。新大納言成親卿も達て大将と望れ。法皇の御前も殊宜しかりしゆゑ。是非お相叶へんとて。様々の祈禱立願あつて。夜々忍て賀茂の上の社へ。歩行おて参られけり。此頃の叙位除目とす。法皇内の御計ひもあらず。攝關の御成敗にも叶はず。一向平家の儘なれば。入道相國の嫡男小松殿大納言右大将より左に移り。次男宗盛卿中納言より。數輩の上臈と超。右大将に成給ふ。中にも徳大寺殿の一の大納言にて。花族の家嫡才學雄長英名高かりしに。平家の次男に加階を越られ給ふと。遺憾の次第。定て御出家もあらんなど。人々私語あそれしが。暫く世の成ん様をみんとて。大納言も辭し。籠居し給へり。新大納言成親卿宣ひける。徳大寺花山に越られん。如何せん。宗盛に越れしこと易のらね。此上の友を語りひ。いふもして平家と亡し。取辱と雪んど。俄に北面又の諸武士を語りひ。東山鹿谷の後三井寺に續き。屈強の城地なりし。此お俊寛僧都の山庄ありしに會合し。内謀と談じ。兵具を調へ。弓箭とあらせられぬ。父の卿。此

仁の齡の比僅中納言之。其末子おて正二位大納言に至り。大國を賜り。家族所從朝恩も誇あがふ。何不足有てかゝる心附れけん。其上平治の亂より越後中將とて。信賴卿同心の間。其節誅せらるべかりしを。小松殿色々や宥られ頸を接給へり。其恩儀も忘れ。此度の企の天魔の所爲どもヤベし。肇のはどの人の耳目と恐れしが。いつし慎もゆるみ。高聲に大義を論談あり。或夜鹿谷へ法皇も御幸ある。故少納言入道信西の子息。淨憲法印も御供あて。其夜の御酒宴も。彼一事の口披せられし時。法印牆に耳有りすとす。人夥多承りぬ。今にも渡聞へ。天下御大事にも及ゆんとす。大納言氣色替つて。つと立れけるが。御前お立られし瓶子を。狩衣の袖にのけ引倒されける。法皇御覽有て。あれぬのみと仰あれ。大納言立歸つて平氏倒れしとす。法皇笑盡お入せ給ひ。者共参て猿樂仕れと仰けれ。平判官康頼つと参て。あゝ餘り平氏の多うに酔てしとす。俊寛僧都とてそれいひ。仕るべきやらん。西光唯頸と取にのし。とて。瓶子の頸と取てぞ入あける法印餘りの淺猿さに。つやく物もやされず。返くも危のりし事共之。扱成親卿語はれたる。與力の輩誰くぞ。近江中將入道蓮淨俗名成正。法勝寺の執行俊寛僧都。山城守基兼。式部大輔雅綱。平判官



康頼。宗判官信房。新平判官資行。武士に多田藏人行綱を始として。北面の者共多く一身しけり。俊寛僧都の京極の源大納言雅俊卿の孫木寺法印寛雅に子。祖父大納言のさして弓矢取家よりわらね共。腹あしき人にて。三條坊門京極の宿所中門に佇立。齒を切悪ておはするゆゑ。人も容易通されず。のく怖しき人の孫ゆゑもや。俊寛僧都が心も猛く。奢れる氣質ゆゑ。よしなき謀叛お與せし。成親卿多田行綱を召て。今度御邊を。一方の大將お頼之仕課せむ。國をも庄をも所望お任せし。先弓臺の料にとて。白布五十端贈られり。安元三年三月五日。妙音院殿太政大臣。轉じ給へる替。小松殿源大納言定房卿を越て。内大臣お成給ふ。頓て大變を行。大臣大將の尊者に。大炊御門右大臣經宗公とぞ聞へし。扱まれば北面の。白河院の御時始て置れ。鳥羽院の御時迄。身のほどと舉動ありし。後白河法皇に至て。上北面より殿上の交と免さる。者多く。奢の心より謀叛お組する。至れり。又院中の切ものと呼ばれし西光法師の子に。檢非違使五位尉加賀守師高とて。成上の人有。國務を行ふに非禮非義多く。安元二年の夏。師高が弟近藤判官師經を。加賀の國目代。補せられし時。加賀へ下着間も。國府は邊鶴川と云山寺に。亂妨の所行ありて。諍闘及びけるが。目代

僧徒お追立られしゆゑ。當國の在廳等千餘人を催し集め。鶴川に押寄。坊舎殘らず。焼拂ふ。鶴川が白山の末寺ゆゑ。此とを訴んとて。老僧ら先達て進めける。白山三社八院の大衆悉く集合し。其勢二千餘人。七月九日の暮方。目代師經が館へ寄翌朝より合戦始り。露吹結ぶ。秋風射向の袖と翻し。雲井と照す。稻妻の兜の星を輝す。法師をらの戦強く。目代叶ずして。夜逃に京へ上りしゆゑ。大衆の直に山門へ訴んとて。白山中宮の神輿と飾り。比叡山へ振揚。同八月十二日。東坂本お着興ゆゑ。客人の宮へ入奉る。此宮の白山妙利權現にてまします。やせ。父子の御中。禰神心悅せ給んと。七社の神人袖とつらね。法施所念取ぐ。山門の大衆より。國司加賀守師高を流罪。近藤判官經高と禁獄せられ給る。旨。奏聞度。及及びし。が。御裁許更に決着あし。加茂川の水。雙六の簾。山法師。是ぞ朕が心お叶ぬもの。白川院も仰りし。昔より山門の訴訟。他も異あり。大藏卿爲房。太宰權帥季仲卿。さしも朝家の重臣。よりし。山門の訴訟。よて流罪せられ給へ。師高と。事の數にや。有べき。しかるを。延の御沙汰も。日吉の祭禮と打留め。安元三年四月十三日。辰の一點。十禪師權現。客人八王子。三社の神輿を。陣頭へ振奉る。下り松。され堤加茂の川原。河合。梅。柳原。東



北院の邊に。神人宮仕して大衆專當満く。神興の一條を西へ入せ給ふ。神寶天に輝き。日月地に隕給ふのと愕然。よつて源平兩家の大將軍に命て。四方の陣頭を固警。大衆と防ぐべきよし仰くださる。平家あり。小松内大臣左大將重盛公。其勢三千餘騎にて。大宮面の陽明。待賢郁芳。三の御門を固め給ひ。弟宗盛公。知盛卿。重衡卿。伯父頼盛卿。教盛卿。經盛卿。西南の御門と衛護。源氏あり。大内守護源三位兵庫頭頼政卿。郎等あり。渡邊省同。授と先として。僅三百餘騎。北の御門縫殿陣と固給ふ。所り廣し勢の少し。扶疎のみみへし。大衆是と幸ひ北に御門より神興と昇込んとす。頼政卿急ぎ馬よと飛下。胄を御漱手水して。神興を拜し奉らる。從兵皆かくのごとし。渡邊長七唱に。さかくとや含られしゆる。唱ハ小櫻を黄に返したる重鑑着て。赤銅作の太刀と帶。二十四差たる白羽の矢を擔。滋藤の弓と脇挾。兜ハ脱て高紐の掛。神興の前平伏し。暫く静せしへ。源三位殿より衆徒の御中へやせとい。今度山門の御訴訟。理運の條勿論存じし。御裁許運ふこと。餘所にても遺恨も覺侍れ。神興入奉らん子細も及びとす。但し頼政無勢おひて。開て入奉らん陣より入らせ給ひさ。山門大衆後日京童部の口説とも成やさんか。左右あく開き入奉るも。宣言を背くに似たり。又防ぎ拒んとすれ

ハ年来醫王山王に渴仰せざ身が。今日より長く弓矢の道お別れしひさん。彼どのひ是といひ難治の至極に覺し。東の陣頭ハ小松殿大勢にて固められてし。其陣よと入せらるべくもやと申述。若大衆惡僧共ハ。今更何條猶與べき。唯此陣より入奉れやと聞さしが。老僧の中ハ三塔一の僉議者と聞へし。攝津の堅者。從來天台に誤來れり。豪運す。み出。尤の口上。我等神興を先立訴訟や上り。堅陣を打破てころ。山門の威を後世も示すべし。頼政卿ハ六孫王以來源氏嫡の正統。弓矢を取ていまだ不覺と聞す。凡武道も限す。歌道も傑れし丈夫。よて。近衛院の御時當座の御會。深山花と云御題と。皆詠舊したる題ゆる。却て沈思も及れさる。近頼政卿

深山木のそれ梢ともみへざりし櫻の花。あはれとれおけり  
此秀逸よて御感お預りし優男あるを。今此時に臨でい。のんぞ恥辱を與ふべき。唯神興を昇戻せやとやけれ。先陣より後陣迄大衆尤と。同じ。東の陣頭待賢門よと入奉らんとする。忽ち合戦出來て。武士共散る。射奉るも。十禪師の御興にも。矢共數多射立。神人宮仕衆徒。或ハ射殺され。疵を蒙。喚叫ぶ聲。梵天の帝釋地軸の堅牢神も驚給ふらんと。乾坤お響き聞



へたり。大衆神輿を陣頭に振擡。泣く本山へ飯り登りけり。よつて法皇の殿上にて。諸卿僉儀と遂。承久より今治承安三年。神輿入浴のと六箇度。もつとも毎度武士よ仰せ。防せらるゝといへ共。神輿を射奉りし。此度始之。神人ふ矢を拔取せ。保延四年七月の例に依て。神輿の祇園の社へ入奉る。靈神怒とあせ。災害衛に充といへり。恐しくとやあへり。同トき十四日夜半許。山門の大衆又夥しく下山せしと聞へし。主上の夜中腰輿にめし。院の御所法住寺殿へ行幸ある。中宮宮の御車にて。佗所へ行啓ありけり。關白殿太政大臣殿以下。卿相雲客皆供奉せらる。小松の大臣の直衣に矢と負て隨ひ奉り。嫡子權亮少將維盛の。束帯に平藤擔てぞ参られぬ。京中貴賤騒々喧し。されども山門に。神輿に矢もたち。神人射殺され。衆徒も多く手負たれば。大宮二宮講堂中堂都て諸堂悉く焼拂て。山野に交るべきよし。三千の衆徒一同に僉議す。依て大衆のヤ所。法皇よと御計ひあるべしと聞へし程に。山門上綱等。子細を衆徒觸んとて。登山すと承り。大衆西坂本お下り皆追返す。平大納言時忠卿。其頃未左衛門督よておとしけるが。上卿ふつ。大講堂の庭に三塔會合し。上卿の冠と打落し其身と繩巻おし。湖水お沈めよとやて。既おかうとみへし時。時忠卿大衆へ使者と立。暫

く静りいへ。衆徒の御中へヤベき事のひとて。懷より小硯墨紙取出し。一筆書て大衆の中へ送らる。是を披きみる。衆徒之致濫惡者魔縁之所行也。明王之被加制止者善逝之加護也。とてり書れたれ。是を見て大衆尤くと服し。谷の各坊へ下り飯をぬ。一紙二句と以て三塔三千の。憤を息め。公私の耻とも遁れ給ふぞとしけれ。山門の大衆の發向の狼しき斗りと思へ。理をも存じけると。人々感じ合をける。同廿日花山院權中納言忠親卿を上卿よて。國司加賀守師高を關官せらる。尾張の井戸田へ流され。弟近藤判官師經と禁獄せらる。又去る十三日神輿と射奉りし武士六人と獄よ下さる。小松殿の侍共之。同廿八日戌刻斗樋口富小路より火出しに。折節異の風烈しく吹ければ。車輪のごとくある炎。三町五町と隔て。乾の方へ飛越。て。焼行程。具平親王の千種殿。北野天神の紅梅殿。橘逸勢の蠅松殿。鬼殿高松殿。鴨居殿。東三條冬嗣大臣の閑院殿。昭宣公の堀河殿を擧て。昔今の名所三十餘所。公卿の家十六軒。其外殿上人諸大夫の家。註し。尽すべからず。とて。大内に吹付。朱雀門よ。應天門會昌門。大極殿豐樂院。諸司八省。朝所。一時の内に灰燼と成ければ。家々の日記代々の文書。七珍萬寶敷を竭して土塵と交る。人の老少牛馬犬猫まで死すると若干之。是全く山王



の御答と怖れあへり。大極殿の清和天皇貞觀十八年に。始て焼たりし。同十九正月二日陽成院の御即位。豐樂院にて有ける。元慶元年四月九日事始有て。同二年十月八日落慶の處後冷泉院天喜五年二月廿六日。按之るに此年翌年康平元年と此二月又焼けり。治曆四年八月十四日に事始ありけれ共。成就ある間。後冷泉院崩御之。後三條院延久四年四月十五日造と出されて。文人詩とたてまつり。伶人樂を奏し。迂幸あし奉る。今の世も季に成て。國の力皆衰へたれば。其後の竟み造られせ。

平家物語圖會卷之壹終

平家物語圖會卷之二

東武 高井蘭山翁述

多田行綱返忠。成親卿一身黨類被擄捕重盛公憐愍

治承元年五月五日。天台座主明雲大僧正公請を停止の上。藏人を御使にて如意輪の御本尊を召返し。御持僧を改易せらる。即使廳の使を付て。今度神興内裏振奉りし。衆徒の張本を召れり。加賀國に座主の御坊領あり。國司師高されを停廢の間。其宿意に依て大衆を語らひ。訴訟を致さる。ゆゑ。己は朝家御大事及べし。西光法師父子が讒奏に依て。法皇大に逆鱗あり。殊に重科お行るべしと聞ゆ。明雲の院の御氣色悪かりければ。印論と返し奉つて座主を辭しやされけり。同十一日鳥羽院七の宮。覺快法親王。天台座主お成せ給ふ是の青蓮院の大僧正。行玄の御弟子。明る十二日先座主。所職を没収せらる。上。檢非違使二人と付て。井に蓋し火水をかけて。水火の責お行るべきよし聞ゆ。これに依て大衆。猶恭洛すと聞へければ。京中又騒ぎあへり。同十八日太政大臣以下の公卿。十三人參内して陣の座。着先の座主罪科の議定あり。八條中納言長方卿。いまだ左大弁宰相よていされし。進出やさる。



法家の勘状に任せ。死罪一等と減じ。流罪せらるべうし得共。明雲の顯密兼覺して。淨  
 行持律の上。大乘妙經と公家不授。菩薩淨戒を法皇に保せ奉る。御經の師御戒の師を。重科  
 へ行れんも憚るさよわらざ。還俗遠流を宥らるべきかと。憚る所なくやさるゝあぞ。當座の  
 公卿此儀に同せらる。然るお法皇御憤深く。遠流に決定す。太政入道も此とをやすさんと院  
 恭せられし。法皇御風氣として。御前へも召れせ。本意あく罷出給ふ。僧を罪する習として。度  
 縁と召返し還俗せしめ。大納言太輔藤井の松枝と云俗名を付られける。比明雲とや。村上  
 天皇第七の皇子。具平親王六代の御裔。久我大納言顯通卿の御子。無双の碩徳天下第一。一  
 高僧たれば。君も臣も尊み給ひ。天王寺六勝寺の別當ともかけ給へり。されども陰陽頭安倍  
 泰親やせし。さむかひの智者が。明雲と名乗給ふころ心得ね。上に日月の光を並べ。下お雲  
 ありとぞ難じける。仁安元年二月廿日天台の座主あり。同じ三月十五日御拜堂あり。中  
 堂の寶藏と開られたるに。種々重寶共の中に。方一尺の箱有。白布にて裏をけり。一生不犯の  
 座主。彼箱を開て見給ふ。黄紙に書る文一卷あり。傳教大師未來の座主の名字を。豫て註置  
 れたり。我名の有所迄に見て。うれより奥をば見給す。本のごとく巻返して置る。習之され

左ころのおはしけめ。のゝる貴さ人あれ共。先世の宿業の免れ給す。哀ありし次第。同廿  
 一日配所伊豆國と定めらる。人々さまざまにやさされけれども。西光法師が譏奏お依て。このや  
 うより行をける。今日都の内を追るべしとして。追立の官人。白河の御坊に行向て追奉る。  
 僧正泣く出給ひ。粟田口の邊。一切經の別所へ入せおしします。山門に詮ぜる所。我等が敵  
 西光法師父子に過たる者おしして。彼等父子が名字と書て。根本中堂の十二神將の内。金  
 毘羅大將の左の御足の下に踏せ。十二神將七千夜叉。時刻を回させ。西光父子が命を。召取給  
 へやと呪咀しける。同廿三日一切經の別所より配所へ趣き給ひけり。大津の打出の濱にも成  
 ぬれば。文珠樓の軒端白くともみへけるを。二目とも見給ひ。袖を顔へ押當て。涙に咽び給ひ  
 けり。山門に宿老碩徳多しといへ共。澄憲法印其時。未僧都にておしせしが。餘に名残を  
 惜み奉り。粟津迄送進らせ。暇を乞て歸らんとせし。僧正志の切なる感。年來孤心  
 中に秘せられし。一心三觀の血脈相承を授らる。此法の釋尊の附屬。波羅奈國の馬鳴比丘。  
 南天竺の龍樹菩薩より。次第に相傳し來れるを。今日の情お授られける。流石末世とい云あ  
 からの。澄憲此附屬を請法衣の袂を絞つ。都へ歸り止られし心の中ころ推量らる。又山門よ



大衆起て僉議するやうの義真和尚以來天台座主始て五十五世に至る迄。流罪の例を聞ず。つらく案するに。延暦の頃。皇帝の帝都を建。大師の當山を攀上り。四明に教法を。此所に弘め給ひしより以降。五障の女人跡絶て。三千の淨侶居を占たり。嶺に一乘讀誦年舊て。麗ある七社の靈驗日新之。彼月氏の靈山の。王城の東北大聖の幽窟之。此日域の叡岳帝都の鬼門に峙て。護國の靈地之。代々の賢王智臣此處の檀場を占。未代の爲にも争の當山に環とつくべき。いざ御跡を追て。馳着たらん所より。奪ひ取留め奉れやと云程こそある。雲霞の大衆山をふるつて發向し。或の志賀唐崎の濱路を。歩み續るもあり。又の山田矢橋の湖上を。船押出すもあり。是を見てさしも緊しげありし。追立の嚮使。兩送使。散々皆逝去ぬ。大衆國分寺へ参り向ふ。先座主の何事ぞと宣ふ。しのぐの沙汰あるよし。上しるべ。大に驚き給ひ。凡勸勤の者。日月の光にだに當らずと承る。況や時刻を廻らさず。配所へ追下さるべしと。院宣宣旨たり。少も徘徊。何べのふせ。大衆疾く歸り上らるべしと。端近く出て猶宣ふ。我身犯せる科。聊もあつく。無實に罪にて重科。沈の。山上の兩所定て。照覽し給ふらん。然る神佛の御惡みも有ての故と思へ。神佛とモ人をも怨む所あり。遙く是迄訪らひ來り

給ふ。衆徒の芳志の。忘るべき期あしとて。香染の御衣の袖を濡し給へ。大衆も鎧の袖を浸さるいなし。己に御興さしよせ。疾く召るべしと。先座主昔ころ三千の衆徒の貫主たり。今の斯る勸勤流人の身にて。修學者達に昇捧ふるべきやと。中へ乘興し給ひ。す。こゝに西塔の戒淨坊阿闍梨。祐慶と云惡僧。身の丈七尺あまり。黒皮威の鎧。大荒目。金交たるを。草摺長お着なし。胃の法師をら。持せ。白柄の薙刀杖に突。大衆の中を押分。御前へ参り。大の眼を見噴し。先座主と暫し睨へ。其御心にて。こゝろかゝる御目も。合せ給ひ。いさや。召るべしと。先座主餘り怖し。急に乘給ふ。大衆取奉るとの嬉し。あ。歴々の修學者共。の昇捧上るは。人に替。共祐慶の替。す。さしも峻き。東坂平地と行のごとく。あて。終に大講堂の庭に昇居て。再び僉議する様。貫首の首尾。克奪ひ留ぬ。但し勸勤遠流の方を。貫首も用ひ。す。ん。如何わらんと。時。祐慶又進み出。先座主に勸勤遠流せ。ぐるべき罪。あし。智惠高貴にして。三千の衆徒の貫首たり。德行深重にして。一山の和尚たり。此とき。我等顯密の主と。失て。數輩の學侶。永く螢雪の勤を怠んと。心愛りるべし。祐慶。張本。稱せられ。禁獄流罪。若し。首と。列らるゝと。も。今生の面目。冥途の思出。あるべしと。涙をうかべ。けれ。大衆皆。尤と同じ



先座主を東塔の南谷。妙光坊に入奉りぬ。時の横災の權化の人も免ざる例の昔唐の一行阿闍梨の。大徳聞へて玄宗皇帝は御持僧なりしものども。玄宗は妃揚貴妃お名と立其疑にて果羅國へ流され給ふ。其道入跡絶江浦に前途迷ひ深山に夜猿悲ひ。無實は大犯の人と唱へられ。苦のぬれ衣曝わへぬを。天道憐み給ふや。九曜の象現じ阿闍梨を護給ふて。虎狼豹豺の難もなりりし。一行みづのら指を食斷。其血にて左の股に。九曜の形を寫されし。和漢兩朝密宗は本尊たる。九曜の曼陀羅とや。是之。去程に山門の大衆。先座主取留め奉りたる。法皇聞し召て。いと安うらす思し召ける處に。西光法師やける。昔より山門の大衆。我儘ある傲訴。今も學すとのやあがら。今度の以の外過分よ。よく御計ひいべし。等閑の御沙汰よて。此後世の世もいまじと。唯今我身亡び失んも去らで。辨舌を震ひ。宸襟と惱し奉る。叢蘭茂うらんとすれ。秋の風これを破り。王者明らうなるとすれ共。識臣これを聞すと。宣あるり。新大納言成親卿以下近習の人々に仰て法皇山攻せらるべしと聞へし。山門の大衆のさのみ王地に妊れて。詔命を對捍せんも恐れ也とて。内院宣に隨ひ奉る衆も有なと聞へし。先座主の東塔の南谷。妙光坊におとしけるが。大衆一心ありと聞給へ。又い

りある愛目にかあふべしと。ことあふ心細げにぞのたまひける。され共流罪の沙汰のありけり。又新大納言の山門の騒動にて。私の宿意と。暫く押へられながらも内義支度。いさまぐ。ありしりども。義勢のみにて。此謀叛叶ふべしとも見ざりしゆへ。右の片腕共思れし。多田藏人行綱所詮此事無益也。と思ふ心付。弓袋の料に贈られし布共。直垂帷子に裁縫せ。家子郎等共に着せつ。目瞬て居たりけるが。信平家繁昌の有さやを見るに。當時容易傾けがたし。若此事洩ぬる程なら。行綱やづ失とれあんづ。他より漏ぬうち。返り思して命と保んものと同廿九日の夜深。入道殿西八條の亭に参て。行綱ころや。さこと有て推参し。案内と通じければ。入道殿常にも参らぬ者の何事ぞ。次第承れとて。主馬判官盛國を出されたり。全く人傳に。中間敷事也と云ゆへ。入道殿さらばとて。自ら中門の廊に出られ。夜の途關ぬらん。何事ぞと宣へ。晝の目繁く夜に紛れて参り。此程院中の人。兵具と調へ軍兵備さるるを。何と聞し召れいやらん。入道殿いざと。法皇の山と攻給ん御結構と。ころ聞と。事もなげに宣ひける。行綱近う寄。小聲に成て其儀に。いはず。一向當家の御上と。ころ承りいへ。入道殿さて。それを。法皇も知し召れたるか。子細にや及び。執事の別當成親卿の軍



兵催されいひしにも。院宣とて召れし。康頼俊寛西光を腹心にて。其外誰かかくや  
 合せいさど。有の儘に指過て云散し。我身の暇として出ければ。其時入道大聲に侍を呼  
 囀り給ふと夥し行綱怒なる事や出。證人にも引れんかと怖しく。人も追ぬに取袴し。大野  
 お火を放ちたる心地し。門外へぞ逃出ける。其夜入道殿。筑後守貞能を召て。當家を傾んとす  
 る謀叛人。都々満了たるぞ。急ぎ一門へも觸せ。侍共催せと宣ふにぞ。馳廻つて披露を。右  
 大將宗盛公。三位中將知盛卿。頭中將重衡。左馬頭行盛以下。一門の人々。甲冑弓箭を帯して指  
 湊ふ。其外侍共雲霞のごとく馳集て。其夜の内西八條の亭あり。六七千騎も寄たらんと  
 みへし。翌六月朔日。いまだ闇かりしに。入道安倍資成を召て。院の御所へ参り。大膳大夫信成  
 を呼出し。急度ヤベさなり。新大納言成親以下は近習の人々。此一門と亡し。天下を亂さん謀叛  
 の企あり。一々搦捕尋ね沙汰仕へし。それを君も知し召るやじくいと。ヤいへとを宣ひ  
 ける。資成急ぎ院の御所へ馳参り。信成を招て。此事やに色を失ふ。やがて御前へ奏聞やに。  
 法皇嗚呼のや是らが内謀。もれ聞ゆるにこそ。そも何事ぞと斗仰て。分明の返事もな  
 りけり。資成急ぎ走歸り此よしやければ。入道殿さればこそ。行綱の實をすれ。渠告知らせ

すの淨海安穩のやの有べきとて。筑後守貞能。飛彈守景家を召て。當家を傾んとする輩。一  
 々召捕へしと下知せらる。よつて二百騎三百騎。ここのしに押寄て搦捕。入道殿先雜式を  
 以て。中御門鳥丸の新大納言へ。や合すべき事のい。早々参り給へとや送られければ。身の上  
 との露しらす。法皇山攻の結搦をす宥んとのことなるべし。は憤深げなれば。いのに。も叶  
 はじものをと。清げある布衣をゆるの着なし。鮮ある車に乗。侍三四人召具し。雑色牛飼  
 まで。常よりも猶引緒れり。西八條近うありとみ給へ。四五町は軍兵充満り。あや駭  
 し何事やと。胸打噪れ。車より下り門に入り給へ。内に兵共。いさ間もなく並居たり。中  
 門の口より。恐しげなる者共。數多待受。大納言を取て引張。戒むべくやとやければ。入道殿  
 簾中より見出し賜ひて。有べうもあしと宣ふにぞ。侍十四五人前後左右立圍み。大納言の手  
 を取て縁の上へ引上一間なる處に押籠けり。大納言の夢の心地して物を。覺給す。供の侍の  
 大勢に隔られ。雑色牛飼色を失ひ。牛車を捨て。散々皆逃去ぬ。近江中將入道淨法勝寺の執  
 行俊寛。僧都。山城守基兼。式部太輔正綱。平判官康頼。宗判官信房。新平判官資行も。囚れて  
 こそ出來りたり。西光法師此よしと聞。我身の上とや思ひけん。鞭と打て急ぎ院の御所へ参



る。六波羅の兵ども。道よて行ひ西八條殿より召る。急度参れと云ければ。奏す。事有て。院の御所へ参るなり。頓て参らぬと云ければ。悪き法師めが。何事ぞの奏すべしとて。馬より取て引落し。中に縛て西八條殿へ提参る。聲より根元與力の者されば。殊も緊く戒て。御坪の内へ引居たり。入道相國大床に立て。備と白眼。當家を傾んとする。謀叛の奴の。される姿よ。しやつこへ引寄よとて。縁際へ引付。物履ながら天窓より顔とむづく。踏。固より汝とどき下臈の果を。君召仕せ賜ひ。分外の官職と給。父子共過當の舉動するよ。見しに誤り。天台の座主を流罪にや行ひ。利當家を傾んとする。謀叛の輩に與するよ。始終有のまゝにやべし。陳せの水火の責に骨身を挫とべし。聲あらずかに宣ひける。西光元來勝れたる大剛の者。色をも變ず。わるびれたる氣色。居直りて莞尔と笑ひ。院中近く召仕る。身。執事の別當成親卿。軍兵を催されし事。與せずと。やべし。一身同心。聊も相違みし。但し耳。當ることを仰有もの。他人の前へ。兎もわれ。西光の聞ん所あり。左様のと。宣ふまじ。抑は邊の故刑部卿忠盛の嫡子。十四五迄の出仕も。故中御門藤中納言家成卿の邊。立入られし。京童子の高平太とこそ。やし然る保延

の比。海賊張本三十餘人。擲進せられし。賞とて。四位の兵衛佐と。やし。皆人過分と。や。思盛の殿上の交。嫌れし人の子として。今太政大臣迄成揚つるは。分外と。や。法外と。や。さん。本より侍の。受領檢非違使に至る。先規類例なき。非ず。何り過分と。や。向後。嗜れ口を利過し。賜ふ。憚る處。十分。恥しめければ。相國入道殿。餘り。腹と居難て。暫し。物も。や。され。良有て。奴めが。頸の。左右なく。切る。能く。糺問を加へ。其。後河原へ引出し。梟首せしと。宣ふ。松浦太郎重俊。承り。手足を。挟み。ま。痛問ふ。西光。に。争ひ。す。拷問と。緊く。白狀の。次第。四五枚に。記したり。其。後口と。裂とて。口を。裂れ。五條西の。朱雀にて。終。首と。刎られ。り。嫡子。加賀守。師高。の。尾張の。井戸田に。流され。居たる。を。同國の。住人。小胡麻の。郡司。維季に。仰て。討せ。次男。近藤。判官。師經。の。獄より。引出して。誅し。其。弟。左衛門尉。師平。と。郎等。三人。をも。首を。刎。られ。けり。是。ら。の。云。が。ひ。さ。者。の。秀。て。立。障。る。ま。じ。と。て。と。の。み。綺。過。な。ま。天。台。の。座。主。と。流。罪。に。や。沈。果。報。や。罄。け。ん。山。王。善。逝。大。師。の。神。罰。冥。罰。立。地。の。蒙。て。う。る。憂。目。に。遇。け。る。ふ。や

重盛公新大納言の命乞 門脇教盛卿丹波少將の命乞 重盛公諫諍



新大納言の一間に推籠られ。是は日來の荒増。渡聞へるなるん。誰の漏しぬらん。北面は  
 輩の中にも有らんあど。案じ續け坐ける處に。後より足音高うりに聞へければ。我命失  
 んとて。武士共の参るやと。思の外入道殿板敷荒く踏鳴し。障子を颯と引明け出されたり。素  
 絹の衣の短さに。白き大口踏抜き。聖柄の刀推窮。以の外怒る氣色にて。大納言を暫しねめ  
 つめ。抑は邊り平治に誅すべきを。内府が身に替て申請。首を繼れし。覺も忘れられしや  
 然るに何の恨みて當家を亡さんとせらるや。思をも知らぬを。畜生とやぞや。當家の運  
 命竭ざるゆへ。此處に迎へたり。日來の荒増共。直承んと宣へ。大納言全くさること  
 ひず。人との讒言にてぞいん。能く尋ひべしと。入道殿言せも果す。人やあると召れけれ  
 ば貞能つと参りたり。西光めが白狀。取て参れとあれば。是にいとさし出すと。入道殿是を取  
 て推返し。二三返高うりに讀聞せ。此上何と陳せられんとあれば。大納言泥の如くに  
 て。物とも得やさで居られしに。あな悪やとて。書面を大納言の顔にさつと投掛。障子を儘と  
 引開て退れしが。猶腹に居兼。經遠。兼康と召たる。難波次郎瀬尾太郎参りければ。あの男取  
 て庭へ引落せと宣へ共。是等左右ならもし。奉らす。小松殿の氣色。いらいんんとやけ

る。入道殿彌怒。汝等の内府が命を重んじ。我が中所輕んざるよ。此上の力及すと宣ふ。  
 このわしのりあんと思ひけん。立上り大納言の左右の手を取。庭へ引落し奉りける。其時  
 入道心地よげに。取て臥喚うせよと宣ふ。二人の者共大納言の左右の耳に。口とわて私語引  
 臥ければ。二聲三聲苦しみに喚かれける。其肺阿防羅利。罪人を呵責する。冥途の形勢。是に  
 の過じと思ひる。新大納言の我身かくあるにつけても。子息丹少將成經以下。稚き者共い  
 かるる愛目にか逢らん。思ひやるにも覺束なくさ。このり熱き六月に。裝束も窶られず。熱  
 さも堪がたければ。胸もせきさる心地して。汗と涙と争ひ流れける。さりととも小松殿と。思し  
 召放たじものをと。思れけれ共。誰をしてやべし共覺給ひず。小松大臣の例の善惡駭給ひぬ  
 方あれを遂日さけて後。嫡子權亮少將維盛。と車の後に乗せ。衛府四五人。隨身二三人召具  
 して。軍兵一人も具せられず。大樣氣にて坐たれ。入道殿と。一門の人。皆思すげに  
 ぞみへ給ふ。大臣中門にて。車より下給ふ所へ。貞能つと参て。是はどのの大事に。軍兵  
 一人も召具せられしとぬやらんと申けると。大臣殿大事と。天下の事をこそ。のやうの  
 私事を大事と云やうあると宣へり。兵杖を帶したりける。兵共唯口と開たりける。其後



大納言の何國に置れしやと。此彼引わたり見給ふに。ある障子のうちに蜘蛛手結する處あり。こゝやふんとて開られされば大納言おのし。涙お咽びうつ伏て。目も見舉給す。いかにやと宣へば。其時見著。さも嬉しげに思へるゝさま。地獄の罪人が。地藏菩薩と見奉らんものくやと覺て哀也。さてやさるゝの何事いやらん。今朝よりのよる憂め逢ひ。平治おも御恩と以て願と繼い上。のく位官昇進し。歳四十に餘り。思ひ生々々報じ難ふいへ。何卒此度とて。憐愍の作救ひ下さらん。佛門に入り。なる片山里にも籠一筋。後世の營仕らんとやさるゝ。大臣殿さへむとて。沙命失ひ奉る迄のこと。よもいひ。縦ひ左共重盛命に代りいへし。心易のれとやて。父禪門の正前お坐し。わの大納言失れん。能々思慮いべし。其ゆゑの先祖修理大夫顯季。白河院に召仕られし以來。家に例なき大官に經上り。利當時君無双の最惜されむ。唯都の外へ出され。事濟いん。北野天神の時平の讒奏に。憂名と西海の波に流し。西宮大臣高明公の多田滿仲の讒言にて。恨と山陽の雲によす各無實ありしうども。是みる延喜の聖代。醍醐帝安和の御門。冷泉帝の御事とぞや傳へいぞ。上古猶のくのおとし。況や末代に於てとや。賢王も。認あり。況や凡人に於てとや。既に召置るゝ

上の急ぎ失れず共。何の恐れいへむ。刑の疑しき。輕くせよ。功の疑しき。重くせよ。とこそ見へいへ。重盛彼大納言の妹に相具し。維盛又婿也。のやうに親しう成いへば。やとや思召いはん。一向其義にいひ。唯國の爲世の爲家の爲と思つてやい。一とせ故少納言入道信西の執權の時。我朝に。嵯峨皇帝の朝に。兵右衛督藤原仲成と誅せられてより以來。保元迄君二十五代の間。行れざりし死罪と始て取行ひ。宇治の悪左府の死骸と。掘起して實檢せられたりしかど。餘りあるは。政と存いへ。されば古の人の言に。死罪と行へむ。海内謀叛の輩。絶すとす。此詞と存すれば。平治に又世亂れ。信西が埋れざりしを掘發し首を刎て大路と渡されいさ。保元にや行しこと。幾はどなく。いや身の上に報れにきと思へむ。怖しうい。是のさせる朝敵にもいひ。このさく。恐あるべし。樂花のこる所なけれむ。思召るゝことあるまじけれ共。子々孫々まで。繁昌わらやしく存い。父祖の善惡の。必ず子孫に及ぶよし。經書に明白に侍りい。のにも今夜首を刎られんこと。然るべのらす覺い。理を盡しやされけむ。入道殿も實もと思されけん。死刑の思ひ止れけり。其後大臣殿中門に出侍共。にたどへ仰われとて。わの大納言を失んと有べのらす。入道殿腹立のまゝに物騒しき事し給ひ



後にい必ず悔給はん。餅こと仕て我を恨みと宣へて兵杖を帯じさる。兵ども皆恐慄て領  
 堂し奉る。扱も今朝経遠兼康がわの大納言に。情あう當り奉りし。返ぐも奇怪也。お  
 ど重盛歸り聞んづる所と憚らざりし。片田舎の侍。皆のふるどと宣へば。兩人甚恐入  
 れ大臣殿加様心と配て。小松殿へ歸られけり。扱又大納言の侍共。鳥丸の宿所に歸て。し  
 かぐとやけれを。北方はじめ女房達。聲ぐに喚叫ひ給ひけり。少將殿はじめ稚き迄皆取  
 れんよし承りし。急き何方へも。忍むせ給へかしとやければ。北の方今。是程に成て。残り  
 留る身とて。安穩にて何かいせん。唯同じ一夜の露も消んこそ本意なれ。今朝と限と知  
 らざりし。悲しさととて。引かつひてぞ臥給ふ。已に武士共近づくよし聞へしかを。かくて耻  
 がましう。方見目とみんも。流石なればとて。十に成給ふ女子。八歳の男子。一ツ車に取乘て。  
 何地とさすともなくやり出す。さてしも有べきならねば。大宮を上りに。北山邊雲林院へぞ  
 坐たる。其邊の僧坊に下し置やて。送の者共。身の捨たさ暇。やて歸りけり。今。幼  
 き人々をかり殘居て。又事問ふ人も多く座ける。北の方の心の中推量られて哀之。尊行影  
 を見給ふよつけても。大納言の露の命。此夕限ありと。思ひはかるにも消ぬべし。宿所わ

女房侍共多かりけれ共。物をだ取した。めせ。門とぞ小推もてす。廐より馬共多く並  
 立たれ共。草飼もの一人もあし。夜あくれば馬車門に立。賓客座。列て遊戯れ。舞躍世を  
 世ともし給とす。近き傍の者共。物をだ高く云す。怖恐昨日までもありしを。夜の間に替  
 る形勢。盛者必衰の理。目の前よこそ顯たれ。樂盡て哀來ると書れし。江相公の筆の跡  
 今ぞ思ひしられける。丹波少將成経の。其夜法皇の御所。法住寺殿。上臥して。未出られざり  
 ける。大納言の侍共。急ぎ所。馳參。少將殿を呼出し。此よしやけれを。これ程のとな  
 どや宰相の許より知らせるらんと。宣ひもつてぬ。宰相殿よりとて使わり。宰相とい相國入道  
 の脇に御座しければ。門脇宰相。何事とていやらん。今朝西八條の亭より。急度具し參れとや越いと。  
 云道されければ。少將此よし心得て。近習の女房達を呼出し。夜邊何となう。物騒しういひし  
 を。例の山法師の下るに。もやと。餘所に思ひていへば。いや身の上。成てい。夕去大納言斬る  
 べういふれば。成経連も同罪。ふていん。今一度。前へ參じ。君を拜し度いへと。かふる身  
 と成て。憚。お存いとやされしか。女房達急ぎ此旨奏問せらる。法皇より今朝禪門より使わ  
 て。心心得わすゆ。疾々と仰お依て。少將御前へ參られたり。法皇仰下る旨もなく。唯



涙と押へ給へを。少將又涙を咽て。や上ん詞を。良有て少將罷出られし。後と遙は覽じ送り是限にて。又は覽する期の有まじく思し召は聲と立て歎かせ給へり。直に少將退出れば院中の人々局の女房達。名残と惜。袖と濡さぬ方をも。勇宰相の許へ出られたれを。北の方の近う産すべき人にては座けるが。今朝より此歎きを打添。已に命も消入心地ぞせられける。少將御所と罷られしより。涙盡せぬに。今又北の方の有様を見給ひ。もどさせん方なげにみへられぬ。少將の乳母に六條と云女あり。我は乳に參君と血の中より懷揚。おほしたてまゐらせし以來。月日の重なるに従ひ。年の積るの歎かず。偏に君の成人しう。成給ふことをのみ悦び。白地とと思へとも。今年二十一年。片時も離れ奉らず。院内へ參らせ。進ふ罷出給ふさへ。心苦しう覺しに。今いかにある愛めにか。合せ給ふらんと泣沈けると。少將宥め嫌じて。宰相殿おのすれば。命ばかりの乞請給ひらんものを。さばかり歎きくれあど。慰め給へども。六條の目も厭ず。泣悶へけり。時に西八條殿より。使敷並あれた。宰相今は出向て。左も右も成めて。少將と車の後に乘て出られたり。保元平治以來。平家の面々の。樂榮へ愁歎なかりしに。この宰相こそ摺ゆる。かゝる歎きにあひ給へり。六波羅近くなれた。少將の門内

へ無用の言や斷らるる間。其邊ある侍の許に降置。宰相ばかり通られけり。いつしか少將の武士共四方を取圍み。緊密守護す。宰相中門に居給ひしが。入道殿出も逢れざるゆへ。源太夫判官季貞を以て中さるる。教盛由ある者に親しう成て。返すくも悔ひへどもかひもいはず。相具しい者。此はど惱といが。今朝より此歎きを打添て。命も既に絶ひひなん教盛かうていへむ。儼事させいひ。少將と暫く教盛に預け下されかし。季貞此よしと。入道殿哀寄相が例の物に心得ぬよとて。頼に返事もなく。良有てやさるる。新大納言成親以下。近習の面々。此一門を亡ぼして。天下を乱るる。企あり。少將と既に成親の嫡子ならずや。もし此謀叛を遂んには。此邊とても穩からじを。増舅の好身ありとて。預け遣すべきやと。やせと有ゆへ。季貞宰相殿へ申述。世にも本意あげにて。重ねてやされけると。保元以降度々の合戦にも。命お代んと存せし度々。入道殿も知し召れつらん。此後とても荒き風。先防ぎやさん。たどひ教盛こそ年老てい共。若し子共夥多いへ。一方の堅にあらでいべきや。それに暫く少將を預らんに。赦あさ。一向教盛貳者と思さるるにこそ。左やで。審思されを。世に有て何れせん。身の暇給つて。出家入道し。高野粉河に。籠いん。由なき浮



世の交<sup>まじはり</sup>。世にあれば望<sup>のぞみ</sup>も有<sup>あり</sup>。望<sup>のぞみ</sup>叶<sup>かな</sup>ねば怨<sup>うらみ</sup>もあれ。うき世<sup>よ</sup>を厭<sup>いと</sup>ひ。眞<sup>まこと</sup>の道<sup>みち</sup>に入<sup>い</sup>ら。しか  
 ず覺<sup>おぼ</sup>へしと宣<sup>のたま</sup>ひける。季貞<sup>すまたまた</sup>又<sup>また</sup>は前<sup>まへ</sup>より出<sup>い</sup>。宰相<sup>さいしやう</sup>殿<sup>どの</sup>ははや思<sup>おも</sup>召<sup>め</sup>切<sup>き</sup>て見<sup>み</sup>へさせし。しかぐ。こと  
 中にぞ。入道<sup>にふだうどのしゆけ</sup>殿<sup>どの</sup>出家<sup>しゆた</sup>と迄<sup>まで</sup>はけしからず。其儀<sup>そのぎ</sup>ならば少將<sup>せうしやう</sup>をば。暫<sup>しばらく</sup>くは邊<sup>へん</sup>へ預<sup>あづ</sup>るとやべしと宣<sup>のたま</sup>  
 ふ。此旨<sup>このたま</sup>又<sup>また</sup>中<sup>ちゆう</sup>出<sup>い</sup>れ。あはれ人の子<sup>こ</sup>の持<sup>もち</sup>まじさところか。我子<sup>わがこ</sup>の縁<sup>ゆかり</sup>は結締<sup>むすび</sup>ぞ。かく心<sup>こころ</sup>と推<sup>おし</sup>じと  
 とて出<sup>い</sup>られぬ。少將<sup>せうしやう</sup>待<sup>まち</sup>請<sup>じゆ</sup>いか。いらんとや時<sup>とき</sup>。入道<sup>にふだうどのしゆけ</sup>殿<sup>どの</sup>餘<sup>あま</sup>りに腹<sup>はら</sup>立<sup>た</sup>れ。對面<sup>たいめん</sup>もあ。は邊<sup>へん</sup>の身<sup>み</sup>を  
 願<sup>ねが</sup>し。も叶<sup>かな</sup>ふまじと頻<sup>しきり</sup>に宣<sup>のたま</sup>ふ。出家<sup>しゆた</sup>入道<sup>にふだうどのしゆけ</sup>と迄<sup>まで</sup>やたる上<sup>うへ</sup>。然<sup>しか</sup>る暫<sup>しばらく</sup>く預<sup>あづ</sup>るとい宣<sup>のたま</sup>へ共<sup>とも</sup>。始終<sup>しじゆう</sup>善<sup>よ</sup>  
 るべし共覺<sup>ともあは</sup>すとやさる。少將<sup>せうしやう</sup>さては恩<sup>おん</sup>を以<sup>もつ</sup>て。暫<sup>しばらく</sup>しの命<sup>いのち</sup>は延<sup>ひ</sup>びひふこそ。父<sup>ちち</sup>大納言<sup>だいなごん</sup>がと  
 何<sup>なに</sup>ぞか聞<sup>き</sup>し召<sup>め</sup>れい。や宰相<sup>さいしやう</sup>は邊<sup>へん</sup>の。漸<sup>やう</sup>くはやたれ。それ迄<sup>まで</sup>は思<sup>おも</sup>ひもよらざと。其時<sup>そのとき</sup>少  
 將<sup>せうしやう</sup>涙<sup>なみだ</sup>と。いらくと流<sup>なが</sup>し。命<sup>いのち</sup>惜<sup>おし</sup>きは父<sup>ちち</sup>を今<sup>いま</sup>一<sup>ひと</sup>たび見<sup>み</sup>むやと思<sup>おも</sup>ふ爲<sup>ため</sup>。夕<sup>ゆふ</sup>去<sup>さり</sup>大納言<sup>だいなごん</sup>斬<sup>ざ</sup>れんには。  
 成<sup>なり</sup>經<sup>けい</sup>命<sup>めい</sup>生<sup>せい</sup>て何<sup>なに</sup>もかせん。只<sup>ただ</sup>一<sup>ひと</sup>處<sup>ところ</sup>いかにも成<sup>なり</sup>やうやて給<sup>たま</sup>せし。とぞ。悲<sup>かな</sup>歎<sup>なげ</sup>れけれ。宰相<sup>さいしやう</sup>世  
 にも苦<sup>くる</sup>しげに。不知<sup>いざよ</sup>は邊<sup>へん</sup>の。種<sup>たね</sup>々<sup>々</sup>やたれ。其儀<sup>そのぎ</sup>中<sup>ちゆう</sup>山<sup>さん</sup>人<sup>じん</sup>跡<sup>あと</sup>にあらす。但<sup>たゞ</sup>し今朝<sup>けさ</sup>内<sup>うち</sup>の大臣<sup>だいじん</sup>。色々  
 中<sup>ちゆう</sup>させつれ。それも暫<sup>しばらく</sup>は能<sup>よ</sup>様に聞<sup>き</sup>つると宣<sup>のたま</sup>ふ。少將<sup>せうしやう</sup>聞<sup>き</sup>もあへず。泣<sup>な</sup>々<sup>々</sup>手<sup>て</sup>を合<sup>あ</sup>せて。悦<sup>よろこ</sup>れけ  
 る。子<sup>こ</sup>にあらで誰<sup>たれ</sup>の今<sup>いま</sup>身<sup>み</sup>の上<sup>うへ</sup>を指<sup>さ</sup>置<sup>お</sup>て。かく迄<sup>まで</sup>悦<sup>よろこ</sup>ぶべき。實<sup>まこと</sup>の契<sup>せき</sup>の親<sup>おや</sup>子の間<sup>あひだ</sup>にぞ有<sup>あり</sup>ける。子<sup>こ</sup>と

バ人の持<sup>もち</sup>べきものか。思<sup>おも</sup>ひ返<sup>かへ</sup>されし。夫<sup>それ</sup>より又<sup>また</sup>同車<sup>どうしや</sup>して歸<sup>かへ</sup>られけれ。宿所<sup>しゆくじよ</sup>に。女房侍<sup>にようじ</sup>  
 さし。漆<sup>つ</sup>。死<sup>し</sup>たる人の。甦<sup>よみが</sup>たる思<sup>おも</sup>ひにて。悦<sup>よろこ</sup>び泣<sup>な</sup>とせられける。太政入道<sup>たいていどう</sup>此<sup>こ</sup>上<sup>うへ</sup>も。心<sup>こころ</sup>行<sup>ゆ</sup>すや思<sup>おも</sup>れ  
 けん。赤地<sup>あかぢ</sup>の錦<sup>にしき</sup>の直垂<sup>ひたれ</sup>に。黒糸威<sup>くろいとど</sup>の腹卷<sup>はらまき</sup>。白金物打<sup>しろがねものうち</sup>たる胸板<sup>むねいた</sup>せめ。先年<sup>せんねん</sup>安藝守<sup>あぎのり</sup>たりし時<sup>とき</sup>。神拜<sup>しんはい</sup>  
 の次に靈夢<sup>れいむ</sup>を蒙<sup>かぶ</sup>り。嚴島大明神<sup>げんじまうだいめいじん</sup>より現<sup>ま</sup>に給<sup>たま</sup>し。銀<sup>ぎん</sup>の匣<sup>ひら</sup>巻<sup>ま</sup>したる小長刀<sup>こながた</sup>。常に枕<sup>まくら</sup>と放<sup>はな</sup>で立<sup>た</sup>られ  
 しを。掖<sup>わき</sup>。中門<sup>ちゆうもん</sup>の廊<sup>らう</sup>に出<sup>い</sup>真能<sup>まなし</sup>と召<sup>め</sup>。筑後守<sup>ちくごのり</sup>貞能<sup>まなし</sup>は。木蘭地<sup>もくらんぢ</sup>の直垂<sup>ひたれ</sup>に。緋威<sup>ひい</sup>の鍔着<sup>つぎ</sup>て。は前に。畏<sup>かしこ</sup>  
 る。いかに真能<sup>まなし</sup>。保元<sup>へいげん</sup>に平右馬<sup>へいごま</sup>を助<sup>すけ</sup>始<sup>はじめ</sup>。一門<sup>いっもん</sup>半<sup>はん</sup>に過<sup>す</sup>て。新院<sup>しんいん</sup>七十五代<sup>しちじゅうごだい</sup>崇徳<sup>すうとく</sup>の味方<sup>みかた</sup>に参<sup>ま</sup>り。一<sup>ひと</sup>の  
 宮<sup>みや</sup>は故刑部卿<sup>こけいぶけい</sup>盛盛<sup>せいせい</sup>公<sup>こう</sup>の父<sup>ちち</sup>の養君<sup>やうくん</sup>にて坐<sup>ま</sup>しか。旁<sup>かたわら</sup>見<sup>み</sup>放<sup>はな</sup>し参<sup>ま</sup>らせ難<sup>がた</sup>かりしを。故院<sup>こいん</sup>の遺<sup>い</sup>誠<sup>じやう</sup>  
 に任せ。御力<sup>みかた</sup>にて先<sup>ま</sup>と掛<sup>か</sup>たり。是<sup>こゝ</sup>一<sup>ひと</sup>ツの奉公<sup>ほうこう</sup>。次に平治元年<sup>へいぢげん</sup>十二月<sup>じふにがつ</sup>。信賴<sup>のぶより</sup>義朝<sup>ぎてう</sup>が謀叛<sup>ぼうはん</sup>の時<sup>とき</sup>。院<sup>いん</sup>  
 内<sup>うち</sup>と取<sup>とり</sup>奉<sup>ほう</sup>り。大内<sup>たいてい</sup>に楯籠<sup>たてこも</sup>と。天下<sup>てんか</sup>闇<sup>くら</sup>と成<sup>なり</sup>たりしにも。身<sup>み</sup>と捨<sup>すて</sup>て凶徒<sup>きゆうと</sup>と追落<sup>おひお</sup>し。經宗<sup>けいむね</sup>惟方<sup>いけかた</sup>を召<sup>め</sup>  
 禁<sup>い</sup>るに至<sup>いた</sup>るまで。君<sup>きみ</sup>の爲<sup>ため</sup>に命<sup>いのち</sup>を失<sup>うしな</sup>はんとせしと毎度<sup>まいど</sup>。然<sup>しか</sup>る人<sup>ひと</sup>は何<sup>なに</sup>とやす共<sup>とも</sup>。争<sup>い</sup>か此<sup>こゝ</sup>一<sup>ひと</sup>門<sup>もん</sup>  
 を。七代<sup>ななだい</sup>迄<sup>まで</sup>は思<sup>おも</sup>召<sup>め</sup>捨<sup>す</sup>らるべき。それに成親<sup>なりちか</sup>と云<sup>い</sup>無用<sup>むじゆう</sup>の徒<sup>いたづら</sup>者<sup>もの</sup>。西光<sup>さいくわう</sup>と申<sup>まを</sup>。下賤<sup>げせん</sup>の不<sup>ふ</sup>當<sup>たう</sup>人<sup>じん</sup>がや  
 事<sup>こと</sup>に附<sup>つ</sup>せ給<sup>たま</sup>ひ。動<sup>うご</sup>すれば此<sup>こゝ</sup>一<sup>ひと</sup>門<sup>もん</sup>と滅<sup>ほろ</sup>ぶるべき。は結<sup>むす</sup>構<sup>かま</sup>こそ奇<sup>あや</sup>しけれ。此<sup>こゝ</sup>後<sup>のち</sup>も譏<sup>ざん</sup>奏<sup>そう</sup>する者<sup>もの</sup>あら  
 ば。當家<sup>たうけ</sup>追討<sup>ついたう</sup>の院<sup>いん</sup>宣<sup>せん</sup>と下<sup>くだ</sup>されんは必<sup>ひつ</sup>定<sup>ぢやう</sup>せり。朝敵<sup>てうてき</sup>と成<sup>な</sup>つ。悔<sup>く</sup>る共<sup>とも</sup>益<sup>えき</sup>あし。暫<sup>しばらく</sup>く世<sup>よ</sup>の靜<sup>しづ</sup>らん程<sup>ほど</sup>。法<sup>はふ</sup>



皇をば。鳥羽の北殿へ稀し参らするか。これへ希有御幸を。あし奉らんと思ふは。いかに。其儀  
 ちらむ北面の者共が中より。箭一筋も射んと思へば。用意せよ。侍共へ觸知せよ。入道院  
 方の奉公思ひ切ぬ。馬に鞍置せよ。著背取來れよと宣ひける。主馬判官盛國。急ぎ小松殿へ馳  
 参り。世のはや斯いと告げれば。大臣殿聞も敢ず。嗚呼はや成親の首刎られしよと宣へむ。其儀  
 にては。いはば。侍共迄打立て。院の御所法住寺殿へ押寄。取奉りまれ御幸あし参らすとて。内  
 實は鎮西の方へ。流し給んと擬せられしと。大臣殿何ゆゑ唯今さる御事。おはさんとは思  
 れけれ共。今朝禪門の。物狂しき氣色にては。もしさるともやとて。急ぎ車を飛せ。西八條殿  
 へ到り。門に入て見給へば。入道殿腹巻を着玉ひ。一門の郷相數十輩。各色々の直垂に。思ひ  
 く。鎧着て。中門の廊に。二行に着せられ。其外諸國の受領衛府。諸士縁に居溢れ。庭にもひし  
 と並居たる。旗竿共引をばめ。馬の腹帯と堅め。兜の緒を縮。今にも打立ん氣色あるに。小松  
 殿烏帽子直衣。大綾の奴袴のそと取て。悠然として入給ふは。事の外にぞみへ給ふ。入道ふし  
 目に成て。例の内府の振舞よ。大に折檻せばやと思はれしが。流石子がから。内には五戒を  
 保ち慈悲を旨とし。外には五常と亂す。事には禮正しき人あるを。其姿に腹巻して對んと。耻

しうや思れけん。障子少し引立腹巻の上に素絹の衣を周章着に。着給ひしが。胸板の金物少し  
 迦てみへたるを。藏さんと頻に衣の胸を引違くぞし給ひける。大臣殿は宗盛公の座上に着  
 れしが。父子互に何も言で見合されしが。漸入道殿ささるるは。成親の謀叛は。事の數にはは  
 ず。一向法皇のひ結搦に。いぞや。暫く世を静んはせ。法皇をば。鳥羽の北殿へ移し参らすか  
 是へ希御幸と成参らせんと。扱かく支度に及べりと。大臣殿聞もあへず。はらくと泣れけ  
 る。入道殿さて如何にやと。忙然給へば。大臣殿涙を押へ。此仰承り。いかに。い運ははや末に  
 成ぬと覺へ。人運命の傾んとては。必ず悪事を思ひ立ひ。又形勢を見参らすに。更  
 更に現とも覺ひはす。さすが我朝は。天照太神の。孫國の主として。天兒屋根尊の御末。朝  
 の政を。司せ給ひしより以降。太政大臣の官に至。八甲冑を。鎧ふと。禮儀に背き。とに。出  
 家の。身。三世の諸佛。解脫。同相。法衣。と。脱捨。忽ち。身。甲。し。弓。箭。刀。鎧。を。帶。し。給。ん。は。内。破。戒。無  
 慚の罪を招き。外仁義。禮。智。信。に。背。け。ず。恐。る。申。條。あ。の。ら。心。の。底。に。旨。趣。を。殘。す。べ。き。に。あ。ら  
 ず。世に四恩あつて。天地の恩。國王の恩。父母の恩。衆生の恩。其中に。最。朝。恩。重。い。普。天。の  
 下。王。地。に。あ。ら。さ。る。は。あ。し。さ。れ。ば。穎。川。に。耳。と。洗。ひ。首。陽。山。に。膝。と。折。し。殊。庭。古。の。賢。人。も。勅



命そむきがたきを存ずと承る。いはんや先祖にも聞ざる。太政大臣と窮られ。重盛が無才  
 愚暗の身にて。運府槐門と大臣の位に至り。加之國々郡々半は。一門の所領と成て。田園悉  
 く一家の進止たり。是希代の朝恩にひはずや。今莫太の皇恩と忘給ひて。狼に法皇と傾け給  
 わんは。天照太神正八幡の。神慮にも背せいはん。但し父の思召立る。處。道理半無に非ず。  
 此一門は代々朝敵と平け。四海の逆浪と静しは。無双の忠赤れ共。其賞に倂らむ。傍若無人と  
 サベし。聖徳太子十七个條の憲法に。人皆心あま。心各執あり。彼と是し我と非し。我と是  
 し彼と非す。是非の理誰か能定むべき。相ともに賢愚之。環の如くにして端なし。爰と以て  
 縦ひ人怒ると云と。却て我咎と懼よとみへて。然其當家の運命未盡ざるに依て。謀叛  
 已に顯れひひぬ。其上仰合さる。成親と召置る。上は。たどへ君いかなる不思議と思召立る  
 ども。何の怖ひべき。所當の罪科行れぬる上は。退て事の由と陳じやさせ給ひ。君の爲  
 には。彌奉公の忠勤と尽され。民の爲には。益撫育の哀憐と施したまは。神明の加護に  
 預り。佛陀の冥慮にも協へし。君も思召直すとひべし。君と臣とと比るに。親疎別方なし。道  
 理と僻事とと双べんに。争か道理に付ざるべき。此度は尤君の理と存る旨もいへば。

叶ざらん迄も。院中と守護し參らせひべし。其故は重盛はじめ叙爵より。今大官に昇るまで。  
 君の恩にあらざるはあし。此恩の重きと思へ。千顆万顆の珠にも超。其恩の深きと思へ。  
 一入再入の紅にも過ぬ。此皇恩と一命にて償ひべし。其儀に至らむ。重盛が身に代り。命に  
 代んと契たる侍共も少々いはめ。是らと引具し法住寺殿と守護致さば。流石以外の外は  
 大事にひひなん悲か。君へ奉公の忠と致んとすれむ。蘇迷盧八万の頂よりも高き父の恩  
 と立地に忘れ。過し保元に。左典義朝。其父六條廷尉爲義を誅したる。先規を踏に似たり。  
 痛しいか。不孝の罪を道んとすれむ。君には不忠の逆臣となりて。青史を末代に汚す。進退  
 已に究ぬ。是非今更に辨がたし。詮する處唯重盛が頭を召れいへかし。然心院中の守護  
 も仕す。院參の供も仕す。異國の蕭何は。功傍に越けれむ。漢高の太相國に至り。劔を  
 帶し脊を履ながら。殿上へ昇るとを許されしも。殺慮に背とありし心。高祖重く警深く罪  
 せられしと。前漢書に顯然。此先蹤を思へ。富貴と榮花と。重職と朝恩と。相兼て究給へば  
 運の盛んと難あるべきにあらす。富貴れ家には祿位重疊し。再實ある樹は其根必傷と  
 やせば。心細くこそいへ。つ迄り命生て乱ん世をも見いはん。唯末代に生を稟てかゝる憂



目に逢い。重盛が果報を程こそ拙ういへ。唯今も侍一人に仰付られ。御壺内へ引出され。重盛が首を刎られんは。いと易き程の事にはへめとて。直衣の袖を涙に浸て。のき口説給へ。一列の方々皆袖を濡されける入道殿頼切たる内府は。かやう宣ふ世にも哀しげにて。いやくそれ迄のことは思寄はず。悪黨共々に君の附せ給ひ。又もいある僻事など。出来んかと思ふばかりにいと宣ふ。大臣殿縦ひいかなる僻事出来いとて。君を何と仕給ふべきとて。つひ立て中門に出。侍共に宣ひけるは。唯今是以てやつる事共をば。汝ら能承すや。今朝よりかやうのと共。や静んと存。扣在たれ共。混騒に見へつる間。先歸つる。院參の儀に於ては重盛が首の刎られたらんを見て仕れ。さらば人參れとい。小松殿へ歸られける。其後主馬判官盛國を召て。重盛こそ今朝別して天下の大事を聞出したり。我を我と思ん者。物具して急ぎ參れと催せと宣へ。馳廻つて披露す。を不ろけにて。騒ぎ給ひぬ人の。かやうに披露あるうへ。誠に別の子細有らんとて。我もくと馳參る程に。淀羽東瀬。宇治淵屋日野勘修寺。醍醐小栗栖梅津桂大原志津原。芹生の里に。溢居兵共或は鎖着て。いまた胃を着ぬもわり。ゐるひの矢負ども。未だ弓を持ぬもわり。片踏踏や踏ざるに。周章騒て

馳參るほどに。小松殿に。騒ごとありと。聞へしかば。西八條に數千騎ありける。兵共。入道殿に。右ともやさでさやめきつれ。皆小松殿へ馳たる程に。弓箭に携る程の者一人も残らず。筑後守貞能唯一人ひひけるを召て。内府の何と思ひて。是らを皆かくまで。呼取やらん今朝是にて云つる様に。淨海が許へ。討手をも向るにやと宣へ。貞能涙をうかべ。人も人にこそようめ。争か唯今さる事。のいへき今朝の事共。早皆後悔どいんとすける。入道殿いやく。内府に中違ふて。世の人の思ひ付もわしく。却て一家騒乱せんとを恐れ給ひけん。法皇を迎奉らんと。の心も和ぎ。急ぎ腹巻を脱。素絹の衣に袈裟打掛て。心にも起ぬ。念誦してこそ坐けれ。偕も小松殿に。盛國承つて着到付ける。馳參る侍。矢庭に。一万餘騎ぞ注しける。着到披見の後大臣殿中門に出。侍共に宣ふ。日來の契約を違す。皆々早速の參着神妙之。今朝別して天下の大事を聞出せし故召つる。されども此事聞直しつるが。僻事にてありし。然る上の疾々歸るべし。自今以後も召とあらば。かくの通り。速に馳參ふべしとて。各歸されけり。全くさせる用のなかりしかども。今朝父を諫やさる。詞に隨て。我身に勢の付か付ざるかの程をも知。又父子軍をせんとに。いあらね共。入道殿謀叛の心も。



柔き給ふかどの謀ありし。入道殿かく速に勢の集りしを聞れ。小松殿の人心版降するを。感歎し給ひしと。君君たらずといふとも。臣以て臣たらずんば有べからざ。父父たらずといへども。子以て子たらずんば有べからず。君の爲に忠有て。父の爲に孝あれ。孔子の宣しに違は法皇後に此由を聞し召。今に始ぬとあれ共。内府が心の中こそ辱しけれ怨をば恩を以て報じたりと被仰し。國に諫る臣あれ。君道あくと。天下を失せ。家に諫る子あれ。令名を失はずと云。先言にも相叶ひ。上代にも末代にも又あるまじき大臣と。

論者いわく。平家物語流布の本に。周の幽王愛妃褒姒の生質常々笑ふとあし。烽火臺に火を揚けれ。諸軍勢相圖を違す。馳來て寇に備しとあり。褒姒見て始て笑り。幽王是を歡て寇もあきに烽火を擧らる。諸侯の軍勢到着すれば。更に寇なし。後々の諸侯怒。后實に寇あつて。烽火を揚れ共一卒も到す。犬戎と云へるぬひす。竟に周を亡せりと。此事を揚て書り。され共重盛公の不用に兵を召たる。すの法皇の御所を固む。かくのことし。父入道を恐れしめ。法皇へ對し父の不忠あからん爲。天下と家の爲にせられし。諸軍を欺に似て。幽王の兵を召たると同日の談にあらず。此時の後も最明寺時頼。諸國を

巡られしに佐野源左衛門常世と云浪士。鎌倉に此事あらんに。妻に口を取せ。瘦馬に策て。一番に馳參らんと申し。虚實を捜らんと。急に兵を召けれ。諸國の軍勢馳集とし。果して常世其中に在時頼感。三箇庄を領知すべし。墨附を給りしとある。謠曲の作。とものより出たれば論するは足す。

新大納言配所お奉去。藤藏人謀めて徳大寺殿昇進。鬼界島あて康頼卒都婆を流す。去程お六月二日。新大納言成親卿を。公卿の座に出し。物進せけども。胸塞ては箸をさへ立てられ。預りの武士難波次郎經遠。馬車を寄て疾々とやけれ。大納言心あらずも乗給ふ。哀れかにもして。今一度小松殿にまみへ度。思れけれ共叶ひ。重料にて遠國へ行も。譜代家子一人二人の身も副るに。打圍たる軍兵共。我方様の者絶てあけれ。いよく涙に沈れぬ。西の朱雀を南へ行。大内山も今餘所に見給ひける。都小残り給ふ。北の方少き人々の心まで推量られて哀。鳥羽殿を過給ふにも。此御所へ御幸なりしに。一度もは供にもれざりしをとて。我山庄洲濱殿とてありしをも。餘所にみてこそ通られけれ。鳥羽の南の門出て。船廻しとぞ急せける。近う副奉りたる武士を誰ぞと問給へ。預りの武士難波次郎



経遠と名乗たり。若此邊に我方様の者やある。一人尋て参らせよ。舟に乗ぬ先に。云置へきことありと宣ふにぞ。経遠走廻て尋ねけれ共。我ころ大納言殿の方とや者一人もあし。卿の涙を流し我世も在し時の。随ひ付たし者。二千も有つらん。今之餘所にてだに。此有さまを見送る者のなかりける。悲さよとて。泣れしか。猛き武夫共も。鎧の袖を濡しけり。此卿死罪を流罪に宥られし。小松殿種々やされけるに依てなり其日の。攝津國大物の浦に着給ふ。明る三日京より使者とて聞くゆる。こゝにて失のるゝかやと。聞給へ。備前兒島へ流すべしとの使。小松殿よりも文あり。いかにもして都近き。片山里にもと。色々すつれ共叶のさりし。去ながら命ばかりの乞請て。心易く思召れいへとて。難波が許へ能々官致せ。相携て心にし差ふると仰越れ。旅の装細々沙汰し贈られぬ。新大納言の厚く。添う思されけり。され共君に離れ参せつかの間も去のたく思れし北の方。少き人々にも別れ果。みかある土地へ行とぞ。雲と道とつらざるのみにて。再び古郷へ歸り。妻子を相見んことも有たし。一とせ山門の訴訟にて流されしも君惜せ給ひ。西の七條より召取されぬされば是の君の。禁にもあらず。いかる難難を經とも。歸る期も有てころ。今とた首を刎

らること増るらめど。涙に咽泣悲めともかひざる。流石に露の命消やらで。跡の白波隔れば都の次第に遠ざかり。日敷繁れば。遠國既に近づきて。備前の兒島に漕寄。民の家のいふせきに入奉る。島の習後。山前。海。磯の松風波の音。いづれ哀の彌増ける。此卿のみにあらず。警らるゝ輩多かりし。近江中將入道連。淨の佐渡國。山城守基兼。伯耆國。式部太輔正綱。播磨國。宗判官。信房。阿波國。新平判官資行。美作國と聞へける。折節入道相國。福原の別業に座ける。同廿日攝津左衛門盛澄を使者にて。門脇殿の許へ。夫に預置し。丹波少將を。急ぎ是へ給ひ。存る旨有と申道されける。宰相さらば有し時。左も右もなりたりせば。如何せん。ふたゝび物思のせん。悲しよとて。此事告られしか。少將泣く出立れけり。北の方女房達。猶も宰相の能にやさせ給へかしと。歎かれければ。宰相存る程のどの皆やつ。今世を捨んより外。又何事をかすべ。何國の浦にもあせよ。我命のあらん限の訪ひやべしと宣ひける。少將の今年三ツに成給ふ。小き人のおいしけれ共。日來の若き人にて。公達をどのとを。細やかに坐ざりしか共。今時の時にも成ぬれば流石懐しうや。少き者を今一度みばやと宣ふゆる。乳母抱て参り。少將膝の上に置。髪搔撫涙を波落くと流



し。哀汝七歳にあらば男に成して君へ進せんと思ひしに。今云のひまし。若不思議に命  
 成長たらむ。法師に成て。我後世を吊へよと宣へ。未幼き心は何事かを聞別給ふべき  
 むれ共。打頭頭給へ。少將を聖母上乳母の女房其座に在合人々。心あるも意あさむ。皆袂を  
 絞ける。福原の使。今夜鳥羽迄は出有べきよし。少將いく程も延ざらんものを。今宵斗は  
 都の内めて明さむやと宣へども。いかにも叶ふまじきと。頻に申ければ力及せ其夜鳥羽へ出  
 づれける宰相餘りの物憂に。今度の乗も具し給はず。少將ばかりぞ乗給ふ同廿二日少將福原  
 へ下り着給ふ。入道相。國備中國の住人。瀬尾太郎兼康に仰て。備中國へ流されけり。兼康の  
 宰相の聞給ふを恐れ。緊しう當りやさず道すがらも。さまぐ痛り進せけれ共。少將の慰み  
 給ふとなく。夜晝唯佛名を唱へ。偏父の心を祈られける。新大納言成親卿の。備前の兒島に  
 座けるを。是の舟着こと。備前備中の境。庭瀬の郷吉備の中山有木の別所と云。山寺に置  
 れけり。少將の座ける。備中瀬尾と。有木の別所の間。僅五十町に足ぬ所あるべ。少將に  
 其方の風も懐しう思れ。或時兼康を召て。是より大納言のわする處へいか程あるぞと問  
 給へ。直に知せを悪かりなんとや思ひけん。片道十二三日いと答ふ。少將涙をいらくと

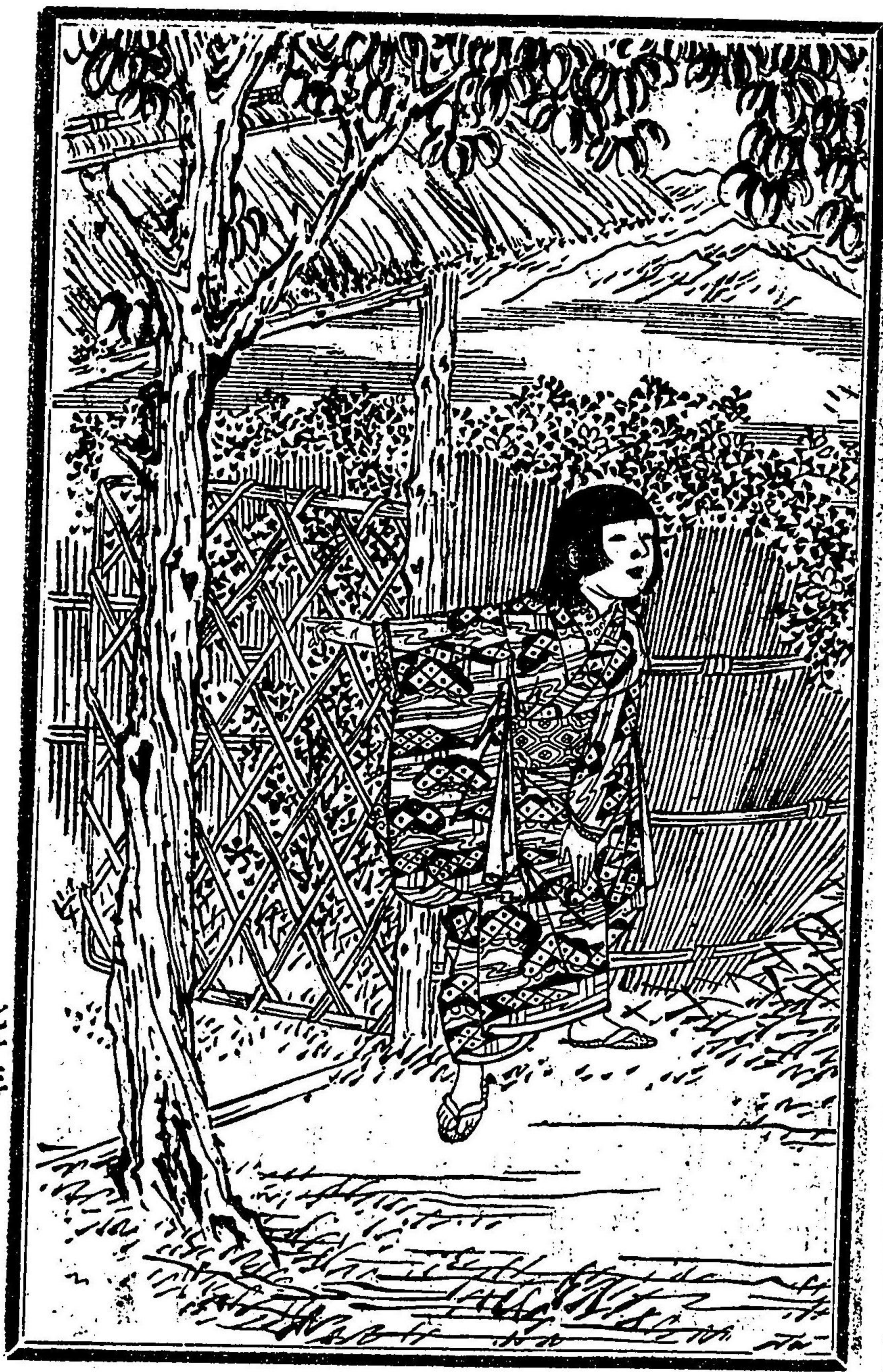
流し日本ハ昔三十三ヶ國にてありしを。中葉六十六國に分られり。備前備中備後も本の一  
 國にて有し也。東に開ゆる出羽陸奥も。六十六郡二國にて。十二郡を割て。出羽國を立られぬ  
 されを實方中將奥州へ流されし時。陸奥の阿古屋の松に樹隠れて出づる月の出もやらぬか。  
 と詠し古歌を思ひ出。其松を見んとすれ共なかりしかと。古老の告今や其所の割れて。出羽  
 の西になりしと聞。出羽の國に越て。阿古屋の松を見りしと。や。筑紫より都へ。腹赤の  
 使の上る。歩路十五日の定也。汝がやごとくすでに十二三日行。殆鎖西へ下りあんの。備前中  
 後の間。兩三日にのよも過じ。遠うやの。父の渡り有處ゆ。成経に知せじとてのとなら  
 めど。其後の懸しけれ。とも問給ふ。切又法勝寺の執行俊。寛僧都平判。官康頼外に丹波少將  
 成経の備中國の配所を替。以上三人。薩摩方鬼界が島へ流されける。是の渡路途に幾つ一行  
 所にて。人種ゆ船の通ひもなし。適人われ共。衣裳をけれ。人にも似せ言詞の聞知れず。  
 身に毛生。色黒く牛のおどし男の烏帽子も着す女。髪も下す結す。食する物なけれ。唯殺  
 生を業とす。腰が山田を返さね。米穀の類ならなく。國に桑を植ざれ。絹綿の類もなし  
 島の中高き山あり。鎮に火燃て。硫黄充滿され。硫黄が島共名付り。雷鳴上り鳴降。



龍の雨しげし。一日片時人の命を保つべき手術もなし。新大納言の少し甘く事もやと思れけるが。近き程に座と思れし。子息丹波少將成経共三人。鬼界へ流されぬと聞。今いつをか期を乞ふとて。出家の願便に付て。小松殿へ申されしかば。法皇へ伺は免あり。榮花の袂引變て浮世を餘所に墨染の袖にぞ書き給ひける。去やどに大納言の北の方の都の北山に忍びぬせしが。住馴給ひぬ處の物うきさに。彼も是も忍ばれて。過行月日も暮し煩ひ給ふ女房侍も多かりしが。或の世を恐れ。人目を裏み。問訪ふ者もあし。中に源左衛門信俊と云侍情ありて。常々訪ひ参らせし。或時北の方信俊を召。誠や殿に。備前の兒島においせしが。今の有木の別所とかや。又座と聞。いかにも而墓さ。筆の跡をも進せ。返事をもし。び見ばやと思へども。よすのさへあしと宣へむ。信俊涙を浮。某幼少より。憐れを蒙り。片時去す召れける。は塵耳に忘れが。くひ。中國へ下りの供願しが。六波羅殿に取上りあし。どひいがあるうきめに逢ひ共。は文給り参りゆゆんと申ける。北の方斜さらず悦び。願て文を認渡され。若君姫君。面々に文あり。信俊取集て懐中し。遙く備前國。有木の別所へ尋下り。先預りの武士。難波經遠が方へ云入れれば。其志を感じ。は見参を免しけり。大納言

木道の唯今しも都のとをのみ云出て。歎き沈おのせし所へ。信俊が参しと聞れ。其の誠かど趣揚。いかにやいかに夢かや現のや。是へと申されける。信俊は側近う参て。は有様を伺ふに。は栖居所の物愛のさると。墨染の袖を見るに。目もくれ心も消果。涙の漣を塗難けり北の方仰の次第。濃に語すは文取出し奉る。開て見給ふに。水蓮の跡の涙に書かれて。そここのかどの見ねども。少き人と餘りに慈悲み給ふ有さま。我身も盡ぬ襟に。堪忍べくもあらずと書れられ。日來の戀し。事の數あらずと歎き給ひける。かくて四五日も過しかば。信俊これにて。は家期の有さまをも。見参せんと申けるを。預りの武士。其義の叶ふまじと申間。大納言幾ほども延ざらん。唯疾歸れと宣ひける。我の近う失われんと覺るぞ。此世にあさど聞。後世をも吊ひつべよと宣つ。返事給りければ。信俊の又こそ参りゆゆめて。暇すて出けれ。汝が又來ん度待付べしとも覺ぬぞ。餘り名残惜けれ。暫くと宜ひの方へ参。返事を奉る。開て見給へば。はさまかへさせ給ふと覺しく。は文の奥に。髪の一房ありけるを。二目共見給ひて。紀念ころ今の中く仇なれと。引被てぞ臥給ふ。若君姫君





源左衛門信俊  
大納言入道の  
所迄るを北の  
方へ奉る圖



〇聲々に喚叫ひ給ひけり。去はるに同八月十九日中山有木の別所にて。終に失ひ奉る。此  
 最期の有さま。始の酒に毒を交て進らせし。叶さむけるにぞ。二丈餘りの岸の下に鐵蒺藜  
 を種て。突浴しければ。貫つてぞ失られける。無下に見方みへ給ふ。北の方此よし傳聞  
 給ひいかにもして。今一度見もし。見へをやと思ひてこそ。今日まで委も替ざりし。今何か  
 いせんとて。菩提院と云寺におのし尼になり。佛事作善の營。他事なかりし。此北の方。山  
 城守敦方の女。後白河法皇の思ひ人。双なき美人なりしを。大納言有がさ。寵愛の人ゆ  
 る。下し給りし。若君姫君花を手折。關御掬。父の後世を吊ひ給ふぞ哀なる。眼前天人の五  
 衰に異ならず。爰に徳大寺大納言實定卿。平家の次男宗盛卿に。大將を越れ。暫く世のさま  
 をも見んとて。大納言を辭し。籠居しておのしける。今出家せをやと仰けるを。御内の上  
 下皆歎き悲しみける中に。藤藏人大夫重兼と云諸太夫有。諸事に心得る者にて。或夜月を  
 弄。嘘。おのする處へ参じ。君に。出家の思召しよし。左いて。上下の内迷者と成けり  
 ぬ。今平家の体をみるに。嫡子重盛公次男宗盛卿。左右の大將。や。のて三男知盛。嫡孫維盛  
 と。次第に懸れば。他家の人々。いつの大將に當つくべき。それにつま。珍しき旨を案じ出し。

安藝の嚴島。平家崇敬。後からず。是へは参籠有て。鬼して角し給へど。手術濃に語りければ  
 徳大寺殿。思はず。横手を打て。汝が工夫曾て思ひよらざりきとて。能々納得し。俄に精進を始め。  
 嚴島参籠ありける。儼ある舞姫共多く立出て。抑當社へ。我等の主の。平家の公達ころ。は  
 参り侍らふに。珍しきは。参として。宗徒の内侍十餘人。夜晝付副さま。款待奉る。さて内侍  
 共。何事の祈禱やらんと尋侍れを。大將を人に越れて。其祈の爲と宣へり。一七日参籠の間  
 神樂を奏し。風俗催馬樂歌の。其間に舞樂も三个度迄有けり。は下向の時。宗徒の内侍十餘  
 人。船推立一日路。送奉る。徳大寺殿。餘り名残を。しさに。今一日路。今二日路と宣ひて。都まで  
 召具させ給ひ。徳大寺殿の亭へ入させおのしやし。さま。ぐ。にもてあし。数々の引出物賜て  
 歸されけり。内侍共の途。是迄上りる。争か我等の主の平家へ参ら有べきとて。西  
 八條殿へ参ける。入道殿やがて對面し給ひ。内侍共。唯今何事の列参ぞやと宣へ。徳大寺  
 殿の嚴島へは参籠ゆへ。我。船を仕立て。一日路送り参らせ。暇をさせしを。徳大寺殿名残  
 惜とて。今日。今日。二日と仰られ。つひしか。是迄召具せられ。京へ出て。當家をよるに。飯るべ  
 きやと。かく参じ。なりと。入道殿重ねて。其徳大寺の何事の祈誓に。参詣ありつるや。さん



大將を人に超られ。其所の爲と仰られひひきと。其時入道殿打點頭。王城にさしも靈社靈  
 佛。多く座をさし置。淨海が崇めず嚴島へ。遙々参らるゝこの最愛さよ。それ迄切あらんに  
 ぬとて。嫡子重盛公。内大臣左大將にては座けるを辭させ。次男宗盛卿。大納言右大將さるを  
 超させて。徳大寺殿を左大將にあされける。あつはれ實計ひかあ。皆是實定卿の忠臣。藤  
 藏人大夫重兼。主人を思ふ方すに出さり。徳大寺殿重兼を重く賞し給へり。新大納言かくも  
 計らひで。謀叛を企其身の流されて亡び。子息に鬼界島の辛苦をかけられしこと是非かけ  
 れ。扱又法皇の三井寺の公顯僧正を師範として。眞言の秘法。大日經。金剛頂經。蘇悉地經  
 の秘經と受させ給ひ。九月井三寺よては灌頂有べきと聞ゆ。山門の大衆大に憤り昔よ  
 りは受戒の。當山よ遂させ給ふ先規あるを。今三井寺よ遂給ひ。當山を燒拂んと沙汰する  
 ゆへ。法皇は加行斗は結願有ては灌頂の思召留給へり。されども公顯僧正を召具し天王  
 寺へは幸有て。五智光院を建龜井の水と五瓶の智水と定め。佛法最初の靈地にて。傳法灌頂  
 のの本意を遂させ給ふ。山門の騒動を靜給ひん爲。三井寺にては灌頂をかりしか共。山門  
 への堂衆たるや中間の法師原寺と學生不快れ事出来。合戦度々及諸國の強盜。山賊海賊等。堂衆

も合躰し。大合戦と成故。山門より公家へ奏問し。武家は觸訴るゆる。入道相國院宣を承て。  
 紀伊國に住人。湯淺權守宗重。畿内の兵二千餘人。大衆に添て堂衆を攻けれども。幾度も官  
 軍敗軍せり。其後山門荒て。止住僧侶希あり。十二禪衆のみみれば。行法退轉し修學  
 の窓を閉。四敷五時の春の花も匂す。三諦即是の秋の月も陰れり。三百餘歲は法燈と。挑る人  
 もなく。六時不斷の香の煙も絶るごとし。堂舎高く聳。三重の構を。青溪の内お挿み棟梁遙  
 り秀て四面の椽と白露の間に掛たりしも。今や供佛と嶺の嵐に任せ。金容を紅漉し。濡し。夜  
 の月檐の間より洩て燈を挑げ。曉の露蓮座よ珠を垂。末世のゆるる例もありや。遠く天竺の  
 佛跡と吊らふに。昔佛の法を説給ひし。竹林精舍孤獨園も日來り狐狼野干の栖と成て。礎  
 のみ残り。白鷺池は水絶て。叢蕃り。進梵下乘率都婆も。傾て莓茂ぬ。震且にも天台山。五臺  
 山。白馬寺。玉泉寺も。今住侶もあく荒果。大小乗の法門も。箱の底にや朽ぬべし。我朝も南  
 都の七佛寺。八宗九宗も。兼學お名のみとめ。愛宕高雄も。昔の堂塔軒を双べたりしが  
 一夜の中に荒て。天狗の栖と成ぬささびあやさしも止ごどあく貴き。天台の佛法も。治承の  
 今に及で。亡果ん時來しやと。歎さし之。何者り離山せし僧坊の柱。一首の歌と書付たり



祈こし我立袖の引替て。人あき嶺とわれやはてゐん

昔傳教大師當山草創の時。阿耨多羅三藐三菩提の佛達を祈。伽藍落慶の上。我立袖とヤされしよと。今も嶺山の一稱のおとし。彼是思出で詠たることいと優しけれ。八日の薬師の日もれ共。南無と唱る聲もせず。卯月の垂跡は月あれ共。幣帛捧る人もなし。朱の玉籙神久て注連繩のみぞ残ける。其比信州善光寺炎上せり。此如來の中天竺舍衛國。月蓋長者閻浮檀金と得て。佛の目蓮長者心と一にして鑄顯し給へる。一擲手半の彌陀の三尊。三國無双の靈像之。佛滅度の後。天竺に止り給ふと。五百餘歲佛法東漸の理。あて。百濟國へ移。一千歳の後。彼國齋明王。我朝欽明天皇の御宇に。日本へ渡され。難波の堀江へ星霜と經ぬ信州水内郡に移まして。五百八十餘歲。されども炎上の。是と勅とすとや。去程は鬼界ヶ島の流人共。露の命草葉の末ふかへり。丹波少將の眞。平宰相教盛の領地肥前國鹿瀬の庄よと。常は衣食と送りし故。俊寛康頼やで。命生て過しける。中にも康頼の。流されし時。周防の室積にて出家し。法名性照と付たり。出家は元來望ありければ。かくこそ思ひつけけれ。終にかくそむきはてける世の中と。よく捨ざりしとぞ悔し

丹波少將と康頼入道の。熊野信仰の人にて。いかみりして此島の内へ熊野三所を勧請し。歸洛を祈らんと。似たる所もやと求るに。或は林塘の妙なる有。紅錦繡の粧品よ。或は雲嶺の恠あり。碧羅綾の色一ツにあらす。山の氣色樹立のさま。尤他も勝。南の漫たる洋海。雲煙の浪深く北の峨たる山岳。百尺の瀑布。松風の音寂莫として。飛瀧權現の在耶智の丘山に髣髴たれば。是と飯名名付て。此嶺の新宮。彼嶽の本宮其他何の王子。某の王子と名とやて。兩人毎日熊野詣の眞似して。澤邊の水と垢離にかきてり。若田河の清き流と思ひ。高きに上てり。發心門と觀じける。或夜兩人して通夜しける。夢に沖より來風に木の葉二ツ。兩人が袂へ吹りけたと。是を取てみれば。御熊野の梅の葉二葉とも。一首の歌を蟲をみたり。千葉やふる神にいのりのまげなれば。あどる都へ飯らざるべき。康頼入道餘り故郷の戀しきま。せめての謀にや。千本の卒都婆と造り阿字の梵字。年々月日。飯名實名二首の歌をぞ書付ける。薩戸がた澳の小島に我ありと。親にいつげよ八重の汐風。思ひやれまをしと思ふ旅だにも。猶古里の戀しきものを



是を浦に持出。南無飯命頂禮。梵天帝釋。四大天王。堅牢地神。王城の鎮守。諸大明神。別して熊野大權現。安藝の嚴島大明神。せめて一本ありとも。都へ傳て賜と。沖つ白波の。寄てり飯す度ごとに。卒都婆一本づつ。海を浮へける。卒都婆の造り出す。海に流しける。日數つもれを。其數も積り。物思ふ心や便の風とも成たりけん。又神明佛陀の送せ給ひしや。千本の内一本。藝州嚴島神前の渚へ打上たり。こゝに康賴入道が。所縁の僧。もし然るべき便もあらば。彼島を渡り。其行衛も尋んど。西國修行お出ける。先嚴島へ參。心靜に法施して立出んとしけるが。満くる潮。沖よりそこはのとあく。打寄る藻屑の中。卒都婆の形みへけるを。何心あく取てみれば。歌も姓名も彫入刻付たれを。波にも洗われず。鮮明のみへたり。殆不思議のことで。笈の傍に差て。都へ歸上り。康賴が老母尼公。妻子共れ。一條の北。紫野お忍びぬたる。是とみせければ。一度は其無事あると悦び。此卒都婆。高麗唐土の方へも流れずして。是迄傳へ。今更物と思すらんと。悲しみけるが。途の報聞お及て。法皇親覽あり。あな無慚。この者共が命。未だ生てあるにぞと。涙と流させ給ふぞ。悉く。是を小松大臣の許へ遣さしり。父の禪門お見せ奉らる。柿本人丸の。島がくま行船を思ひ。山邊赤人の。蘆邊

の田鶴と詠給ひ。住吉の明神の。片削の思ひをさし。三輪明神の。杉立る門をさす。昔素盞鳴尊。三十一字の和歌と。讀始給ひしより以來。諸の神明佛陀も。彼詠吟と以て。百千万端れ思ひと述給ふ。入道殿も岩木あらねば。流石哀けよ宣ひける。入道殿の。憐給ふ上。京中の上下老若。鬼界が島の。流人れ歌よとて。口ずさやぬりあかきけり。千本迄作出せる卒都婆あれば。さこそ少さうも有けり。薩摩方よりはるぐと。都まで傳りける不思議さよ。古漢王胡國と攻られし時。大將軍李少卿と以て討しめける。三十万騎の大軍を帥たれ共。戦まけ。季將軍胡に。擒し故。再び蘇武を。五十万騎と以て討しむる。是も胡に生捕とありし。ハ。胡降參を勸れ共。更に肯ず。よつて六千餘人れ生捕と。片足づつ。別て追放れしかば。多く胡地に死せし。蘇武一人の死せず。木の實落穂と捨て。十九年の艱難と經たれ共。尸の足へ文と附て放せし。漢朝に達し。竟に節を全ふして故郷お飯りしと云り。是の二筆のす。是の二首のよみ歌。彼の上代是の末代。胡國鬼界。境と隔て。世々こそ替れ。風情の同じ。有難うりし次第。

平家物語圖會卷之二終



平家物語圖會卷之三

東武 高井蘭山翁述

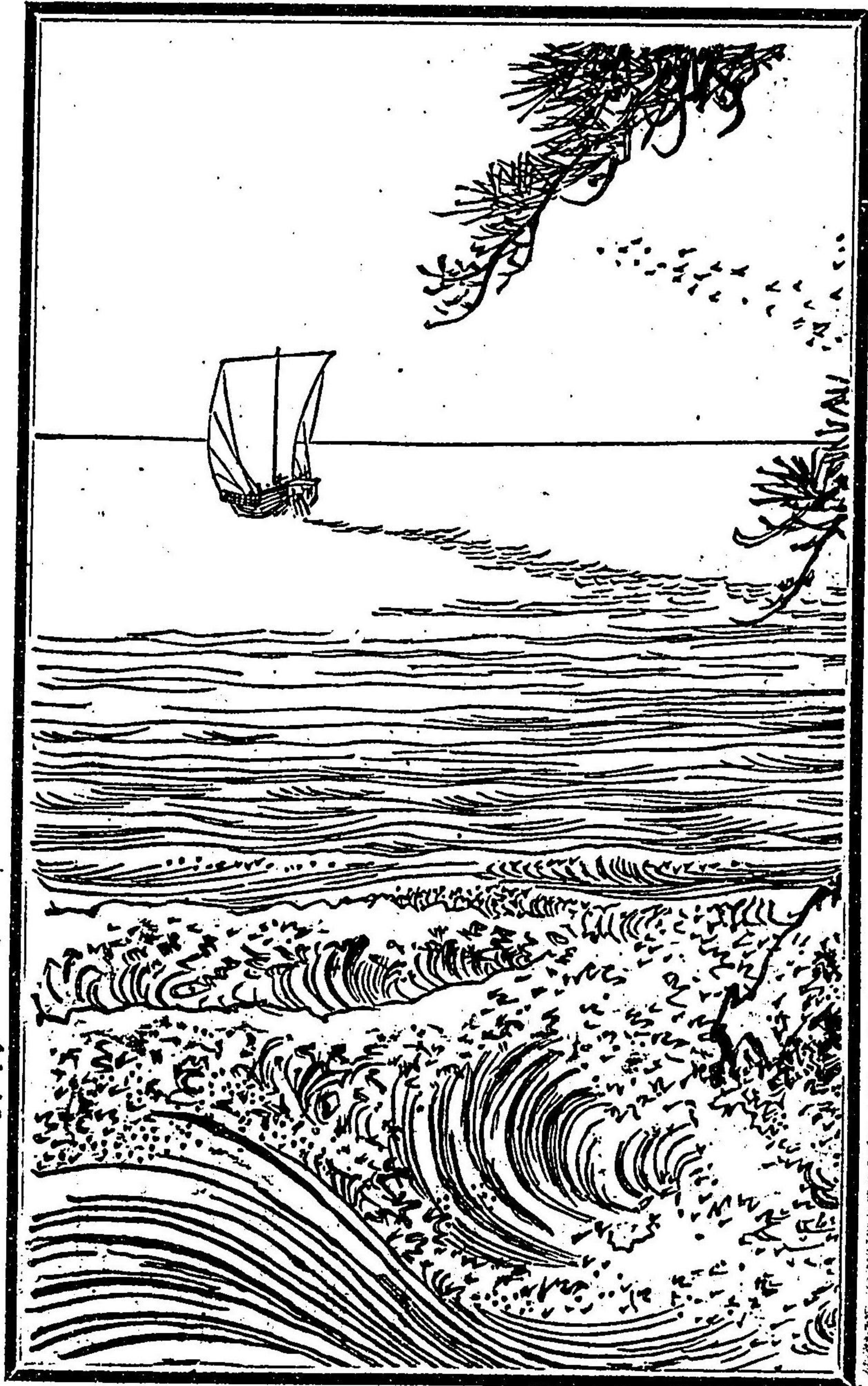
丹波少將成經、平判官康賴法師赦免、中宮御産皇子御降誕

治承二年正月。院の御所拜禮。朝觀に行幸。恆例の如しといへ共、去年の夏新大納言成親卿以下。近習の人々多く。流され失はれし。法皇は憤も止す。世の政萬事物愛思召。快ぬとのみ。太政入道多田藏人行綱の告知せし後、君とも護影とも思奉。上へ事なく。下心は用心専一。若笑してのを居られたる。同七日の夜より出尤氣。星東方より出十八日に。芒光甚だ廣大なり。時、中宮御惱に依て。諸社の奉幣。諸寺の御讀經大法秘法殘所。く修行せしむ。其の官醫の診御懷妊と鑑定。土上の十八中宮。廿二にて。未皇子姫宮とも。みましやます。若皇子御降誕。いかに目出度。平家の人々悦む。他家にても平氏繁昌の折と得て。入道相國外祖たら。威光法皇の上に出んとすける。彌御懷妊。定し。入道殿有驗の高僧貴僧。令て。變成男子の御新禱と修せしむ。六月一日御着帯。











して急げ共。海路心に任せず。浪風と凌ゆく程。都の七月下旬出たれ共。長月廿日。鬼界が島に着にける。御使の丹左衛門尉基康之。急ぎ陸の上をみる。事問人毛見當され。姓名を高らう。呼聲くみ尋ねける。二人の例は熊野詣して居す。俊寛の淳直からぬ氣質ゆゑ。熊野などれこと。思ひものけす。此時も一人在けるが。人呼聲と聞。餘りに思へ。夢やらん又の天魔波旬の。我心と誑みやと。周章ふためき。走るともあく倒る共なく。御使は前を行向ひ。是ぞ流れし。俊寛よと名乗ける處へ兩人毛歸來ぬ。雑色が頸に掛させし。救文を取て渡しける。披見しに。重科の恩流に免す。早く歸洛の思と成べし。今度中宮御産れ御祈に依て非常に赦行ゆる。然る間鬼界が島に流人。丹波成經。康頼法師二人赦免。とむらりよて。俊寛が名あし。俊寛取てもし蠟紙おぞ有やと。みれ共なきま。奥よと端へ讀。端か奥へ讀て。繰返しみれ共。二人と斗書れ。三人と書れす。俊寛このもれりあること。どやどの御使に尋るに。某も二人と。御沙汰候とす。兩人の全く熊野三社の靈験と。各手と合て禮拜するに。俊寛の夢ふころかゝること。のあれ。夢と思ひあさんとすれ。幻之。現と思へ。又夢のごとし。其上兩人の許へ。都より言傳たる文。いくらも有に。俊寛僧都は許へ。

事問文一ツもなし。されば我所縁共。都の内にと跡と留すありけるよと。思ひやる。入覺束さし。抑三人同じ罪。配所も又同じいかるれば。赦免の。二人召返して。一人を殘すべき。平家此思ひ忘れりや。執筆の筆の誤か。このいかふと天に仰ぎ地伏て泣悲め共。のみひぞる。僧都少將の袂お纏。俊寛のやうになるも。御返の父大納言殿。由なき謀叛のゆゑあれば。餘所の事と思ひ給ふ。赦さければ。都までこそ叶すとも。攻て同じ船よて。九州の地迄着て給。各これお坐つる程ころ。春の燕秋の田面の。音信様に。自ら故郷のことも傳へ聞つれ。今よと後の何としてか聞べきとて。悶焦れ給ひけり。少將誠に左こそ思されん。我等の召返さる。嬉さる。さることおひへ共。御形勢と見ては。更お行べき空も覺せぬ。同船よて上り度。存共。都の御使のにも叶ふまじとや。さうも赦なきに。三人ひとしく。島を出たりと聞へ。中々惡ら候べし。成經先上て。人々おもや合せ。入道禪門の氣色とも伺ひ。迎の人進らせん。それ迄と日來の様に思ひ成て待給へ。此度赦免に洩給ふとも。終りのなどの。赦あくて候べし。様々慰めやされければ共。堪忍ぶべくもみへらす。去程よ舟出さんとしければ。僧都船よ乘て。降つ。下て。乗つ。あらましごととせられける。少將の信よ夜の。夜。康頼



入道の紀念よ一部の法華經と殘しける。既よ纜と解船推出せば。僧都綱小取付。腰に成脇  
 あり。長の立まで。引れて出。長も及ず成ければ。僧都船小取付。各々に俊寛と。終  
 終よ捨て給ふ。日來の情も今は何あらず。赦れあければ。都までよ叶すとも。せめて此  
 船に乗。九州の地迄と口説れければ。都の御使のにも叶ひまじとて。取付給ふ手を引除。  
 船とバ遠く漕出す。僧都せん方なく。渚に上り倒伏。幼き者の。母や乳母あど。暮らやうに。足  
 摺して。是乘て行よ。具して行よと云て。喚叫べども。漕行船の習よて跡の白波計也。まだ遠  
 うらぬ船をれ共。涙にくれて。みへざりければ。僧都高みみ走上と沖の方と招かる。彼松浦  
 狭夜姫が。夫狭手彦の。唐土へ乗り出す船と慕ひつ。領巾振けんも。かくやとみへし。船も  
 遙に漕隠れ。日も暮れ共。僧都怪の臥所へも歸らず。波よ足を打洗せ。露に紋れて。其夜の其  
 不明しける。さりととも少將の。情深人あれば。能様にや給ることもやと。頼とかけ。其瀬  
 身を投ざりし。心の中あそはかあければ。扱も兩人の鬼界と出て。肥前國鹿瀬庄よ着玉ふ。  
 宰相京より使と下し年の内の波風も烈しく。道の間も覺束あさま。春も成て上られいへ  
 とある故。少將の此所よ年を暮さる。去程に同十一月十二日。寅刻より中宮御産の御催と

て。京中六波羅混雜す。御産所の六波羅池殿にて左ければ。法皇も御幸あて。關白殿はじめ太  
 政大臣以下。卿相雲客。世よ人と數られ。官加階望をうけ。所帯所職ある程の人の。一人も  
 漏す相詰る。小松大臣の善惡あ付て。噪玉のぬ人ゆる。遙に遅刻し。嫌子。權亮少將惟盛以下  
 の公達迄車共遺棄させ。色々の御衣四十領。銀劔七ツ廣蓋に置せ。御馬十二疋牽せ參せける。  
 是の寛弘。上東門院御産の時。御堂殿御馬參らせ玉ひし。例とぞ聞へし。大臣の中宮の御兄  
 にて坐けるうへ。取分父子の御契あれば。理之。五條大納言國綱卿も。御馬二匹進せらる。志の  
 至か。徳れ餘りうとぞ人ヤける。御立願の神社の。伊勢石清水以下。二十餘所。佛閣は南都東  
 大寺。興福寺と始十六ヶ所。仁和寺法親王守覺の。孔雀經。天台坐主法親王覺快の。七佛藥師  
 法。寺の長吏法親王圓慶の。金剛童子の法。其外五大虚空藏。六觀音。一字金輪五壇の法。六字  
 加輪。八字文珠。普賢延命に至まで。殘るく修せられたれば。護摩の煙御所中。満。鈴の音雲  
 響く。修法の聲身の毛彌堅て。のの御物氣あり共。面と向べくもみへざりけり。され共中  
 宮の隙るく頻せ玉ふ計にて。御産も富よ成やらず。入道相國二位殿。胸の手を置て。このい  
 いせんと忙然給ふ。人れ物ずも。唯左も右も好様に。と斗宣ひける。淨海軍の剛あふ。



かく迄隠せし物をとぞ。後より宣ひける。御職者には房覺・性雲・阿僧正・春葉法印・豪禪・實專・阿僧都。各僧伽の句どもと擧。本寺本山の三寶。年來所持の本尊達。寶伏く揉れければいとせも。尊のりける中に。折節法皇の新熊野御幸あるべきあて。御精進の次ありけるが。錦帳近く御座有て。千手經を打揚く。遊されけるに。今一際事替て。さしぞ躍狂ける。神巫子共少縛き。暫く打靜けり。法皇仰あるの。縦ひいのある物性なり共。此老法師かくて候ハんに。争う近付べき。就中今より来る怨靈と云の。皆我朝恩を以て。人とおしたる者ぞのし。報謝の心をよそ存せずとも。豈障碍とあし得べきとて。水晶の御珠數推揉せ給へ。御産平安の。皇子降誕まじくけり。本三位中將重衡卿。其時のまた中宮亮ありしが。御殿の中よりつと出て。御産平安皇子御誕生いすと高よりよすされければ。法皇を始參らせ。關白松殿の太政大臣以下は卿相雲客。各の助修陰陽頭。典藥頭。數輩のは驗者堂下迄。一同にあつと覺合。聲の。門外迄とよみて聞へたり。入道相國攝しと餘り。聲と揚て泣れける。悦び泣くは是とややべき。小松大臣の急ぎ。中宮のは方よ參金錢九十九文と皇子れば枕お置て。天を以ての父とし。地を以ての母と定め給ふべし。命の方士東方朔が齡と保。御心あり。天照太

神入替せ給へとて。桑の月遂の矢を以て。天地四方を射させらる。乳あり前右大將宗盛卿の北の方と定められしが。去る七月難産にて失給ひしかば。平大納言時忠卿の北の方乳に熱られけり。後に帥典侍殿と呼れ給ふ。法皇頓て還御あるべしと。門前より御車立られし。入道殿嬉しとの餘に。金一千兩富士の綿二千兩。法皇へ進上せらる。是又然べからずとぞ人かける。今度れば産。笑止餘多あり。先法皇のは驗者。次に后は産の時。殿の棟より。飯を轉のすと有けり。皇子は誕生に。南へ落し皇女御誕生に。北へ落すと。是の北へ落されしかば。かよと噪ぎ。取揚落し直されたりければ。猶わしき事と人かける。可咲かりし。入道相國ののされさす。めでたかりし。小松殿の舉動。本意あかりし。宗盛卿最愛の北の方後れ給ひて。大納言大將を辭して。籠居せられし事。兄弟共み出仕あつ。いうに目出度からん。次お七人の陰陽師參て。千度のは。後仕る其中に。掃部頭時晴と云老者あり。所従あども少ありけるが。餘に人多く參。稻麻竹葦のごとし。役人を開れいへとて。大勢の中を推分く。參る程に。いかいしたりけん。右の脊を踏拔れ。そこあて些徘徊が。刺冠を突落されて。をなかりの砌に。束帯匣と老者が。髪放して練出たれば。若き公卿殿上人の。堪



すして咄と笑れける。陰陽師と云い。反倍とて足とも。仇に踏すところ。承れ。其外不思議共の有しも。其時の何共覺ざりけれ共。後に思合する事共。多のりけり。山産お依て六波羅へ参る一人々。關白松殿基房公。太政大臣妙音院殿。左大臣大炊門殿。右大臣月輪殿。内大臣小松殿。左大将實定卿。源大納言定房卿。三條大納言實房卿。五條大納言國綱卿。藤大納言實國卿。按察使資方卿。中御門中納言宗家卿。花山院中納言兼雅卿。源中納言雅賴卿。權中納言實綱卿。藤中納言資長卿。池中納言頼盛卿。左衛門督時忠。別當忠親。左宰相中將實家。右宰相中將實宗。新宰相中將通親。平宰相教盛。六角宰相家通。堀川宰相頼定。左大弁宰相長方。右大弁三位俊經。左兵衛督重孝。右兵衛督光能。皇太后宮大夫朝方。左京大夫長教。太宰大貳親宣。新三位實清以上三十三人。右大辨の外。直衣之。不参の一人々。花山院前太政大臣忠政公。大宮中納言隆季卿。以下十餘人。後日に布衣着し。入道相國西八條の亭おまゐられける。此度産お付諸社諸寺へ勸賞行れ。日數經て。中宮内裏へ歸らせ給ふ。十二月十五日。流布の本に。皇子を東宮に立られ。傳ふ小松殿。大夫に。池中納言頼盛卿と定めらる。入道殿お豫て。皇子は誕生と願れしが。別して嚴島へ月詣を始。祈すされし所

此度望も叶ひけるゆゑ。別して崇敬彌増ける。抑平家に此神を信じ始たる。清盛公未安守よりし時。安藝國と以て。高野の大塔。修理せられけるに。渡邊遠藤六郎頼秀を。雜掌に附られ。六年にて成就す。清盛公高野へ上り。大塔を拜み奥院へ参られけるに。白髮の老僧眉ふ霜とたれ。頼み浪と疊。かせ杖の兩脇あるに。把て出來。何となく物語る。それ我山の昔より密宗をひかへて退轉あし。大塔既お修理終たり。それお就て。越前の氣比の宮と。安藝の嚴島。兩界の垂跡にて。氣比の榮へたれ共。嚴島は。如に蕪果。あられ此序に。委聞して。修理せさせ給へかし。さもい。官階肩を比る人。天下に又もあるまじく。いとて立れけり。此老僧の居られしあたり。異香薰じて芬々たり。人と附て見せらる。三町のほどのみへ給ひて。其後はいづくへか失給ひぬ。是唯人あらず。全く大師にて坐けり。彌々尊く覺へ。娑婆世界の思ひ出にとて。高野の金堂。曼陀羅と書れたるが。西曼陀羅。常明法印と云給師に書せ。東曼陀羅。自筆に書れ。八葉の中尊の寶冠を。いかと思れけん。我首の血を出して。書れけるとぞ聞へし。其後都へ上り院参して。此由委聞ありければ。御感あり。猶其任を宣られ。任國の年教定り給る。嚴島をも修理せらる。花表を立替。社を造かへ。百八



十間の回廊を作られける。修理落慶の後。清盛公殿島へ。通夜せられし。夢は寶殿の御戸推開き。天童顯れ。汝此劍を以て。朝家の石堅めされとて。銀の蛭巻したる。小長刀を賜ふとみて。覺て後。現に枕上。ふり立たせける。汝忘れりや。或聖と以て謂せし。いかにかに。但惡行あらば。子孫迄の叶ふまじきと告げ給へ。小長刀の顯然と有て。枕ふ立し。影もあし。全く大明神の託宣と難有。いよく信心肝に銘じ。是より生涯信心せられし。扱も當正月下旬。成經康賴入道。肥前國を立て都へ急けれ共。餘寒烈く。海も荒多きゆ。浦づたひ島つたひして。二月十日備前の兒島お着給へ。父大納言のみ渡ありし。有木の別所を尋。入てみ給へ。竹の柱に歴たる。障子。いぶせささまるるが。爰かじりに書置給ひし。筆の遊と見ふれ。哀人の信に。手跡も過るものぞ。書置給す。いかで今見るべきとて。康賴入道と二人。讀て泣。泣てのよむ。安元三年七月廿日出家。同廿六日信俊下向共書れた。扱も源左衛門尉信俊が參たるも知れけり。夫より墓と尋給ふ。壇と築ともなく。少しく土は小高き所に。闕伽を濺ぎ合掌して。生る人に向ふごとく。播口説泣を拜を遂。られ是迄こそ急つれ。此後の急ぐも思すと。一向に歎。其夜。兩人墓と廻て終夜念佛行道し。開れば新

しう壇と築釘貫せさせ。前より飯屋を作。七日七夜念佛し經書て。結願も大ひある卒都婆と建。過去聖靈出離生死證大菩提と書て。年月日の下。孝子成經と書れければ。賤山がつの心あるも。子に過たる責なしとて。袖と濡さぬのあかりけり。草葉の蔭も靈あらむ。嘸や嬉しく覺すらん。兩人の三月鳥羽に着ぬ。大納言殿の山庄此處あり。洲濱殿と号。立入て見給へ。住荒年経たれば。築地のわれども蓋もあく。門のわれ共扉もあし。庭に人跡絶て。苔厚く。池に。淪漪起て。白鷗逍遙す。此處も興せし人の形もあければ。尽せぬものは涙。彌生の中あれば。花の未だ名残あり。楊梅桃李の梢こそ。折知顔の色。なれ昔の主のあけれ共。春と忘れぬ花あれや。少將木の下。立寄て。桃李不言春幾暮。煙霞無跡昔誰栖。ふるさとの花のものいふ世ありせば。いかよむかしのことを問。まし。かくふるさ詩歌と口号給へ。康賴入道も庭樹不知人去盡。春來還發舊時花と云。唐人の句を吟じ感慨し。墨染の袂と濡しつ。都へ上られける。人々の心の内さあそひ嬉うも。又哀ふもありけり。康賴迎の乗物有けれ共。名残惜とて。少將の迎の車の尻に乗。七條河原迄の伴れ。夫より行別れけるが。猶行もやらざりけり。花の下の半日の客。月の前の友。旅人への



一村雨の通行ふ。一樹の陰に立寄て。別る、名残も惜ぞかし。是は愛かりし島の栖居。船の中  
 瀾の上。一葉所感の身おれ。先世の芳縁も。淺からずや思れけん。少將の母君靈山おひせ  
 しが。昨日より宰相の宿所よ来て待れけり。少將立入給ふ姿を。只一目見給ひて。命おれはと  
 をかりにて。跡の言葉も出かね引被で。予臥給ふ。北の方のさしも美しう花やかよおひせしか  
 ども。尽せぬ襟に。瘦黒て。其人ともみへ給ひず。六條が細かりし髪も。白くなりぬ。少將流  
 されし時。三歳にて別給ひし。雅人も。今は長う成て。髪結ほど。其傍も三をかりある。少  
 人の坐けると。少將おれいかよと宣へ。六條是こそと斗やて涙を流しける。さて。我流  
 れし時。心くるしげなる有さま共を見置しが。故あう育けるよと。思ひ出ても悲しかりけり。  
 少將の本のごとく。院へ参らせ給ひて。宰相の中將まで上と給ふ。康頼入道の。東山雙林寺  
 に。我山庄の有しうを。うれに落付。先くくぞ思ひ續たる。

故里の軒の板間お苦茂て。思ひしほどいもらぬ月うあ  
 やがて其所に籠居し。愛のりし昔と想像。寶物集と云物語と作られけり  
 有王 俊寛が専途と見る。小松大臣病名醫と拒。同述去

去程に俊寛僧都一人の。嶋の嶋護と。方見も存命しが。幼より不便と加へ仕れし童。有王  
 といへるあり。鬼界の流人。都へ入と聞。鳥羽迄行向みるよ。我主人のまへ給ひず。いこのよと問  
 ば。其の猶罪深しとて。一人嶋お残されぬと聞て。限あく心愛思ひ。常と六波羅邊も。行て聞  
 けれど。も。いつ赦免有べきと。聞出さ。いし程。僧都は息女。忍び座する所へ参。此漸に  
 も。渡給ひ。上も。今。い。う。も。して。彼嶋へ。渡り。行衛をも尋参らせんと存。い。文給  
 つて。参り。い。べ。し。と。や。けれ。ば。姫御前。深く。悦び。や。が。て。書。て。渡。され。ける。暇。と。乞。も。赦。さ。じ。と  
 思ひ。父母へ。も。し。らせ。ず。唐。船。の。纜。の。卯。月。五。月。解。され。ば。夏。衣。立。を。遅。く。思。い。れ。三。月  
 未。京。と。立。多。く。の。波。路。と。凌。越。薩。廣。瀉。へ。下。り。ける。此。より。彼。嶋。へ。渡。る。船。津。に。て。有。王  
 を。怪。み。着。たる。物。か。ど。剝。取。る。ど。し。けれ。共。聊。も。悔。ず。姫御前。の。文。を。の。り。の。人。に。見。せ。じ  
 と。髪。髻。の。中。に。隠。し。商。船。に。乗。て。件。は。嶋。へ。渡。り。みる。に。浴。幽。傳。へ。開。し。肩。か。ら。ず。田。も  
 なく。畑。も。なく。里。も。なく。村。も。なく。自。ら。人。の。あ。れ。共。云。と。い。聞。と。れ。ず。先。の。詞。の。猶。分。ら。ず。人。と  
 見。か。け。て。の。都。より。流。され。し。法。勝。寺。の。執。行。俊。寛。僧。都。と。や。人。の。行。衛。を。知。たる。か。と。尋。れ  
 ば。返。辭。い。せ。ず。只。頭。を。掉。て。行。過。ける。の。たま。く。少。し。物。心。得。た。ると。覺。し。き。が。出。來。り。左。様。の



人三人ありしが。二人の都に歸られ。一人の残てこゝかしこ。呻吟歩行しが。其後の見かけざりしといへり。さらさら山の方を尋みんと。遙く分入。嶺は巖谷に下れ共。白雲迹を埋て。往來の道さへ安定あらず。晴嵐夢と破て。其面影もみへされ。山にての尋逢す。海の邊お着て尋る。沙頭に印を刻。鷗。渾の白洲に集。濱の外の跡もあし。或朝磯の方より。螳螂さん。のどとく。瘦衰たる者。弱ひ出来たり。本の法師にて有けりと覺て。髪ハ虚さよみ生上り。万の藻屑取付て。荆を頂る。身お着ける。絹布の分ちもみへず。片手おの荒海布を持。片手おの魚と囉て持。歩やうのしけれ共。果敢ゆのす。都おて多くの乞骸人の見れ共。かゝる者いまだみせ。諸阿修羅等。故在。大海邊とて。修羅の三惡四趣故。深山大海の邊にあり。佛の説置給ひたれば。我も餓鬼道あへ。迷來りと覺たる。漸く近くあゆみ來るを見て。もしやかやうの者おても。我主の行衛や知たると。物やうといへ。何事ぞと答ふ。是は都より流されたる。俊寛僧都とや人やおひすと問れ。童こそ見忘たれ共。僧都いかでこの忘れ給ふべき。是こそそれよとて。手に持し物も投弄。沙の上に到伏。さてこゝろ我主の。あり行給ふ果どの知てける。僧都頓て消入給ふを。有王膝の上に播乘。多くの波路を凌つ。遙々と是迄

尋ね參たる。うひもなく。いかよかくいど。播口説ければ。僧都少し人心地出來。扶起され。詭に汝かゝる日本の果迄。參たるぞ神妙之。唯明暮。都のとのみ思ひ居たれば。戀しき者共の。佛と。夢に見る折もあり。幼ふ立時もあり。いたう疲弱りて后の。夢も現も思ひ別たす。汝が來しをも。唯夢とこそ覺ゆれ。もし此事夢あらば。覺て後いかせん。有王この幻にてい之。此は形勢。今迄は命延して。不思議なれとやせ。いざとよ是は去年の少將や判官が迎の時。其瀬お身とも投べかりしを。少將の詞を憑。今一度都の音信もやと。待存んとせし。共。此嶋に人の食物絶てあき所なれば。身に力の有し程。山に上り硫黄を取。九州より通ふ。商人にわひ。食物に代たりしも。今左様の業もせせ。かやうに日の長閑ある時。磯お出て網人釣人。手と摺膝を曲て。魚を貫ひ。干沙の時。貝と拾ひ荒海布を取。磯の昔に露の命をかけて。憂るが。今日までの存命し。先我家へとやさる。有王のあれあり。さやにて。家の有り不思議さよと思ひつ。僧都を肩にかけ。教に隨ひ行は。松の一むある中に。竹と柱とし。若と結桁梁に渡し。上よも下にも。松の葉とひしと取掛たれば。雨風ともお忍べくもみへず。有王穴淺増元。法勝寺の寺務職にて。八十餘箇所の。庄務を司り棟







しが。有王渡りて二十三日とヤに僧都庵の内にて臨修と果さる。歳廿七之。有王空き姿に取  
 付いたくも歎けるが。頼て後世の供もやせんと思へども。此世に姫御前もあつたれば成行  
 と見届た。僧都の菩提と。吊度と。案じついで。のひぐしく其臥所を改す。庵を切かけ。松  
 の枯枝に若のうれ葉を積て。藻塩の煙となし茶毘終て其白骨を拾ひ頸お掛。又も商船に使て  
 九州の地入。それより姫御前の方へ上りて見参し。始終こまぐ物語。この嶋にの視も紙  
 もなけれ。返事にも及むす。此上の偏に。追福專一にいとすけれ。際る歎給ひし  
 が。直に其年尼にあり。奈良の法華寺に行ひ澄し。二親兄弟の後世を吊給ふを哀ある。有王は  
 僧都の遺骨と頸よ懸。高野へ上り奥院に納。蓮華谷にて法師にる。諸國を修行して。主人の  
 後世と吊ひけるかやうに人々の思ひ歎の積ぬる。平家の行先を怖し。既に七十二代の帝  
 白河院は在位の時。京極の大殿の女后に立給ふとあり。賢子の中宮として最愛限る。主  
 上。此后に皇子誕生あらまほしく。思召けるが。三井寺に聞ゆる。有驗の阿闍梨有。頼豪とす  
 けり。主上是と召て。祈と命せられ朕が願成。就せを。所望は乞に依ぐし。仰下さる。ゆ  
 る。頼豪畏て三井寺に歸り。肝膽と摧て祈けれ。中宮願ては懷妊有。承保元年十二月十

六日は産皇子は誕生に依て。主上御感深く。頼豪を内裏お召。汝が所望いのにと給言あり。頼  
 豪三井寺に。戒壇の建立と願奉れり。一階僧正あとのことをもやさめと。叡慮の外望故。皇子  
 誕生有て。祚を繼しめんも。海内の無事あらん爲之。今汝が所望と達せむ。山門憤て。世上  
 も静まるべからず。兩門共に合戦せむ。天台の佛法亡びんとて。此願は取上なし。頼豪こ  
 の口惜とて。急ぎ三井寺へ走歸。干死にせんとす。主上愕せ給ひ。大江美作守匡房と召  
 て。汝の頼豪に。師檀の契あれ。行て拵て見よと給言あり。畏て阿闍梨が宿坊に至。勅  
 説の趣達し。計んとすれ。以の外熏りし。持佛堂に栴籠怖氣ある聲して。天子に。戯の  
 詞あり。給言汗のごとしと。承るを。是程の所望叶ざるに於て。我所出し奉る。皇子され  
 ば。取て魔道へこそ行めとて。對面もせず。匡房立歸。此由奏聞ありし。主上のは歎限あ  
 し。頼豪の終に。干死に寂滅す。皇子は腦つりせ給ひし。扱はとて種くは祈共も有けれ  
 共。叶給ぞ。承。暦元。年八月六日四歳にて薨給ひぬ。敦文親王是之。主上は愁歎や斗もあし。  
 其比又山門に西京の座主良信大僧正。其時ハ。また圓融坊僧都ありし。内裏へ召て。この  
 いかにと勅ありけれ。いつもかやうのは願は香山の力にて成就するは事にい。九條右丞相



師輔公も。慈惠大僧正に契すされてこそ。冷泉院の皇子。は誕生ましくけれ。安程の事にて  
 ひとて。山門に歸り。百日肝膽を摧て。祈られしかば。中宮頼て。妊娠有。承暦三年七月九日。  
 皇子は誕生有。堀河院とすしは是之。御母皇子は攝政師賢公の養女。は右大臣顯房公の女。のゝる例もありし。非常の赦行  
 れ。俊寛一人。干死しけるぞ方見けれ。當治承三年。五月十二日午の刻をかまに。中御門京  
 極よ。大ある。飄起。地の方へ吹行に。棟門平門吹拔四五町十町も飛せ。或は行術柱  
 さざり。虚空に舞散。槍皮茸板の類。冬の木葉の風に亂る如し。鳴とよひ音冷じく。人家と顛  
 倒し。屋舎を傾伏し。人門牛馬の死傷夥し。是只ごとにあらずとて。神祇館にして御占あり。  
 今日日の中に。祿を重する大臣の。慎。別して。天下の。大事。王法傾。兵革相續べしと。  
 神祇官陰陽寮どもに。占相同じかりし。その比小松殿の。加様の事共に。萬心細くや思れ  
 けん。熊野參詣あり。本宮證誠殿の廣前にて。靜に法施有て。終夜敬百せられける。親父入  
 道相國の躰をみるに。惡逆無道にして。動もすれ。君を。腦。奉。其振舞とみるに。一期  
 の榮花猶危し。重盛長子として。類に諫れ共。身不肖の間。服膺せられず。枝葉連續して。親と  
 視し名を揚んと難し。此時に當て。重盛。苟も思ひ。愁に列して世に淨沈せんと。敢て良臣

孝子の法にあらず。如し名を遁身を退て。今生の名望と投捨。來世の菩提を求めんに。但し凡夫  
 薄地。是非に惑るの故に。志を猶恣にせず。南無權現金剛童子。願く。子孫繁榮絶すして。  
 仕て朝廷に交るべくんば。入道の惡心を和げて。天下安全を得せしめ給へ。榮耀又一期を限に  
 して。後昆恥に及べく。重盛の運命と縮て。來世の苦輪を助給へ。兩箇の求願。偏に冥助と  
 仰と。肝膽と摧て。祈念せられけれ。燈籠の火の如きもの。大臣の身より出て。はつと消るの  
 如くして失にたり。人餘多見けれ共。恐てすもの。あし。大臣下向の時。若田河を渡られける  
 に。嫡子權亮少將維盛以下の公達。淨衣の下に。薄色の絹を着て。夏のとされ。何とあう水  
 に戯れ給ふ程に。淨衣の濡て絹に移るが偏に色のごとくにみへけるを。筑後守貞能。是を  
 見答て。何とやらんわの。淨衣の世に忌しげに見させ。召替さるべくもやとすに。大臣殿  
 さて。我所願を成し。成就せり。あへて。改とありれとて。若田河より熊野へ。別して。悦の  
 奉幣を立られける。人怪と思へども。猶其心の解さずけり。然る。此公達ほどなく。誠の色を  
 着給へること不思議なれ。其後大臣幾ほどなく。病に臥給ふ。權現すでに。納受のゆゑと覺  
 され。療治も祈禱もし給はず。其比宋より勝れたる名醫渡て。本朝に徘徊を有けり。入道殿の



折節。福原の別業に坐しけるが。越中前司盛俊を使者として。小松殿へ遣さるは。所勞い  
 よく。大事なるよしに聞ゆ又宋より良醫渡れり。幸ひ彼を召請じ。醫療を加給へど有大臣殿  
 扶起され。盛俊を召對面あり。仰下さる言。恭畏ていとサベし但し汝能承れ。延喜の  
 帝の賢王と稱すれ共。異國の相人を。都の中へ入られたりしを。末代迄賢王の誤。本朝の  
 耻と見たり。況や重盛おと凡人が異國の醫師と。王城へ入んと。全く國の耻ならずや。漢の  
 高祖の三尺の劔を提て。天下を治しに。淮南の黥布を討し時。流矢に疵を蒙る。后の呂氏  
 良醫を迎て見せしむるに。醫が曰。此疵治すに難ならず。但し五十斤の金を與られ。療せん  
 と。高祖のいれく。我守強かりし程の闘に逢て。數疵と蒙れ共其疼なし。運既  
 に盡ぬ。命の天にあり。扁鵲在とも何の益あらん。然ら又金を吝に似せんとて。五十斤の金  
 を。醫師に與ながら。遂に治を受ざりき。先言耳にあり。今以て甘心と。重盛苟も九卿に列し。  
 三台に昇。其運命天心にあり。何ぞ愚に醫療を勞しうせんや。所勞若定業たらば。醫療も益な  
 からん又非業。心。療治を加せ共。助ることを得べし。耆婆が醫術も暨せして大覺世尊。滅度  
 を跋提河の邊に唱。是則定業の愈ざるとを。示さんが爲之治するの佛跡之。療するの耆婆

之。定業もし醫療に拘らば。豈釋尊此時入滅あらん。定業猶治するに堪ざる旨明けし。重盛  
 が身佛跡にあらす名醫又耆婆に及べのふす。縦ひ四部の書と鑿て。百療に長すと云共争か  
 有待の穢身と救療せん。五經の説を詳にして。衆病と愈すと云共豈先世の業病を治せんや。  
 若彼醫術に依て存命せば。本朝の醫道なきに似せ。醫術効驗なく。面謁するに詮なし。就  
 中本朝鼎臣の外相と以て異朝富有の來客に見んと。且の國の耻。且の道の陵遲之。重盛命の  
 亡すといふとも。いかにぞ國の耻と思ひざるべき。此由汝よりヤせと宣ひける。盛俊泣く福  
 原へ馳下り。しかぐとヤけれ。入道相國の耻を。命に替て思ふ大臣上古すら聞ず。増て  
 末代に有べくも思はず。日本に相應せぬ。大臣なれば。いかに今度失られんとて。急ぎ都へ  
 登られけり。七月廿八日小松殿出家し。法名淨連と稱し。八月一日臨終正念に逝し給ふ。年  
 四十三。いまた世盛に見へつるを哀なる次第之。入道相國さしも。横紙を破られしも。此人座  
 て種く宥宣ひつるも。世は今日迄も穩しうりつ。此後天下の斗のとの出來んど。上下歎  
 き惜けり。宗盛卿の方樣。世の今に參さんと。勇悅合れたり。人の親の子を思ふ習ひ。思なる  
 が先立す。悲さぞかし。是の當家の棟梁。當世の賢人。心に忠を存し。詞に徳あり。才藝勝れ



文筆麗く。士民服し懐き。希代の俊傑たれど恩愛の別れ。家の表徴悲ても猶餘あり。されば世に良臣を失るを歎き家に武略の廢んを愁ふ

蘭山按ずるに。此所熊野詣の下向ふ。公達淨衣ぬれて。下の薄色にうつれるが。偏よ

色のごとくみへて思しきと有。此二度めの色の字は黑白の色よあらず。素鞆に似たる

之。喪衣綾衣共書。和訓ふちごころも。世にはや布。喪服の。麁敷細升。世に誤りて。のおどき

布と裁縫。冬の表に著し。夏の熱さより。肌よ一ッ着するゆゑ。肌身織目お透。うす

赤くみゆ。是ふ似たるを云之。又醫道のと云處。四部の書と。醫經。方家。房中

家。神仙家の書を。方伎。四家の書と云是之。五經の説と。素問。靈樞。難經。金匱要

略。甲乙經。此書共説處といふ。醫家の。婦女お解し難からんと思ふや。一言を贅す

此大臣の未來のとも悟り給ふや。四月七日の夜の夢。或濱路遙と歩行給ふほどに。傍

に大なる花表あり。夢の中。問る。春日大明神の。ひ鶴栖ぞと。人群集の中より。太刀の

鋒。法師の首を貫き。高く差擧たるを見給ひて。何者の頭ぞと問給へ。平家太政入道殿

の。悪行超過し給へるゆゑ。當社大明神の召取せられし。やと覺て夢消ぬ。當家の。保元平治

以降。度々朝敵を平げ。勘賞身に餘り。帝祖太政大臣に至り。一族の昇進六十餘人。廿餘年が

間。官加階天下に肩と比る人もなかりし。扱は入道殿の悪行増長せらる。ゆゑ。當家運命

の末に成にこそと思食。涙を流さる。折節妻戸をほとくと敲く者あり。大臣何者ぞ。われ

聞と宣へ。瀬尾太郎兼康。今夜餘り不思議のとも見給ひて。や上ん爲。夜の明が暹う覺て參

ひ。前の人を遂に除られし。とやもる。人と除て對面あり。大臣は覽ありし夢。聊差さる

夢。語具にやたりしか。扱こそ兼康は。神にも通じたる者かなとて。大臣も深く感じ給ひけ

る。其朝嫡子維盛少將。院へ參らんとて。出立れしを呼止め。人の親のかやうや。嗚呼がや

しけれ。も。は邊の位に勝てみへ給へり。われ少將に酒進よと宣へ。筑後守貞能。酌よ參

る。直お參らすべきが。親よと先に。いたうへ給ひとて。大臣殿三度酌で。後少將へ献れける

少將も三度受給ふ時。少將に引出ものせよと宣ふ。畏て赤地の錦の袋に入たる。太刀を持

て參りたり。是の當家お傳る。小鳥と云太刀やらんと。嬉しげ。見給ふに。左になく大臣葬の

時用る。無文の太刀之。其時少將以の外氣色變てみへ給へ。大臣涙をどろりと流し。それ

の貞能解とちらす。大臣葬に帯て伴する。無文と云太刀之。日來り入道殿。いかに成給ひ



重盛佩て供せんと。存いひしが。今、重盛入道殿に。先立奉らんともあらめと。邊へ給ふ  
 と宣ひける。少將左右の唯諾にも及で。栖居に立入。其日の出仕もし給はず。引被で居られ  
 けり。其後大臣熊野へ恭下向より日を経ず。病付て失給へ。實もと思ひ知られけり。大臣の  
 豫滅罪生善の志深う坐れば。當來の浮沈を歎き。六八弘誓の願に准へ。東山の麓に。四  
 十八間の精舎を建。一間に一ツつ。四十八の燈籠を挑られたれば。九品の臺目前に輝き。鶴  
 鏡と琢て淨土の砌に臨むごとし。毎月十四五の兩日。大念佛有しかを。當家他家の人々の許よ  
 り。眉目よく若く壯ありし。女房を請じて。一間に六人づ。二百八十人の尼衆と定て。彼兩日  
 が間。一心不亂。稱名の聲息らす。誠に來迎引接の悲願も。此所に影向を垂。攝取不捨の光  
 も。此大臣を照し給ふかと思ふ。十五日の日中を結願として。大念佛あり。大臣殿行道  
 の中に交て。西方に向ひ合掌し。南無安養世界の教主。彌陀善逝。三界六道の衆生を。普く濟  
 度し給へど。回向發願し給へ。見る人慈悲心を興し。聞者感涙を催しける。それより燈籠  
 の大臣と。稱する人多かりし。其上いかにもして。後世を吊れむと思ひければ。吾朝に  
 いうなる大善根を爲置とも。子孫相續。重盛の後世を。永く吊んと有がたし。他國にも後世

と吊れんとて。安元の春鎮西より。妙興と云船頭を召上せ。人を退て對面あり。金三千五百  
 兩召寄て。汝の開ゆる大正直の者あればとて。五百兩を得させ。三千兩と宋朝へ渡し。一千兩  
 は育王山の僧に引二千兩。南宋第二世。孝宗皇帝へ進らせ。田代を育王山へ寄重盛が後  
 世と吊すべしと宣ひける。妙興是を賜て。萬里の煙浪を凌。大宋國へ渡り。育王山の方丈。  
 佛照禪師徳光に逢奉つて。此由斯とすければ。隨喜感歎して。やうて千兩は育王山の僧に引。  
 二千兩。帝へ進せ。小松殿の存意共。具に奏聞せられしに。帝も感じ思さき。五百町の田代  
 と育王山へ寄ふれける。されば日本の大臣。平朝臣重盛公。後生善所と祈ると。今に有とぞ  
 承る。入道殿は大臣殿後れ。萬心細くや思れけん。福原へ馳下り。閉門して坐ける。時  
 又法皇八幡の御幸あり。公卿殿上人も。とりぐり供仰付られ。御遊御盃酒などあつて。深更  
 におよび還御ある。同十一月七日。戌の刻ばかりに。大地震良久し。陰陽頭安部安親急ぎ内  
 裏へ馳参り。今度の地震。占文の指所。其慎輕からずい。當道三經の中。坤儀經の説を考  
 り。日を得て。日を出す。以の外火急にいとて。涙と流しければ。傳奏の人も色を失ひ。君も  
 叔慮を愕し坐す。若き公卿殿上人と。柩からぬ泰親が泣様か。只今何事の有べきのとて。



一度お咄と笑ひ合れける。され共此泰親の。清明五代の苗裔。天文の淵源を究め。推調掌を  
 さそぐおとし。一事も違ひざりけれむ。指神子とぞやける。雷落か、るとありしかども。狩  
 衣の袖の焼ながら。其身は恙なかりけり。上古末代有ぐさかりし達人。同十四日入道相國  
 數千騎の軍兵を。驍て。都へ入給ふよし聞へしかむ。何と聞分たる事あけれ共。洛中騒わへ  
 り。誰人かや出しけん。入道殿朝家を。恨奉る旨ありと披露す。關白殿も内々聞し召れし旨  
 や有けん。然内有て。入道偏に基房と亡さん。結構共。承る終にいかある憂目あか。逢ひひな  
 んと。奏せられしに。主上足下まからん。朕とても同じからんと。龍顔より泪と流し給ふ。誠  
 に重盛公逝去ありていくむくの日數もあく。其肉もいまだひやくかあるまじきに。入道殿は  
 狂氣もせられしにやあど。眉と懸る人々多かりけり。

平家より關白殿を流罪し。公卿殿上人多くの官と削。法皇を鳥羽殿へ押籠奉る。  
 同十五日淨海禪門。朝家を恨奉る旨必定と聞へしかば。法皇大に驚給ひ。故少納言信西  
 が子息。靜憲法印を。使よて。禪門の許へ仰下さる。近年朝廷靜ならせして。人の心も調  
 す。惣てに歎き思召處之。足下さて在ば萬事懸。思召てあるに。天下を靜る迄こそ無らめ。刺

嗷々ある躰にて。朝家を怨奉らる。聞し召は何事や。此御誕と承て。西八條の亭  
 に行向しに。入道殿の對面さへなく。朝より夕及べども。無音あれば。さればこそ無益と思  
 ひ源太夫判官季貞を以て。勅定の趣云入させ。暇すと出けれむ。其時入道殿法印を呼と  
 て出られけり。喚返して坊や。承。淨海がや所。僻言か。先内府身能と。當家の運命を。  
 計るよこそと。随分悲涙を押して過ひし。坊の心にも推察あれ。保元以後亂逆連綿。君安さ  
 り心も在ざりしを。入道の唯大方と。執行ふ斗に。内府こそ身を碎き。度々の逆鱗を。靜  
 め進らせし其外臨時の。大事。朝夕の政務。内府程の功臣。有難う覺い。爰を以て古を案ず  
 るよ。唐の太宗は。魏徵に後れて。悲の餘に。昔般の高宗。夢の中に良弼を得。今の朕の覺  
 の後賢臣を失ふと。碑文を自書。其廟も立て悲み給ひ。我朝も問近う見し。顯頼民部卿が  
 逝したりしと。故院殊更に歎有て八幡の幸行有べかりしを。延引有。惣て重臣の卒去。代  
 くの帝王皆に歎きあるとに。それに内府が中陰に入幡の御幸有て。御遊宴有さ。歎きの色  
 一事も承す。縦ひ内府の忠と。思召忘れ給ふとも。おどか入道の悲を。憐あくていべさ  
 入道が悲を。憐なくとも。内府が忠義。おどか思召忘れさせ給ふべき。父子共小叔慮に背



さす。今よ於て面目を失ふ。是一ツ。次に越前國は。子孫孫々迄御變改有まじきよし。以納  
 束いて下し給り。内府に後て後。頓て召返されし。何等の過怠もていやらん。是二ツ。次  
 中納言闕のいひし時。二位中將頻り。所望いひし。入道隨分執事しかども。遂は承引志  
 くして。關白の息をなさる。入道いのに非據や行ふ共。一度のちどか聞し召入給りていへむ。位  
 階といひ家嫡といひ。理運左右に及ぶとを。引違へさせ給ふ。餘り本意なき。は計ひ  
 と存る。是三ツ。次に新大納言成親以下。近習の人。鹿谷も寄合て。謀叛を企しとも。全  
 私の計畧よりあらず。君は許容あるに依て。事新しき條にいへども。此一門と七代迄  
 のいかでか思召指させ給ふべきに。入道七旬に及び餘命幾くあらぬ一期中だに。動も  
 すれば亡ぶるべき。は結構い。是四ツ。此四事を以て。鹽に。子孫相續て。朝家に召仕んと  
 の。有がたう覺い。凡老て子に後る。木の枝なきに異ならざ。今程も憂世にさのみ心  
 と費ても。何にかいせん。今いかやうもあらば有なんと。思ひなつてこそいへど。且怒  
 り且歎てやさる。法印怖しうも。又哀も覺汗水にありつ。此時のいうる人も。一言の返  
 辭も及がたきぞかし。其上我身も近習の仁にて。鹿谷に寄合し正しく見聞れしか。唯今

も其人教とて召や籠られんと思へ。龍の鬚と撫。虎の尾を踏心地ながら。法印もさる懼し  
 き人にて。些も騒ぎ。誠に度々御奉公淺からずい。一旦恨せ給ふ旨。其謂い。但し官位とい  
 ひ。俸祿といひ。は身取て。悉く満足す。されば功の莫大あるとも。君常に感有て。仰  
 出さるゝとに。然るも近臣事を。君は許容有まじと。謀臣君の明を暗す。凶害にい  
 ん。凡耳を信じて目を疑ふ。俗の常の幣之。小人の浮言を重くして朝恩の他に異なるに。今  
 更又君を傾け參らせ給んと冥顯につけて。其恐れ少からずい。凡天心の蒼として測がた  
 し。叔慮定て其儀に等しくいはん。下として上に逆ふと。豈人臣の禮たらん。能は思惟い  
 べし。詮する所此趣をこそ。披露仕りいめとして。立れたれば。其座に並居給へる人。か  
 穴怖し。入道のあれは怒給ふ。聊憶せを返答せしあつとれさよと法印と譽ぬ人もあか  
 りけり。扱立歸て。入道相國の旨趣。遂一や上げるに。法皇も道理至極と。思召され重て。仰下  
 さる旨もなく。同十六日。入道相國日來思食るゝ處あれ。關白殿をはじめ。太政大臣以下。  
 卿相雲客四十三人が官職を止めて追籠らる。中にも關白松殿を。太宰帥に遷し。鎮西へ  
 とぞ聞へし。かゝらん世に。兎ても角ても有んとて。鳥羽の邊故川と云處にて。は出家わ



り。三十五歳とぞ。禮義に達し。曇る鏡にておとせし方とて。世に惜れ給へり。遠流の人の道よて。出家したるを。約束の國への遣さぬ事にて。初日向國と定められしが。是の出家の間。備前の國府の邊。いはさまと云所に置れけり。大臣流罪の例。左大臣曾我赤兄。右大臣豐成公。左大臣魚名公。右大臣菅原北野天。左大臣高明公。内大臣藤原伊周公に至るまで。其例すでに六人され共攝政。關白流罪の例。是を始とぞ。承る。故中殿は子二位中將基通。入道の聲にておしけれ。大臣關白になし奉らる。非參議二位中將より。大中納言を經ずして。大臣攝政になると。是初之。普賢寺殿の事ぞかし上卿。宰相大外記。大夫史に至まで。皆あされる。跡ひていひける。太政大臣。師長公の司を停て東の方へ流され給ふ。去る保元。父悪左府殿の縁座ゆる。兄弟四人流罪にて。兄右大將兼長。弟左中將隆長。範長禪師三人。配所に失られ。師長公の土佐の畑よて。九年を經られ。長寛二年召返され。本位ふ復し。仁安に權大納言にまで昇。折節大納言明なく員の外ふ加られ。大納言六人に成。是始之。才藝管絃の達人にて。太政大臣迄。又流され給ふ。いかなる罪の報ひぞや。保元。土佐。治承の今。尾張國とかや。按察使大納言資方卿。子息少將資時。孫右少將雅

方。參議皇太后宮權大夫藤光能。右京大夫高階康經。左少弁藤基親。官を停られ。此内資方資時雅方三人。卸日都を追出され。三界廣しといへ。五尺の身置所あり。一生程なしといへ共。一日暮しが。して。夜中九重の都を紛れ出。八重立雲の外へ趣かれける。彼大江山や生野の道をふみ見て。丹波國村雲。徘徊し。終に尋出され。信濃國へ遷されぬ。同廿日法皇の御所法住寺殿へ。軍兵を向て四面を打圍む。平治に信賴卿が三條を仕たりし様に。御所小火を掛入。を皆焼亡さんよし聞へしか。局の女房。恠の女童。至る迄。物をだに打被せ。我先に逃出ける。前右大將宗盛卿。御車を寄て疾召れよとせられし。法皇驚せ給ひ。成親康賴等が様に。遠き國へも遷んとよ。更には咎あるべし共思召す。主上渡せ給へ。政務の口入せし斗。と仰り。宗盛卿。涙を流し。いかに去はといへ。暫く世を靜ん程。鳥羽の北殿へ。御幸をさし參せよと。父禪門。いと有けれ。さらむ汝は供仕れと仰けれ共。父禪門の氣色を恐れ。俱には忝られず。これに付ても兄の内府に。殊の外劣しものか。一とせもか。る。目み逢。せ給ふべかりしを。内府が身に替。制し停てこそ。今日迄も。心安かりつれ。今。諫る者のあきとて。斯とするやら。行末頼。思召。涙に。くれ。車に乗れけ



り。公卿殿上人。一人も供奉せられず。北面の下臈と。金行と云は力者ばかり。隨ひ。御車の尻に。尼前一入。参られけり。是は法皇の乳人。紀伊二位之。七條を西へ。朱雀を南へ。御幸なし。奉る。わのや法皇流されさせ。おのすやとて。恠の賤の心なき迄。袖を濡しける。去る七日の夜の大地震も。斯る前表と思ひ知られ。泰親の考的中し。皆人舌を卷て恐れしとかや。かくて法皇鳥羽殿へ御幸の後も。御前に一人も候する人なく。いかして紛れ入しや。大膳大夫信成。唯一人ひしを召て。我の近う。失れんと思ふ。行水なさせくれよと仰る。さらぬだ。不信成の。今朝より肝。魂も身も添ず。忙然果るるさまなりしが。此仰を承り。狩衣の王禪あけ。釜に水汲入。小柴掃殿。大床の短柱破などして。湯仕出。奉る。又靜憲法印の西八條の亭に到り。法皇鳥羽殿へ御幸成て。御前に一人もなしと承る。法皇を蒙り参ひ。いやとやさるる。入道殿のかい。思れけん。御坊の過まじき人ぞ。疾くとて赦されけり。法印悦びて。急ぎ鳥羽殿へ参り。門前にて車より下内へさし入に。折節法皇の。經打上。遊さる。法聲のとにすがら。開へさせ給ふ。法印参りければ。御經へは涙をなぐく。このけさせ給ふ。法印此は形勢を見奉り。餘りの悲しさに。袖を顔に推當。御前へ参るに。尼前やさる。

の。君よ。昨日の朝法住寺殿にて。供御開し。召れし後の。夕べも今朝も。開しめさず。長き夜す。のら。は寝あぐす。は命も既危う。みへさせいへとして。同く泣れける。法印涙を拭ひ。何事も限あるも。これに。平家世を取て。二十餘年。今も悪行法に過ぬ。頓て亡びぬ。ん天照太神も。正八幡も。君をばいかで。思召放せ給ふべき。中にも君れ。頼思し。召日吉山王七社一乘守護の。誓ひ。改給ひず。彼法華八軸に。翔りても。守らせ給ふ。め。されば。政務の君の御代とあり。凶徒の水の泡と。消失ぬ。んづとやされける。法皇此詞。少し慰せぬ。し。ます。主上の。關白流され給ひ。臣下多く亡び損ずることを。ふかく。歎有つるに。今又法皇の。様子を開し。召。つやく。供御も。開し。召す。は。腦とて。常の夜の御殿にのみ。入せ給ふ。后宮を。初奉り。女房達。い。あるべし。共思し。召す。法皇鳥羽殿へ。御幸の後。内裏に。臨時の。御神事とて。清冷殿の石灰の壇にて。主上夜毎に。伊勢太神宮を御拜ある。是の。一向法皇の。祈の爲とぞ。聞へし。二條院の。賢王にて。渡せ給ひしか共。天子に。父母なしとて。常の院の。仰とや。返させ座ければ。にや。繼躰の君にても。坐す。されば。讓を請給ひし。六條院も。安元二年七月十四日。は。年十三。つて。終に。隠させ給ひし。とて。又入道の。兼て。關白殿を。脱居て。今度遠くへ。迂し。されけ



るが。源大夫判官季定。攝津判官盛澄に。三百餘騎を添。河原坂の宿所を追捕せしめらる。前  
 關白松殿の侍に。江大夫判官遠成と云者あり。平家に快ざりし。六波羅より擲捕る  
 べしと聞。子息江左衛門尉家成を呼。我々此處を明け。東國へ落下り。流人前右兵衛佐頼朝  
 を憑んと思へ共。是も當時勅勘の身にて。我身一ツすら。心に任せずと聞。其外日本國平家の  
 主園ならぬ所あり。とて。通ざらん身を。年來住馴る處を。人にみせんも耻がまし。六波  
 羅の使を待請。館に火を掛焼立る。其煙の下より切て出。存分の働して討死せん。いかに  
 とやけれ。家成は尤に。へと一腹し。今やと待所へ。やがて季貞盛澄押寄來。鬨を作るを相  
 圖。河原坂の館所々より。火の燃上るを見て。兵と扣へ見合ある處に。折節風落し來て。火  
 の一面に燃上る。渦巻煙の下よ。江父子切て出たるに。煙を隔てみへされ。幾人あらんも  
 見定かね。六波羅の兵討る。と數知ず。江父子荒増焼たるとみて大音揚。いか各六波羅へ  
 飯て。此跡をすされ。但し入道殿の悪行積て。一門悉く亡ん。遠かるまじを。脇に見物  
 すべさ。是のみ残り多し。此段もすされ。父子共腹掻切。煙の中へ焼死ぬ。抑かや  
 うに人の損じ亡ると。いかにと云に。前大殿の孫子。三位中將殿と。當時關白成せ給ふ。二

位中將殿。基通公入道。と中納言の関たるを争ひ給ひし時。入道殿の吹擧を嫌れ。三位中將殿さ  
 る。此相論ゆると聞へし。さらば關白松殿は一所。いかにある御目も遇らめ。公卿大  
 勢沈淪及ふ。いかに入道殿の心。天魔入替てもやあると。皆人慄恐ける。こゝに  
 又故中山中納言顯時卿の長男。前左少弁行隆と云。二條院の辨官ありしが。此十餘年の官  
 をも停られ。夏冬衣更にも及む。朝暮の登も稀。有か無かに寝しく坐ける。入道殿  
 使者を以て。急度立寄給へ。や合すべき事ありと。や送らる。行隆。此年來。何事も交ざり  
 し。何人か讒言して我を失んとするやと。恐騒れ。北の方女房まで。喚叫び給へ。お  
 のづから出あやみ給ふに。西八條殿より。又も使の來るゆゑ。此上へ行て。もかくも成  
 んど。襟に沈ながら。人小車と仮て出られしが。思ふに似ず。入道殿早速に出われ。は  
 邊が父の卿。入道大小の事や合せし人ありけり。其子息ゆる全く疎。思ひひ。年來  
 籠居あるも。痛しう覺を共。法皇の政務の上。力及ず。今出仕あれ。官途もや沙汰し。べし  
 さらを飯られ。とて立入給ふ。行隆夢の心地して。歸宿あれ。上下溲ひて死する人の生  
 返りしのみか。思ひよらざるは仕合あれ。悦び泣の最中へ。源大夫判官季貞を以て知行し



給ふべき。庄園状共餘多遣され。入道殿別の心付めて。百匹百兩。米と積て送られ。出仕の料もとて。雑色牛飼牛車迄。潔氣に沙汰し。送られたれ。行隆の手の舞足の踏處も覺す。このそも夢あらんと驚れける。同十七日五位の侍中に補せられ。本の如く左少辨に復し。今年五十一あるが。俄に若やぎ。唯片時の榮花ぞ到來しぬ。抑百行の中。孝行を本とす。明王の孝と以て天下を治といへり。唐堯の老衰たる母を貴ひ。虞舜の頑ある父と敬ふとみへり。先規を聖主賢王に追せ給ひ。唯主上の法皇の比上を歎せ給ふ。叔慮の程。めでたけれ。内裏より潜に。鳥羽殿へは消息有て。かゝる世。雲井に跡を留て。何かのしひへさるれば。寛平の昔をも訪ひ。花山の古をも尋て。山林流浪の行者とも。成ぬべきと覺ひよし。遊されしを法皇の比返事に。さな思召れしひと。さて渡せ給へばこそ。一ツの頼にてもいへ。跡おく思召成せば。何の頼か。唯左も右も。愚老が成ん様と。覽じ果させ。いへかしと遊されぬ。主上御返事を。龍顔に當給ひ。涙塞敢させ給はず。君は船臣は水水よく船を浮べ。水又よく船を覆し。臣よく君を保ち。臣又よく君と覆す。保元平治の比は。入道相國君と保奉るといへ共。安元治承の今は。又君と問し奉る。史書の文に違ず。大宮の大相國。三條内大臣。葉室

大納言。中山中納言も失らきて。今故人の成頼親範ばかり。此人々も。かゝる世の朝に仕へ身を立。大中納言を経て。何かはせんと。いまだ壯の身に家と出世を遁れ。民部卿入道親範は。小原の霜に伴ひ。宰相入道成頼は。高野の霧に交て。後世菩提の外。あかりけり。昔も商山の雲に隠れ。潁川の月に心と澄す人もありし。是皆博覽清潔にして。世と遁たるに非ずや。中にも成頼入道。此後天下に何様のとか。出來ん。親の雲を分ても。入山と隔ても。登るべけれと。云れしとぞ。實に心有ん人。跡と留むべき世とも覺す。同廿一日天台座主覺快法親王。頻に辭退有しか。前の座主明雲大僧正。還着し給ふ。入道殿かくさんぐ。又仕散されしかども。中宮の女。關白殿も婿。萬心安くや思れけん。政務は一向主上の比計ひたるべしとて。福原へ下られける。廿三日に宗盛卿參内して。右の旨奏聞せられ。りけれ。主上の法皇の讓ましく。たる世を。唯執柄に云合せ。宗盛能様。相計へとて。聞召も入給ひ。さりける。法皇の城南の離宮にして。冬も半過させ給へ。射山の嵐の音。更々烈くて。寒庭の月ぞ。崩さ。庭に雪降積れ共。跡踏付る人も多く。池に氷柱閉重て。藤居鳥も見へざりけり。大寺の鐘の聲。遠愛寺の聞と。駭し。西山の雪の色。香炉峯の望と催す。夜霜に寒けき。砦の響。



幽に枕傳ひ。曉氷と輾る車の跡。遙の門前、横り。巷と過る行人、征馬の忙氣あるけしき。浮世と渡る有さやも。思召知れて哀之。宮門と守る蠻夷の。夜晝警衛と勤るも。先世のいかる契にて。今縁と結ぶらん。仰ありけるぞ。忝き。凡物にふき事。随て。心傷めずと云とさし。去儘に、彼折々の遊覽。所々の参詣。は賀のめでたかりし事ども。思召つけて。懷舊の涙。押給ひ難し。月去月來て。治承も四年に成りけり。

平家物語圖會卷之三終

平家物語圖會卷之四

東武 高井蘭山翁述

主上を降し春宮を踐祚なし奉る。高倉宮御謀叛顯れ御所を開せ給ふ。

治承四年正月元日。法皇の鳥羽殿へ。相國入道赦なき故。年頭の慶賀に。参入する人もあし。唯故少納言入道信西の子息。櫻町中納言重教卿。其弟左京大夫長教計。宥されて参れける。同廿日春宮は衿着。あらびには摩那始とて。目出度事共有し。鳥羽殿に。は耳の餘所。はのかに聞し召のみ。二月廿一日主上異なる。恙も渡らせ給ひぬに。御位を御降し奉り。春宮踐祚あり。皆是太政入道我儘の致所。主上は八代高倉院也法皇第三の皇子にておはし。三種の神器を渡し奉り。上達部陣に集て。故事共先例に任せ。行れしに。左大臣殿陣に出て。は讓位の事共。仰せを聞。意ゆる人。涙を流し。懷を傷めざる。は自分より御位を。儲君に譲りまし。麻姑射の山の中。閑にあらまし。かばと思召方。たにも。哀は多き習どがし。況や是の心からせも。押下されさせ給へる。心の内。やもなかく。愚なり。傳れるは。







る似まゐらせ給ひたりしかを。法皇の先故女院の事より思召出で。涙留かぬ給ふ。兩院の御座近く飾れたり。此間の問答の人承るに及ばず。御前に尼前のみにて。良久しう言談ありし。日長て暇やさせ。鳥羽の草津より御乗船。法皇の離宮故亭。幽閑寂寞の居。は心苦しう覺せ給へ。法皇の上皇の旅泊行宮の波の上。船の中は有さま覺束さく思召や給ふ。誠に都の宗廟を聞れ。途々安藝國迄の御幸を。神明などか納受のあかるべき。願成就疑あしとみへにける。同廿六日嚴島へ着御。入道相國取愛の内侍が宿所を。皇居にあし。中二日は逗留。經會舞樂行れ。結願の導師に公顯僧正。高座に上り。鐘打鳴し表白の詞に。九重の都を山させ給ひ。八重の潮路を分。途々是迄。参らせ給ひたる志の添さよと。高らかにすされしか。君も臣も感涙を催されける。諸末社皆は幸あり。大宮より五町計り。山を廻らせ給ひ。瀧の宮へ参らせ給ふ。公顯僧正一首を拜殿の柱に貼して

雲井より落くる瀧は白いとみ。契りを結ぶとぞうれしき

神主佐伯景廣。加階従上の五位。國司藤原有綱。品上られて従下の四品。あらびに院の殿上を

赦さる。座主尊永法眼にみさる。神慮も動き。入道相國の心も。和ぎ給ひんとみへし。同廿九日還御の船飾り。推出す所。折節波風烈しけれ。漕戻させ。嚴島の内。蟻浦に留らせ給ふ。大明神の名残惜に。歌仕れ人々と。上皇の仰あれ。隆房少將

立歸る名残もありの浦あれ。神も恵みをかくる志ら波

夜半に風静りけれ。船出させ。備後國頻波の泊に着せ給ふ。此所へ去る應保の比。一院其比鳥羽の法皇を。一院崇徳院の御事を新。御幸の時。國司藤原爲成が造れる。御所のありしを。入道殿院と申保元に新院は。讃岐へ移され給へり。御御幸の時。國司藤原爲成が造れる。御所のありしを。入道殿院に飾られぬ。され共上皇これへ入給はず。今日卯月朔日。衣更といふとの有ぞりしとて。各都の事を宣ひ出。詠や給ふ。岸に色深き藤の松枝に咲かたりけるを。上皇叙覽あり。あの花折せよと仰けれ。大宮大納言隆季卿承つて。左史生中原康定が。梯船に乗て折節御前を。漕通しを召て。折み遣す。頓て松の枝ながらに。参らせられぬ。心をせ有と御感此花みて歌仕れと仰けれ。隆季大納言

千とせへん君の齡に藤波の。松の枝にもかたりぬるか

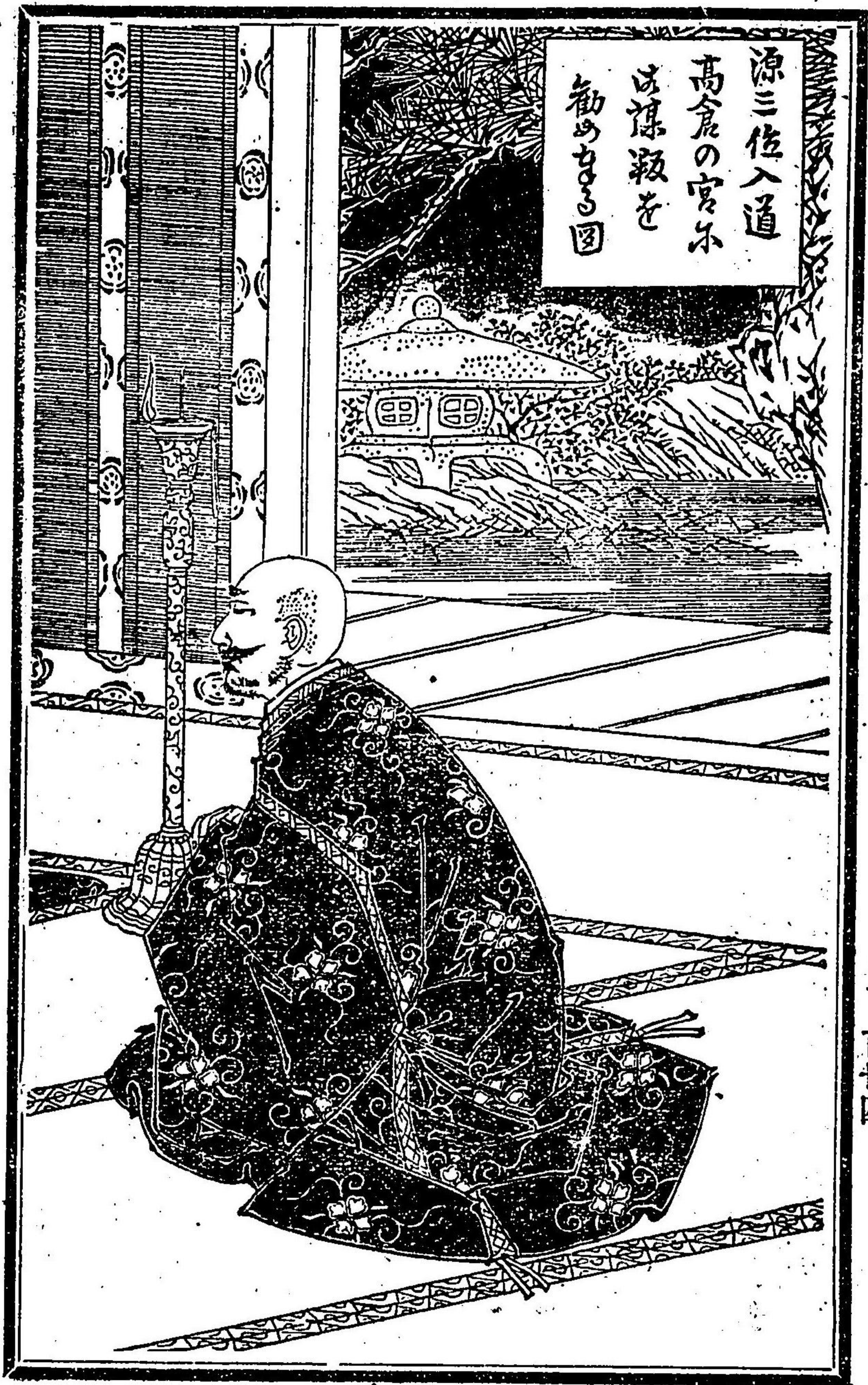
二日の備前の兒島に着給ひ。五日播磨國山田の浦。是より興に召。福原へ入給ひ。六日



所<sup>しよ</sup>の<sup>り</sup>歴<sup>れき</sup>覽<sup>らん</sup>。池<sup>い</sup>中<sup>ちゆう</sup>納<sup>なつ</sup>言<sup>ごん</sup>頼<sup>らい</sup>盛<sup>せい</sup>卿<sup>けい</sup>の山<sup>さん</sup>庄<sup>じやう</sup>。荒<sup>あ</sup>田<sup>た</sup>迄<sup>まで</sup>は覽<sup>らん</sup>せられ。七<sup>しち</sup>日<sup>にち</sup>に福<sup>ふく</sup>原<sup>げん</sup>を立<sup>た</sup>せ給<sup>たま</sup>ふとて。入<sup>い</sup>道<sup>だう</sup>の家<sup>いへ</sup>の賞<sup>しょう</sup>を行<sup>おこな</sup>はる。入<sup>い</sup>道<sup>だう</sup>相<sup>さう</sup>國<sup>こく</sup>の養<sup>やう</sup>子<sup>し</sup>丹<sup>たん</sup>波<sup>は</sup>守<sup>しゆ</sup>清<sup>せい</sup>國<sup>こく</sup>。正<sup>せい</sup>下<sup>げ</sup>の四<sup>し</sup>位<sup>い</sup>。入<sup>い</sup>道<sup>だう</sup>の孫<sup>まご</sup>越<sup>お</sup>前<sup>ぜん</sup>少<sup>せう</sup>將<sup>じやう</sup>の。四<sup>し</sup>位<sup>い</sup>の從<sup>じゆ</sup>上<sup>じやう</sup>と  
 不<sup>ふ</sup>聞<sup>もん</sup>へし。其<sup>その</sup>日<sup>にち</sup>寺<sup>てら</sup>井<sup>い</sup>に着<sup>つ</sup>せ給<sup>たま</sup>ひ。八<sup>はち</sup>日<sup>にち</sup>に迎<sup>むか</sup>ひの公<sup>こう</sup>卿<sup>けい</sup>殿<sup>でん</sup>上<sup>じやう</sup>人<sup>にん</sup>。鳥<sup>とり</sup>羽<sup>う</sup>は草<sup>くさ</sup>津<sup>つ</sup>迄<sup>まで</sup>參<sup>ま</sup>られ。還<sup>くわん</sup>御<sup>ぎ</sup>は鳥<sup>とり</sup>羽<sup>う</sup>  
 殿<sup>でん</sup>へ御<sup>ご</sup>幸<sup>きやう</sup>なく。直<sup>す</sup>に相<sup>さう</sup>國<sup>こく</sup>の西<sup>せい</sup>八<sup>はち</sup>條<sup>じやう</sup>の亭<sup>てい</sup>入<sup>い</sup>せ給<sup>たま</sup>ふ。同<sup>どう</sup>廿<sup>じふ</sup>二<sup>に</sup>日<sup>にち</sup>新<sup>しん</sup>帝<sup>てい</sup>御<sup>ぎ</sup>即位<sup>ごう</sup>大<sup>だい</sup>極<sup>ごく</sup>殿<sup>でん</sup>にて行<sup>おこな</sup>はるべ  
 きに。嚮<sup>きやう</sup>炎<sup>えん</sup>上<sup>じやう</sup>の後<sup>ご</sup>。造<sup>つく</sup>り出<sup>い</sup>だされざる故<sup>ゆゑ</sup>。太<sup>たい</sup>政<sup>せい</sup>官<sup>くわん</sup>の廳<sup>おほら</sup>にて行<sup>おこな</sup>はるべきかと。公<sup>こう</sup>卿<sup>けい</sup>會<sup>かい</sup>議<sup>ぎ</sup>ありしに  
 九<sup>く</sup>条<sup>じやう</sup>殿<sup>でん</sup>の仰<sup>おほせ</sup>ふ。そまは凡<sup>はん</sup>人<sup>にん</sup>の家<sup>いへ</sup>に取<sup>と</sup>らば。公<sup>こう</sup>文<sup>ぶん</sup>所<sup>じよ</sup>躰<sup>たい</sup>の所<sup>じよ</sup>。紫<sup>し</sup>宸<sup>いん</sup>殿<sup>でん</sup>ぞ然<sup>しか</sup>るべしとありしゆある。  
 紫<sup>し</sup>宸<sup>いん</sup>殿<sup>でん</sup>めては即位<sup>ごう</sup>ある。去<sup>い</sup>し康<sup>かう</sup>保<sup>ほう</sup>四<sup>し</sup>年<sup>ねん</sup>。冷<sup>れい</sup>泉<sup>せん</sup>院<sup>いん</sup>紫<sup>し</sup>宸<sup>いん</sup>殿<sup>でん</sup>にてありし。主<sup>しゆ</sup>上<sup>じやう</sup>は邪<sup>じや</sup>氣<sup>き</sup>にて。大<sup>だい</sup>極<sup>ごく</sup>殿<sup>でん</sup>  
 へ行<sup>おこな</sup>はる幸<sup>きやう</sup>叶<sup>あ</sup>ざりしゆ故<sup>ゆゑ</sup>。後<sup>ご</sup>三<sup>さん</sup>條<sup>じやう</sup>院<sup>いん</sup>延<sup>えん</sup>久<sup>きう</sup>の佳<sup>か</sup>例<sup>れい</sup>に任<sup>ま</sup>せ。太<sup>たい</sup>政<sup>せい</sup>官<sup>くわん</sup>の廳<sup>おほら</sup>にて。行<sup>おこな</sup>はるべき物<sup>もの</sup>を  
 と。人<sup>ひと</sup>々<sup>々</sup>合<sup>あ</sup>はれけれ共<sup>ども</sup>。九<sup>く</sup>條<sup>じやう</sup>殿<sup>でん</sup>の計<sup>けい</sup>はせ給<sup>たま</sup>ふ上<sup>じやう</sup>。左<sup>さ</sup>右<sup>う</sup>に及<sup>およ</sup>ばず。春<sup>はる</sup>宮<sup>みやう</sup>躰<sup>たい</sup>祚<sup>そ</sup>ありしかば。中<sup>ちゆう</sup>宮<sup>みやう</sup>の  
 弘<sup>こう</sup>徽<sup>き</sup>殿<sup>でん</sup>より。仁<sup>じん</sup>壽<sup>じゆ</sup>殿<sup>でん</sup>へ迂<sup>う</sup>り給<sup>たま</sup>ひ。やがて高<sup>たか</sup>御<sup>ぎ</sup>座<sup>ざ</sup>へ參<sup>ま</sup>らせ給<sup>たま</sup>ふ。平<sup>へい</sup>家<sup>け</sup>の人<sup>ひと</sup>々<sup>々</sup>。皆<sup>みな</sup>出<sup>い</sup>仕<sup>し</sup>せらるける  
 其<sup>その</sup>中<sup>ちゆう</sup>小<sup>せう</sup>松<sup>しょう</sup>殿<sup>でん</sup>の公<sup>こう</sup>達<sup>たつ</sup>の。去<sup>い</sup>年<sup>ねん</sup>太<sup>たい</sup>臣<sup>しん</sup>薨<sup>こう</sup>せられ。色<sup>いろ</sup>にて籠<sup>かご</sup>居<sup>ゐ</sup>せられけり。此<sup>こゝ</sup>色<sup>いろ</sup>と云<sup>い</sup>ふをさきまんとんのか  
 定<sup>さだ</sup>長<sup>ちやう</sup>。今<sup>こん</sup>度<sup>た</sup>のは即位<sup>ごう</sup>に違<sup>ちが</sup>亂<sup>らん</sup>なく。目<sup>め</sup>出<sup>で</sup>度<sup>た</sup>様<sup>やう</sup>を。厚<sup>あつ</sup>紙<sup>し</sup>十<sup>じふ</sup>枚<sup>まい</sup>計<sup>けい</sup>に書<sup>か</sup>て二<sup>に</sup>位<sup>い</sup>殿<sup>でん</sup>相<sup>さう</sup>國<sup>こく</sup>の北<sup>きた</sup>の方<sup>かた</sup>へ進<sup>ま</sup>せられ。笑<sup>わら</sup>ふ  
 笑<sup>わら</sup>ふ含<sup>あ</sup>めて悦<sup>よろこ</sup>ぶ。かやうに花<sup>はな</sup>やうに。目<sup>め</sup>出<sup>で</sup>度<sup>た</sup>事<sup>こと</sup>共<sup>ども</sup>有<sup>あ</sup>りしかども。世<sup>よ</sup>間<sup>かん</sup>の猶<sup>なほ</sup>にがくしうぞみへけ

れ。其<sup>その</sup>比<sup>ひ</sup>一<sup>いつ</sup>院<sup>いん</sup>後<sup>ご</sup>白<sup>はく</sup>河<sup>か</sup>法<sup>ぽう</sup>第<sup>だい</sup>二<sup>に</sup>の皇<sup>わう</sup>子<sup>し</sup>茂<sup>も</sup>仁<sup>に</sup>親<sup>しん</sup>王<sup>わう</sup>とすし。母<sup>はは</sup>の加<sup>か</sup>賀<sup>が</sup>大<sup>だい</sup>納<sup>なつ</sup>言<sup>ごん</sup>季<sup>き</sup>成<sup>せい</sup>卿<sup>けい</sup>の女<sup>むすめ</sup>。三<sup>さん</sup>條<sup>じやう</sup>  
 高<sup>たか</sup>倉<sup>くら</sup>に坐<sup>ま</sup>けれ。高<sup>たか</sup>倉<sup>くら</sup>宮<sup>みやう</sup>とぞ稱<sup>しょう</sup>しける。去<sup>い</sup>し永<sup>えい</sup>萬<sup>まん</sup>元<sup>げん</sup>年<sup>ねん</sup>十<sup>じふ</sup>一<sup>いつ</sup>月<sup>げつ</sup>十<sup>じふ</sup>五<sup>ご</sup>日<sup>にち</sup>。曉<sup>あけつぎ</sup>。是<sup>こゝ</sup>年<sup>ねん</sup>十<sup>じふ</sup>五<sup>ご</sup>にて忍<sup>しの</sup>び  
 つ。近<sup>この</sup>衛<sup>ゑ</sup>河<sup>か</sup>原<sup>げん</sup>の大<sup>だい</sup>宮<sup>みやう</sup>の御<sup>ご</sup>所<sup>じよ</sup>にて密<sup>ひそ</sup>かに元<sup>げん</sup>服<sup>ふく</sup>あり。手<sup>て</sup>跡<sup>せき</sup>殿<sup>でん</sup>しう遊<sup>あそ</sup>し。才<sup>さい</sup>學<sup>がく</sup>も勝<sup>か</sup>て坐<sup>ま</sup>しけ  
 れ。太<sup>たい</sup>子<sup>し</sup>も立<sup>たち</sup>。位<sup>い</sup>にも即<sup>つ</sup>せ給<sup>たま</sup>ふべかりしか共<sup>ども</sup>。故<sup>こ</sup>建<sup>けん</sup>春<sup>しゆん</sup>門<sup>もん</sup>院<sup>いん</sup>の猜<sup>そ</sup>に依<sup>よ</sup>り押<sup>おし</sup>籠<sup>かご</sup>られさせ給<sup>たま</sup>  
 ひけり。花<sup>はな</sup>の下<sup>した</sup>の春<sup>はる</sup>の遊<sup>あそ</sup>に。紫<sup>し</sup>毫<sup>ごう</sup>を揮<sup>あ</sup>つて。手<sup>て</sup>自<sup>じ</sup>作<sup>さく</sup>を書<sup>か</sup>き。月<sup>つき</sup>の秋<sup>あき</sup>の宴<sup>えん</sup>に。玉<sup>たま</sup>笛<sup>ふえ</sup>を吹<sup>ふ</sup>て。自<sup>じ</sup>ら  
 雅<sup>が</sup>音<sup>いん</sup>を操<sup>あつ</sup>り給<sup>たま</sup>ふ。のくして明<sup>あ</sup>し暮<sup>くろ</sup>させ給<sup>たま</sup>ふ程<sup>ほど</sup>に。治<sup>ち</sup>承<sup>じやう</sup>四<sup>し</sup>年<sup>ねん</sup>に。年<sup>ねん</sup>三<sup>さん</sup>十<sup>じふ</sup>にあらせ給<sup>たま</sup>ふ。其<sup>その</sup>比<sup>ひ</sup>  
 近<sup>この</sup>衛<sup>ゑ</sup>河<sup>か</sup>原<sup>げん</sup>に侍<sup>さむら</sup>ひけれ。源<sup>げん</sup>三<sup>さん</sup>位<sup>い</sup>頼<sup>らい</sup>政<sup>せい</sup>入<sup>い</sup>道<sup>だう</sup>。或<sup>ある</sup>夜<sup>よ</sup>密<sup>ひそ</sup>に。此<sup>こゝ</sup>宮<sup>みやう</sup>の御<sup>ご</sup>所<sup>じよ</sup>に參<sup>ま</sup>りやる。君<sup>きみ</sup>の天<sup>てん</sup>照<sup>せう</sup>大<sup>だい</sup>  
 神<sup>じん</sup>以<sup>い</sup>來<sup>らい</sup>。相<sup>さう</sup>承<sup>じやう</sup>正<sup>せい</sup>統<sup>とう</sup>神<sup>しん</sup>武<sup>ぶ</sup>天<sup>てん</sup>皇<sup>わう</sup>より。七<sup>しち</sup>十<sup>じふ</sup>八<sup>はち</sup>代<sup>だい</sup>に當<sup>あた</sup>せ給<sup>たま</sup>ふ。然<sup>しか</sup>れ。大<sup>だい</sup>子<sup>し</sup>にも立<sup>たち</sup>。位<sup>い</sup>にも即<sup>つ</sup>せ給<sup>たま</sup>  
 べかりし方<sup>かた</sup>の。三<sup>さん</sup>十<sup>じふ</sup>迄<sup>まで</sup>宮<sup>みやう</sup>めて。渡<sup>わた</sup>らせ給<sup>たま</sup>ふを。心<sup>こゝろ</sup>愛<sup>あい</sup>と。思<sup>おも</sup>召<sup>め</sup>れは。早<sup>さう</sup>く御<sup>ご</sup>謀<sup>ぼ</sup>叛<sup>はん</sup>を  
 起<sup>おこ</sup>させ給<sup>たま</sup>ひ。平<sup>へい</sup>家<sup>け</sup>を亡<sup>な</sup>し。法<sup>ほう</sup>皇<sup>わう</sup>の鳥<sup>とり</sup>羽<sup>う</sup>殿<sup>でん</sup>に。押<sup>おし</sup>籠<sup>かご</sup>られまします。憤<sup>い</sup>を休<sup>やす</sup>め奉<sup>たて</sup>まられ。君<sup>きみ</sup>も  
 御<sup>ご</sup>位<sup>い</sup>に即<sup>つ</sup>給<sup>たま</sup>ひ。孝<sup>かう</sup>行<sup>ぎやう</sup>是<sup>こゝ</sup>に過<sup>あ</sup>るといひんや。もし思<sup>おも</sup>召<sup>め</sup>立<sup>た</sup>せられ。令<sup>りやう</sup>旨<sup>し</sup>を下<sup>くだ</sup>し給<sup>たま</sup>ふ。悦<sup>よろこ</sup>  
 びとなして。馳<sup>は</sup>參<sup>さん</sup>する源<sup>げん</sup>氏<sup>し</sup>共<sup>ども</sup>。國<sup>くに</sup>々<sup>々</sup>多<sup>おほ</sup>くい。んぞ續<sup>つ</sup>く。先<sup>ま</sup>京<sup>きやう</sup>都<sup>と</sup>に。出<sup>い</sup>羽<sup>う</sup>前<sup>ぜん</sup>司<sup>し</sup>光<sup>みつ</sup>信<sup>のぶ</sup>が子<sup>こ</sup>供<sup>ども</sup>。  
 伊<sup>い</sup>賀<sup>が</sup>守<sup>しゆ</sup>光<sup>みつ</sup>基<sup>もと</sup>。出<sup>い</sup>羽<sup>う</sup>判<sup>はん</sup>官<sup>くわん</sup>光<sup>みつ</sup>長<sup>ちやう</sup>。出<sup>い</sup>羽<sup>う</sup>藏<sup>ざう</sup>人<sup>にん</sup>光<sup>みつ</sup>重<sup>じゆう</sup>。出<sup>い</sup>羽<sup>う</sup>冠<sup>くわん</sup>者<sup>しや</sup>光<sup>みつ</sup>能<sup>のぶ</sup>。熊<sup>くま</sup>野<sup>の</sup>に。故<sup>こ</sup>六<sup>ろく</sup>條<sup>じやう</sup>判<sup>はん</sup>官<sup>くわん</sup>の末<sup>すえ</sup>子<sup>し</sup>十





源三位入道  
高倉の宮本  
は涼寂を  
勧むるに  
因



郎義盛とて隠れてい。攝津國に。多田藏人行綱以得共。是の新大納言成親謀叛。同心しな  
 から。還忠したる。不常人にていへむ。やに及む。乍去多田次郎朝實。手島冠者高頼。太田  
 太郎頼基。河内國に。石川郡を知行しける。權頭入道義基。子息石川判官代義兼。大和國よ  
 り。宇野七郎親治。子ども。太郎有治。次郎清治。三郎成治。四郎義治。近江國に。山本。柏木  
 錦織。美濃尾張に。山田次郎重廣。河邊太郎重直。泉。太郎重光。浦野四郎重遠。安食次郎重  
 頼。其子太郎重資。木太三郎重長。開田判官代重國。矢島先生重高。其子太郎重行。甲斐國に  
 り。逸見冠者義清。其子太郎清光。武田太郎信義。加加美次郎遠光。同小次郎長清。一條次郎  
 忠頼。板垣三郎兼信。逸見兵衛有義。武田五郎信光。安田三郎義定。信濃に。大内太郎維義。  
 岡田冠者親義。平賀冠者盛義。其子四郎義信。故帶刀先生義賢の次男。木曾冠者義仲。伊豆  
 國に。流人前右兵衛佐頼朝。常陸國に。信太三郎先生義教。佐竹冠者正義。其子太郎忠  
 義。三郎義宗。四郎高義。五郎義季。陸奥國に。故佐馬頭義朝が末子。九郎義經。是皆六孫王  
 の苗裔。多田新發意滿仲が後胤なり。朝敵を平げ。宿望と遂ること。源平勝劣なかりしかど  
 も。今の雲泥交りを隔て。主従は禮にも獨劣れり。國は國司に隨ひ。庄は預り所に召使れ。公

事難事に駆立られて。安心もしみならず。情當世の跡を見ゆ。上より隨ひたる様なれ共。内  
 々一向平家を猜ぬ者のいへむ。君もし思召立せ給ひて。令旨を給つる程あらば。國々の源  
 氏共夜を日に續でも馳上り。平家を亡さんと。時日を廻らすべからず。其儀にていひ。入道  
 も年寄てこそいへ。若き子共餘多いへむ。引具して参りいべしと。被やける。宮は此といか  
 があらんと。思し召煩いせ給ひて。暫くは承引もあかりけるが。こゝに阿古丸大納言宗通卿  
 の孫。備後前司季通が子に。少納言維長とす。勝れたる相人ゆる。相少納言と人々やける。  
 此宮を見参らせて。位に即せ給ふべし。相まします。相搦て天下の事。思召捨ると。やされ  
 ける折節。三位入道かやう。勅められしおぞ。天照大神の告にもやとて。辨々と思召立せ給  
 ひ。先新宮十郎義盛と召て。藏人あふされ。行家と改名し。令旨の使に。東國へ下されける。  
 四月廿八日都と立て。近江國より始。美濃尾張の源氏共に。次第に觸下るやどに。五月十日に  
 は。伊豆の北條蛭ヶ小島に着て。流人前右兵衛佐殿に令旨と取出し渡し。夫より信太三郎先  
 生義教は。兄なれば給んとて。信太の浮島へ下り。又木曾冠者義仲は。甥をれを。取せんとして。  
 山陽道へ趣ける。こゝは熊野の別當地。平家重恩の身なりしが。何としてか開出しけ



新宮十郎義盛こそ。高倉宮の命旨と給て。既に謀叛を起すなれ。那智新宮の者共は。定て  
 源氏の方人とせせん。堪増は平家の恩深き身の。いかで背奉るべき。矢一筋射かけて  
 後。都へ子細をゆさんとて。混甲一千餘人。新宮の邊へ發向す。新宮鳥井法眼。高坊法眼。侍に  
 は。宇井。鈴木。水屋。龜甲。那智には。執行法眼以下。都合其勢千五百餘人。関と作り矢合して。  
 源氏方には。兎こそ射れ。平家方には。角こそ射れとて。互に矢叫の聲退轉もなく。鏑の鳴止間  
 も。あつ。三日が程。戦ければ。覺への法眼堪増は。家の子郎等多く手負。我身も手負。辛き命  
 生。泣く本宮へ歸上りける。時に鳥羽殿にて。融の夥しう走り喚とあり。五月十二日午の刻  
 斗より。申刻に暨り。法皇甚。性。給ひ。近江守仲兼。其時鶴藏人にて。ひしと。御前に召。  
 安倍泰親が。許へ行吃と勘へさせ。勘状を取て參れと仰ける。仲兼急ぎ走到て。は。説の旨と傳  
 へけれと。頓て勘文を奉る。仲兼是と取て。鳥羽殿へ入んとするに。日もいたう晚じたれば。  
 守護の武士共。救さず。勝手は知つ。築地を超。大床の下と這て。は。前の切版より。泰親が。勘状  
 を參らせぬ。是と。覺あるに。今三日が内の。歎。あらびに。歎とぞ。勘へやたる。法皇此は  
 有さまにも。は。悦もむるとにや。又。かある。目に。逢て。歎くらんと仰ける。同十三日宗盛

卿は。父入道殿の前におはして。法皇の。上と。いたう。哀れに。すされければ。漸に。思ひ直さ  
 れ。法皇を。鳥羽殿より。出し。都へ。還御なし。奉り。八條鳥丸美福門院の。御所へ。入。さる。今三  
 日。が。中。は。悦。とは。是。ならん。か。る。處に。熊野別當。堪増。が。飛脚。到着して。高倉宮に。謀叛の  
 よし。都へ。注進。に。依て。右。大將。宗盛。卿。大に。駭。れ。其。節。入道。殿の。福原。におはしけるに。此  
 よし。や。されしか。と。入道。殿。大に。怒て。其。儀。なら。ば。高倉宮。を。搦。捕て。土佐の。畑へ。遷すべし。と。宣  
 ひたり。上卿。に。三條。大納言。實房。卿。職。事に。と。頭。辨。光。雅。と。言。聞へし。武士。に。と。源。大夫。判官。兼  
 綱。出羽。判官。光長。混甲。三百。餘騎。宮の。御所。へ。ぞ。向。ひ。たる。此。兼。綱。の。三位。入道。の。次男。ある。を。此  
 人數。に。入。たる。は。宮の。は。謀。叛。と。三位。入道。勸。め。や。と。と。平家。に。い。まだ。知。ら。ざ。し。ゆ。ゑ。と。

長谷部信運剛勇の。働。高倉宮。園。城。寺。宮。御。衆。徒。を。頼。給。ふ。

去程に。宮の。五月。十五。夜。の。月。と。眺。め。何。の。心。なく。お。ひ。せ。し。處。三位。入道。の。使者。忙。し。げ。に。來  
 て。文。と。差。上。る。宮の。小。乳。母。子。六。條。亮。大夫。宗。信。請。取。て。差。上。る。を。宮。披。見。給。ふ。に。は。謀。叛。顯。れ  
 土佐の。畑。へ。遷。し。參。ら。す。べ。し。と。と。官。人。共。別。當。宣。と。承。て。は。迎。に。參。り。急。ぎ。三。井。寺。へ。は。披。さ  
 ひ。べ。し。入。道。も。頓。て。參。と。ひ。は。ん。と。有。宮。は。此。事。い。か。い。せ。ん。と。思。し。煩。せ。給。ふ。處。に。宮の。侍



長兵衛尉長谷部信連は身近くいひしが。女房の装束に出立せ給ひ。落させ給へとす。此義尤  
 ことと。御髪と乱り。重ねたる御衣に。市女笠と召れ。六條宗信傘持て。は供仕る。鶴丸と  
 云童。袋に物入れて載たり。青侍が女と向へて行様に立立せ給ひて。高倉を北へ落させ給ふ  
 に。大きある溝の有けるを。いと物輕く越させ給へ。道行人が立留て。はしたるの女房の溝  
 の越やうやとて。帷げに見とめたるゆゑ。いと足早に過させ給ふ。御所の留守には。信連  
 と置れけるが。女房達少々坐けると。彼爰へ立忍ばせ。見ぐるしきものゑと。取認んどみる  
 た。は秘藏ありし。小枝と云は笛を。は枕元に取忘れさせ給へるを。穴めさやしとて。五町程  
 走り追て。進らせければ。宮は悦有て我死を。此笛も棺に納よと仰ける。頓て御所へ歸らん  
 とせしに。は供仕れと仰けられた。信連が上るやう。官人共は迎に參らんに。一人もいはさら  
 んは。無下に口惜く存し。其上御所に信連がひり。上下皆知たる事にいと。逃たりあると云れん  
 と口惜く。弓矢取身の。假にも名こそ惜ういへ。一方打破らば。頓て参りいんんとて。唯一人  
 取てかへす。信連其夜の装束には。薄青の狩衣の下に。萌黄匂の腹巻を着て。衛府の太刀を帶  
 たどける。子の刻をのぞ。三百五十餘騎の官軍。宮の御所へ押詰たり。源太夫判官の。存る旨

有と覺へ。遙の門外に扣へた。出羽判官光長と。乗ながら門の内へ打入。庭に扣。大音聲に  
 宮の謀叛。露させ給ふに依て。は迎に参りて。疾々出いへとやければ。信連大床より立  
 て。宮の物詣にて御所に坐さす。何事か子細をやらせよと云ければ。出羽判官。何方へ  
 か渡らせ給ふべき。其義あらば。下部共参りて。捜し奉れとやけるを。信連重て。物も覺ぬ官  
 人共のや様か。馬に乗みながら。門内へ參たに奇怪あるに。剩下部共捜し奉れとは。争の  
 やど。長兵衛尉長谷部信連侍。近寄て。過とぞとやける。廳の下部の中に。金武と云大  
 力の者。打物靴と外し。信連に目と掛て。大床の上へ飛上る。是と見て同謀共。十四五人ぞ  
 續たる。信連これと見て。狩衣の帯紐引切て捨。衛府の太刀あがら。身をば心得て。作らせし  
 と抜合せ散々。戦けるが。信連に切立られ。嵐ふ散木の葉のおどく。庭へ風と下りける。十  
 五夜の月雲間より顯れ。清明なるに。敵は無業内。このしこに追つめく。切伏たるを。は  
 んに宣旨のは使と。角のするどと云ければ。宣旨と何ぞとて。太刀曲めを。踊退て踏直し  
 く。よき者十四五人討取。其後太刀の鋒。三寸餘り打折たり。腹を切んと腰と捜せども靴  
 巻落てあかりけき。力及ず大手を播げ高倉表の小門より。跳出んとする處に大長刀持たる



男一人寄逢たり信連長刀に乗んと飛で掛るが乗損じ勝を繼て貫れ大勢取籠たるゆゑ空しく生捕となりぬ。其後御所中に齎入て投せども宮と渡せ給はず信連斗搦て六波羅へ引立歸りける次第一々開給ひて宗盛卿大床より立て信連を引居させ。汝宣旨の使と名乗を。宣旨との何ぞとて切たりたるか。其上廳に下部共多く殺害せしよな。此者能々糾問して子細具にし其後河原に引て首と列よと宣ひける。信連大膽の剛の者にて居直りてりふくと打笑ひ此程の高倉の御所を夜々物窺ひいと。何條とのいへばと。思ひ慢て。用心も仕ぬ處も夜半むりりよ。鑑たる者共二三百打入いと。何者ぞと尋ひへば宣旨の使とす。當時諸國の強盗共或の公達の入せたるぞ。或の宣旨の使と。名乗すと。豫々承てし程。宣旨の何ぞとて切信連物の具とも思様お仕。鍛能太刀とも持てい。唯今の官人共よも一人安穩めて歸しはじ。其上宮の在在所の更存せず縦ひ知りいと侍のやまじと。存切なるまの何様糾問有とてやべき様なしと。其後は物も言すなれば並居る平家の侍共哀れ剛の者や。是等こゝろ一人當千の兵と云べけれと口々よすける。或人各のちらすや。先年大番衆の。留難わぐみたりし。強盜六人を唯一人追駈。二條堀川にて四人切伏二人生捕て

引來ぬ。其時おされたりし。左兵衛尉ぞと。可惜男の斬れんと。無慚さよと惜あへり入道殿いりと思ひけん。さらば斬あとして伯耆の日野へ流されける平家滅び。源氏の世となりし時。東へ下り。梶原平三景時お就て。事の根元一々やけれ。鎌倉殿神妙と御感有て能登國よて。恩地を給りける。去程は宮の高倉を北へ近衛を東へ。賀茂川を涉如意嶽に入給ふ。往昔清見原天皇。大友皇子に襲ふ。吉野山へ入せ給ふ。處女の姿を假せ給ひし。違を。知ぬ山路を。途々分給へを。何習しのほどなきま。御足よと出る血しは。沙を染て紅を残り。夏草の茂さと踏ひらめ。曉方三井寺に到着。かひみさひ命の惜さに。衆徒と頼て。入御有しと仰けれ。衆徒大に悦び畏て。法輪院に御所を飾ひ。うたの如く痛勞帥やた。あくれを十六日京中にとや此と隠さる。騷動斜あらず。抑頼政入道。年比日來に似もつりぬ謀叛と起されしは。ろもいりある故と尋れを。平家の次男宗盛卿。不思議の所行せられしに根させり。源三位入道の嫡子。伊豆守仲綱名た。る良馬を持て秘藏あり。鹿毛ふて。乘走心ひけ。無双の逸物名と木下と呼ばれる。宗盛卿使者と立て。聞ゆる名馬と給て。見いばやと遣さる伊豆守返辭に。仰下する。馬の。此はと餘りに。乗疲ししへ。聊憩せんとして。田舎へ預遣しいと。



然ハ力及事とて。沙汰なかりしが。平家の侍共。其馬こそ一昨日迄もいひし。昨日見かけし。今朝も庭乗しけつ。あど、口よりすける。宗盛卿とて。客惜みころ。悪しきとて。侍と馳文あどして。二時が間。五六度をれける。父三位是を聞。たどひ金を以て。丸めたる馬之共。それ程人の望んに。畜へさかり。其馬速に。六波羅へ遣せし。すさる、ゆる。伊豆守力及せ。一首の歌と書添て。六波羅へ遣はしける。

戀しくの來てを見よかし身に添る。影をいかに放ちやるべき。

宗盛卿殿は返事をし給ひて。哀れ馬や馬の職に好馬にありけり。されども餘りお客つるが憎さに。主人名乗を。鐵燒にせよとて。仲綱と云金燒をして。馬屋お立られ。客人來て。聞へい名馬と見ゆ。見ゆいゆとすければ。其仲綱めに鞍置引出せ。のれ。うて。これ。など、宣ひける。伊豆守此由傳へ聞身に代て思ふ馬なれ共。權威に付て取る。さへあるは。利天下の笑れ種に。さるこそ易かふねと。大お憤けさ。父三位も大お怒。何條とめあふんと思慢。さやらの舉動あるを覺ふ。其儀あらば。命生て何かせん。便宜を伺ひ。事と計んといひれしが。私に思ひも立れず。高倉宮を勤めさせし。後々お聞へける。是に付て。天下の人々。小松殿

の事と。忍びませし。或時小松殿参内の序。中宮の方へ参せ給ふに。八尺許ある蛇。指貫の左に輪を這廻りけると。重盛騒ハ女房達も中宮迄も。驚せ給ふんと。左の手に尾を押。右の手に首を取て。直衣の袖の内へ引入つて立て。六位やい。くと呼れける。伊豆守仲綱。其時。まだ衛府の職人にて。仲綱と名乗て参りたれば。此蛇を給ぬ。給て弓場殿を経て。殿上の小庭に出。御倉の小舎人を招き。是給れと云ければ。大に頭を掉て逃去ぬ。伊豆守力及せ。我郎等競を召て捨しめけり。其朝小松殿より。好馬に鞍置て。伊豆守の許へ遣すとて。昨日の振舞。優み艶しくいひつれ。是の乗一の馬に。夕に及て陣外より。傾城の許へも通れん時。用らるべしとや越る。伊豆守大臣より賜ふことゆる。馬添給りいぬ。さても昨日の振舞の。還城樂よ似ていひしとぞ。や答ける。小松殿の。かやうに優なる例も多ありし。其弟にて宗盛卿の人の惜む馬を。強に乞取のみあらず。天下の大事を。引出さる、ど方角さ。同く十六日夜に入て。入道頼政嫡子伊豆守仲綱。次男源太夫判官兼綱。六條藏人仲家。其子藏人太郎仲光以下三百餘騎。館よ火を掛燒上て。三井寺へ参られける。當家年來の侍。渡邊源三鏡瀧口と云者馳後れ留たるを六波羅へ召て。汝の相傳の主。三位入道が供をばせで。など



留りしと宣へば。競畏て日來は自然のともいひぬ。真先かけて命を奉らうとこそ存しが。今度はいくらいひしや。かうとも知されざりつる間。留ていとす。宗盛卿先途後樂を存じ。當家に就て奉公せんや。又朝敵賴政法師に同心せんと思ふや。有のまゝにやせと宣ひける。競涙をばらりと流し。縦ひ相傳のよしみ共。朝敵とある人に同心すべし共存せず願く。殿中に奉公を遂度いへとす。大將さらば奉公せよ。賴政法師が仕けん。思にの些ども劣るまじさだとして入給ひぬ。朝より夕べ迄。怠なく相詰ける。ふた、び宗盛卿立出給ふ。競中は。誠や三位入道の。三井寺にて聞へい。定て夜討ふんどもや。向られいとめ。入道の一類渡邊黨。扱の三井寺法師にてぞいはん。心憎くもいひす。能向て擇討をもんたし。奉公始の賢に入ははん。さる馬持ていひしを。此やと親き奴めに。盗れてい。馬一匹。下し預りい。いやとすければ。大將もつともさるべしとて。白茸毛ある。煖廷とて秘藏ありしに。能鞍置て競に給ふ。宿所に陣り妻子共をむ。彼爰に忍ばせて狂紋の狩衣。菊とち大さらかにしたる。よ。重代の着背緋威れ鎧着て。星白の甲れ緒を縮。いか物作の太刀を帯。二十四指たる大中黒の矢を負。瀬口の骨法忘じとや。鷹の羽と作たる。的矢一手を差添。滋藤の弓持て。煖廷お打

乗。乗替一騎打具し。舍人男に持楯脇挾せ。我家に火とかけ焼上て三井寺へこそ馳たりけれ。六波羅に。競の家より火出さりと。驚ければ。宗盛卿立出。競のいあるか侍とすとす。奴めと手延おして。竊れぬる。あれ追跡て討と宣へ共。彼の大剛の矢續早の手垂れば。二十四指たる矢に。先二十四人の射殺されん。音あせそとて。進者あかりける。三井寺にて。渡邊黨寄合て。いかにもして競瀬口をむ。召具せられんをと。口々にやける。三位入道競が心を。能知てやさる。は。無下に捕搦られもせじ。入道に。志深さ者なれば。今参らんぞと。言の下につ。と参りより。競の伊豆守殿の木下が代に。六波羅の煖廷を取てい。参らせい。いと奉る。伊豆守限なく悦び。やがて尾髪を切。金焼をして。其夜六波羅へ遣し夜半斗お門の内へ。追入たり頼て殿に入て。馬共と。啗逢ければ。其時舍人男。煖廷が参ていとす。宗盛卿急ぎ出見給ふに。昔の煖廷今。平宗盛入道と云。金焼をこそ仕たりけれ。大將悪き競め切て捨べかりしと。今度三井寺へ寄ん人々。いかにもして競めと搦にせよ。鏝おて頼と斬んよと。跳上りく怒られしが。煖廷の尾髪も生ず。鐵焼も又失ざりけり。去程に三井寺に。大衆僉議しけるは。抑世上の體と案する。王法佛法共ふ衰微して。緇徒といへ共。一日片時安



住の思ひなし。今宮の入御あること神明の冥助。佛陀の加護と覺ふ。今相國入道を戒すんば  
 殆佛法の滅却すべし。北嶺南都を語りひ。一味同心して。平氏と傾くべしと衆議決しけれ  
 ば先比叡山延曆寺へ王子入御の由を言て。台宗一圓の好身と以て力と戮されしへと。牒狀道  
 しける。山門披見て評定しなるの。其文章に。山門と三井寺の。門跡ニツ分るといへども  
 學處の。圓頓一味の教門なれば。鳥の左右の翅も等く。車の二輪に似たり。一方闕るとも。  
 互の歎こと。書ると難じて。三井寺の當山の末寺に有なつら。鳥の翅。車の輪に譬。押へて書  
 條。奇怪こと。返牒も及ず。其上相國入道。座主明雲僧正。衆徒を靜ふるべきよし宣ひ。  
 其上相國の謀に。近江米二万石北國に織延絹三千匹と寄。是と谷々嶺々へ引れける。さて  
 又三井寺より南都興福寺への狀に。宮の入御に頼み付。身命を抛て。奉公を遂んとす  
 れば。無勢にして一時滅亡せんとす。願くの内。佛法の破滅と助け。外には惡逆の伴類を  
 退治し。一身同心の功を成賜れと申遣しける。興福寺の。大衆評定して。是の互の事  
 とて。多分は承知すれ共。大勢のとゆゑ。決着埒明す。三井寺には宮入せ給ひてより。大關小  
 關堀切て。堅固に備へ。山門の心替りしつ。南都のいまだ參入す。延々おは成たし。いざや

今夜六波羅へ夜討せん。先老少を二手よ分。老僧共の如意が嶺より。搦手へ向ふべし。白川の  
 在家。火と掛焼立バ。在京人六波羅の武士。あつや事出来ぬとて。馳向ん。其時岩坂櫻本の  
 邊に。暫し支へ防ぎ。戦ん間に。大手の松坂より。伊豆守大將にて。若大衆惡僧共。六波羅に  
 押寄。風上は火と放て。一搦もみ責んふ。あどか太政入道焼出して討さるべきと。僉議を  
 處に。平家の所をみす。一如坊阿闍梨真海の。弟子同宿數十人引具し。りくやさバ。平家の方  
 人とも思ひれん。一向其儀あらず。衆徒の名をも思ひ。當山の名をも惜ふこそ。言とも出  
 あれ。今源氏の運傾き。平家に靡ぬ草木もあさよ。小勢と以て取掛ん。容易の叶ひがたし  
 能々。巡し。勢を催ての上。根と固てこそ思ふ儘も打勝べけれと。程を延さん爲。長々  
 と演けるに。乘圓坊阿闍梨慶秀の。衣の下に萌黄匂の腹巻し。大太刀を帯。白柄は長刀と杖  
 つき。長僉議の無用之。證據の外に引べのらす。先我寺の本願。天武天皇春宮の御時。大友皇  
 子。襲れ。芳野の奥と出。大和國宇多郡を過給ふ。其勢わづか十七騎。され共伊賀伊勢に  
 打越。美濃尾張の軍兵と以。大友と亡し。終る位。即給ふ。窮鳥懐に入時。刺翅人もこれ  
 を哀む。自餘のしらす。慶秀が門徒に於て。今夜六波羅へ押寄て。討死せよと云程。是



願され。大勢我もくと同腹す。先搦手に向ふ。老僧の大將軍に。源三位入道賴政。乘圓  
 房阿闍梨慶秀。律成坊阿闍梨日胤。師法印禪智。其弟子義實。禪永を先として。其勢一千餘人  
 手々に續松を振て。如意が峯へ向ひける。大手の大將軍あり。嫡子伊豆守仲綱。次男源大夫判  
 官兼綱。六條藏人仲家。其子藏人太郎仲光。大衆あり。圓満院太輔源覺。律成坊伊賀公。法輪  
 院鬼佐渡。成喜院荒土佐。是等れ法師の。弓箭打物の達者飽まで剛力。鬼もも神もも。後を見  
 せざる一人當千の面々。平等院に。因幡堅者。荒大夫。角六郎房。島阿闍梨。筒井法師。卿  
 阿闍梨。惡少納言。北院に。金光院。六天狗。式部太輔。能登。加賀。佐渡。備後等。松井肥後  
 澄南院。院後。加屋筑前。大矢。俊長。五智院。但馬。慶秀の房人六十人の内。加賀。光乘。刑部  
 春秀。法師原に。一來法師。堂衆に。筒井淨妙。明秀。小藏尊月。尊永。慈慶。樂住。鐵拳。玄  
 永。武士には渡邊。省。播磨次郎。授。薩摩兵衛長七。唱。鏡。瀧口。右馬。允。與。源太清。渡邊。歡  
 以上は渡邊。と先として。都合其勢一千五百餘。三井寺とて。打立けれ。寺に。宮入御の。後。播磨  
 かき。逆茂木引たれ。堀に橋渡し。逆茂木取除。あとして。時刻推移。て。關路の。雞鳴。あへり。伊豆  
 守爰にて鳥啼て。六波羅へ。白晝に到る。い。い。かん。の。せん。と。云。時。圓満院太輔源覺。又進

み山。昔孟嘗君の客。雞の聲となして。函谷關と欺。と。通。とし。例もあり。是も敵の謀にて。  
 啼すとも。あ。らん。唯。寄。よ。や。と。ひ。た。押。に。行。程。に。五。月。に。短。夜。天。明。ぐ。と。き。と。け。れ。ば。伊。豆。守。仲  
 綱。夜。討。と。こ。そ。期。し。る。を。晝。軍。あ。て。い。の。で。叶。ふ。べき。あ。れ。呼。返。せ。や。と。大。手。の。松。坂。よ。り。取  
 て。か。へ。し。搦。手。は。如。意。の。嶺。よ。り。引。返。す。若。大。衆。惡。僧。共。是。の。一。如。房。の。長。僉。議。に。こ。ろ。夜。の。明  
 たれ。其。坊。切。と。て。推。寄。く。坊。と。散。々。に。乱。妨。す。防。ぐ。處。の。弟。子。同。宿。皆。討。れ。我。身。も。手。負。這。く  
 六波羅に。參。て。此。由。訴。や。け。れ。共。六波羅には。軍。兵。數。方。騎。馳。集。て。些。と。も。騒。ぐ。氣。色。あ。し。去  
 程に。宮。の。南。都。の。未。參。ら。ず。此。寺。斗。に。て。い。か。に。も。叶。べ。か。ら。ず。と。評。議。あ。る。處。へ。南。都。よ。り。漸  
 返。狀。來。て。や。越。る。趣。一。山。領。掌。す。と。い。へ。と。も。散。在。の。者。も。有。て。出。勢。の。少。く。延。引。す。べ  
 し。近。き。お。馳。參。ら。ん。と。や。來。る。然。を。此。方。よ。り。入。御。あ。る。べ。し。と。て。同。廿。三。日。院。三。井。寺。と。出。さ  
 せ。給。ふ。此。時。老。僧。の。皆。は。暇。給。て。止。め。ら。れ。若。大。衆。惡。僧。と。具。せ。ら。れ。南。都。へ。落。さ。せ。給。ふ。三。位。入  
 道。同。一。族。渡。邊。黨。ま。で。其。勢。一。千。五。百。餘。人。之。乘。圓。房。慶。秀。鳩。の。杖。に。絶。御。前。に。參。り。雙。眼。に  
 涙。と。淨。べ。老。僧。何。國。ま。で。も。は。供。と。存。ず。れ。共。年。既。お。八。旬。も。越。行。歩。も。叶。が。た。く。い。へ。ば。腹。心  
 の。弟。子。刑。部。房。俊。秀。を。進。せ。し。之。是。の。一。と。せ。平。治。の。合。戰。に。故。左。典。廐。義。朝。が。手。に。侍。ふ。て。六



條河原に討死仕りひひし。相摸國の任人。山内須藤刑部源俊通の子にてい。聊所縁の  
 いて。懐にしおほし立。弟子ふいしひへ。心の底迄よく知てい。何國迄も召具せられ  
 へどて。涙とおさへて留りけり。宮も哀れ思召。何の好身あかしく迄やらん。志の程こそ  
 恭けれとて。涙にくれ給ひける。宮の夫より馬にて打せ給へ。各隨ひ奉る扱又此  
 宮蟬折小枝とて。名笛二管持給へ。蟬折の鳥羽院の時。宋の帝を贈り奉りし。漢竹よて  
 生たる蟬のごとく。節の附たる。三井寺の大進僧正覺宗に仰せ。壇上に立七日の加持有て  
 彫せ給ふ。或時高松中納言實平卿。此笛を吹れ。尋常の笛のごとく思ひ忘れ。膝より下に置れ  
 しかば。笛や尤けん。蟬折おけり。さてあるを蟬折と召れける。此宮地能のゆる。は相傳ましま  
 せり。今限とや思召けん。金堂に彌勒に。籠參らせ給ひしとかや。此宮宇治と寺とを間にて  
 六度迄は落馬あり。志まぐ。は寝あふざりしゆることぞ。宇治橋三間引弛し。平等院に入れ  
 奉りて休息ありし。六波羅より。すいや宮こそ。南都へ落させ給ふあれ。追かけて討奉れ  
 とて。大將軍に。左兵衛督知盛。頭中將重衡。薩摩守忠度。侍大將に。上総守忠清。其  
 子上總太郎判官忠綱。飛彈守景家。其子飛彈太郎判官景高。高橋判官長綱。河内判官秀國。武

藏三郎左衛門有國。越中次郎兵衛盛續。上總五郎兵衛忠光。悪七兵衛景清を先として。都合其  
 勢二万八千餘騎木幡山を打越て。宇治橋の詰を押し寄たり。敵平等院よこみてければ。間を  
 作ると三箇度。宮れ方よも。同じう間とぞ合せたる。先陣の橋を引さる。過すあといよ  
 とけれ共。後陣是を聞つけず。我先ふと進むほどに。先陣二百餘騎。身方お推落され。水も濁  
 れ失おけり。さるほどに。両方の橋の詰を打立て矢合せす。宮れ方より大矢俊長。五智院  
 但馬。渡邊省。授續源。太が射ける矢を楯も堪ず。鎧もかけず。透りけり。源三位入道。の  
 今日と最期とや思れけん。長絹の鎧直垂に。科皮威。是古武州品川。の鎧着て。態ど胃とば着給  
 ず。嫡子伊豆守仲綱。赤地の錦の直垂に。黒糸威の鎧。弓をつよく引ん爲。是も兜の着ざ  
 りけり。爰に五智院但馬大長刀と。提唯一人進ける。平家には是を見射取やとて。さんぐに  
 射ると。但馬少も騒ず。揚る矢の潜を降る矢を。跳り越。向て来る。長刀にて切て落す。敵味  
 方ひとしく見物せし。矢切の但馬といわれける。また堂衆の中に。筒井淨妙明秀。の黒  
 草の鎧に。五枚甲の緒を締。黒漆の太刀と帯。大長刀と提。是もひとしくす。み來りしが。  
 敵合違さゆる。長刀と捨弓に矢と番へ。矢庭に敵十二人を射取。十一人に手負せ。敵に唯一筋



殺りける。又も長刀取上橋桁とさらく渡りける。長刀にて向ふ敵五人薙伏。六人の敵に逢。長刀中より打折て捨。太刀引抜て戦ひけるが。敵八人切伏たる内。兜の鉢に厳しく打當目貫元より折て。河へ落ける故。頼處の腰刀にて。死狂ふ働さける。乘圓房慶秀が召仕ける。一來法師と云剛の者。後についくとみへしが。橋桁扶淨妙前に在て通難さま。御免いへとて。淨妙の兜の鏝に手を於てひらりと肩と跳越て戦ひけるが。多く敵と討取。其身も討死す。淨妙房も引取平等院の芝の上に。物の具脱で休むが。矢目を算れば。六十三裏搔矢五所。淨妙と手本として三井寺の大衆。源三位入道の一類。渡邊黨走り續く橋の行桁と渡り。火花を散し戦ふたり。平家の侍大將。上總守忠清。大將知盛の前に參。あれは覽いへ。橋の上の戦。火出るべり手痛くみへい。今川と渡すべく存いが。折節五月雨の比。水益つていへ。馬人多く亡びいあん。淀一口へや向ふべき。河内路へや廻。いんやと受けられ。下野國住人。足利又太郎忠綱。生年十七歳あるが進み出。目にかゝる敵を討ずして。宮と南都へ入参させ。吉野兵庫川の勢共。馳集て。彌は大事みてい。川と隔たる軍に。淵瀬を厭ひいへ。武藏上野の境ある。利根川とさへ新田入道渡しに。此川早深。利根

川程にも有べからず。某こそ先陣を渡しいんとて。よつ先に打入。つつけや殿原と呼れ。大胡。大室。深須。山上。那波太郎。佐貫廣綱。四郎大夫。小野寺禪師。透屋子四郎。郎等。宇夫方次郎。切生六郎。田中宗太を始として。三百餘騎を續ける。足利又太郎大音聲に。弱き馬をを下手に立よ。強き馬に上手なせ。馬の足の及ぶほどの。手綱を呉て歩せよ。撥ばかり繰りおま。練泳せよ。下ろ者をば。弓の弾に取付せよ。手に手と取組。肩と並て渡すべし。馬の頭沈まば引上よ。痛う引て引被る。鞍壺は能乗定つて。鎧を強う踏。水溜に上頭の上に乘掛れ。河中おて弓引る。敵射る共。相引す。常お鏝と傾よ。痛う傾。天透射す。馬に弱ふ。水よ強う中るべし。曲尺は渡して推落さる。水にまゐうて渡せやと。淀とあし。三百餘騎一人も流さず。向の岸お颯とぞ打上たる。足利の朽葉の綾の直垂。赤草威の鎧着て高角打たる。兜の緒と縮。金作の太刀と帯。切符の矢お滋藤の弓と持。芦毛ある馬に金復輪の鞍置てぞ乗たどけるが。鎧踏張立わが。大音揚。昔朝敵將門と亡し。勅賞蒙り。名と後代に上たりし。田原秀郷二十代の後胤。下野國住人。足利太郎俊綱の。一子。又太郎田原忠綱。生年十七歳。無位無官の身に。宮へ矢と放つと。天の恐いへ共。具加の程。平家の上おこそ留りいぬ。